麻生路郎主宰

# 川柳雜誌

二月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和八年二月一日發行（毎月一回一日發行）　第十卷　第二號　川柳雜誌社發行

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髄脳

# 伊豆椿ポマード

國産唯一 大島椿の精

今直に御愛用下さい
全國有名化粧品藥店にあり

伊豆椿香油本舗

# 清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社釀

# 川柳雜誌 第十卷第二號 目次

題字 麻生路郎　表紙繪 小寺鳩甫


僕は今……麻生路郎…(五)
斷章……松丘町二…(四〇)
川柳を人間譯した如な ワグネル……寺川信…(四三)
武玉川初篇研究(九)……梅本秋農 森蛭子東魚屋省二…(六)
千日前今昔史(五)……木村半文錢…(四八)
噫愚陀……住田亂耽…(五三)
愚陀君を悼む……松丘町二…(五六)
合評 句を味ふ……町二・山雨樓・閑生…(一七)
肱枕艸紙……梅本塵山…(四四)
青々氏の古川柳抄記へ……蛭子省二…(二〇)
キング初春……住田亂耽…(三三)
松蟲花壇の夜宴……西田艸樂…(六二)
三笠附に據る流人……藤里好古…(五六)

川柳街談話……定九郎老人…(四六)

飛燕往來……諸家…(二四)

佛の事ども……森東魚…(三〇)

豊橋を訪ふ……生田翠夢…(三三)

心のふるさと……松丘町二…(三四)

川柳塔……森東魚…(二三)

艸樂、町二、閑生、新水、柳路、雅幽、杏三、亂耽、水車、綠雨、夕鐘、日本村、英賀夫、明珠、靜太、綠之助、鮎美、濁水、華水、春秋、豆秋、民郎、梅里、紅汲食子、天痴人、一杉、光哉、禿山、翠夢、蒼太、小柳子、美夜路、夢裡、

粒々集……(二六)

五健一徹柳秀

近作柳樽……麻生路郎選…(二四)

光耀抄……麻生葭乃選…(四六)

一路集……(五七)

影……前田雀郎選　姿……住田亂耽選

半額……尼綠之助選

各地柳壇……(六一)

西之町MEMO……綠雨…(五七)　編輯の窓……葭乃女史…(八二)

盛觀を極めた

# 本社十週年祝賀記念大會

氏古好里藤る語を「人流る據に附笠三」は圖上
プツナスの人柳せる席出に會大は圖下

一月十五日　大阪道頓堀倶楽部に於て（若城寫眞館撮影）

# 僕は今

麻生路郎

**舊冬から三三年へかけてあまりにも無理をした結果、僕は今、病臥してゐる。**

×

綠雨と杏三と霞乃が僕の枕許で泣き出しさうな顏をしてゐる。僕が涙を流して叱るからだ。

×

疲勞から遂に下痢をはじめたのでスツカリ絶食療法をやつてゐる。全く腰が千裂れて飛びさうだ。しかし僕は天井を凝視めたまゝ編輯變への指圖に全力をあげてゐる。

×

僕は飽くまで無理を愛し、極力墮力を憎む。そこによき詩が生れ、よき雜誌がある。

×

その外に何もなし。
その外に何もなし。

**—この短き言葉を若くして逝ける愚陀見卓の靈に捧ぐ。**

# 武玉川初篇研究（九）

梅本秋農屋
森東魚
蛭子省二

**省** 二＝タンにて可。私の見た原本は頗る不鮮明に刷れてゐた。

**(210) 草履取面白からぬ數寄屋河岸**

**省** 二＝江戸三十六見附に數寄屋橋あり、城の外濠に架する橋―その河岸では（羅生門河岸などと違ふから）草履取連中に面白からう筈はない。（此解再考中）

**東** 魚＝前説の如くであらう。

**秋農屋**＝不明。

**(211) 隙かして拍子の揃ふ紙きぬた**

**省** 二＝隙であるから、面白く拍子が揃ふ。

**東** 魚＝忙しい時には、調子を揃へる事が出來ず、亂調子になる。

**秋農屋**＝贊成。

**(212) 用に立たを聞ぬ突棒**

**省** 二＝三ツ道具と稱して突棒、袖搦、刺股は召捕用具。柄

**(208) 命とはあたりまかせな言葉也**

**東** 魚＝誰々命なども隨分いゝ加減なものだと云ふ位の心持ではないか。

**秋農屋**＝誰々命といふと、腕の入黑子と聞えるが、これは汝の爲ならば、何時でも俺の命をやるなどと、口先ばかりで命の安賣をすると云ふのだと思ふ。

**省** 二＝「しるし也」でなく「言葉也」だから、そのまゝに言語と解して可ならむ。

**(209) 這ふ子の口に人形の舟**

**東** 魚＝半狂堂本及興文社本共に「舟」となつてゐるが、原本の草體を誤讀したのか、活字の誤植かである。原本は「丹」（べに）とよむべきものと考へる。句意は人形を舐めたので兒の口に「丹」がついたといふ細い所を捉へたのである。

**秋農屋**＝「丹」は「べに」と訓むよりも、猶且「たん」と音讀する方が宜いと思ふ。

の長い先きの撞木形に鐵製のかぎがついてゐる。それに衣服をからめて取る。ツクボウといふ。「突棒がみえると撥を下に置き」は船留所の句、威勢を示すもの。

**東　魚**＝奇拔な事を咏むだものだ。滅多に突棒や刺股を使ふ様な大捕物はない。要するに示威的に役立つてゐる方が大部分である。

**秋農屋**＝江戸時代には、千代田城の見附、各大名邸の辻番所等には、三つ道具が飾つて有つた。突棒は丁字形のもの、刺股は兜の鍬形のやうなもの、鎌は袖搦とも云つて篆書の本の字のやうな物である。

**(213)　初鰹死た　隣　てそっと　呼ふ**

**省　二**＝初鰹禮讃。禮儀としても當然お隣への遠慮。通り句「葬禮をみて初鰹値が出來る」を列べて置く。

**東　魚**＝いつ死ぬか分らないからと云ふ人生觀もあらうが、これは隣への遠慮の心持に重點がある。

**秋農屋**＝隣家へ遠慮する處に、人情味が有るので、葬禮を看て買ふよりも、少し複雜な句である。

**(214)　息杖のうち　掃かけて　待ツ**

**省　二**＝息杖ついて肩を替へる。「掃かけて待つ」は、いかに生場面をいかして居るか。

**東　魚**＝肩を替へる時に、駕籠の棒に杖を突かつて一寸休む其場合である。掃かけてまつは全く面白い場面を捉へたものだ。

**秋農屋**＝息杖といふけれども、決して息をついて休むものではなく、肩を替る一瞬間のことである。

**(215)　歌ていかねはへったりと文**

**省　二**＝歌で意志表示をしても、返歌のない時は、ねばり强く第二の手段として、文で心情を詳かに打ける。戀を訴へる當然の手續きではあらう。「惚れた公家つけ短冊をして口說き」、此次ぎが附文だ。

**東　魚**＝「べったり」が如何にも面白い。連句の方でも「べた付」と云ふ言葉がある。要するにべったりと平明に廻りくどくなくと云ふ意味合であらう。

**秋農屋**＝其例は高師直にある。

**(216)　御符もらいの行あたる駕**

**省　二**＝お寺繁榮策として、御符を授與したもの、例へば雜司ヶ谷鬼子母神なども出し、殊に堀の内妙法寺のお張御符は有名であつた。「新宿でお張御符の才覺し」など詠まる。行き當る程急ぐ、それが駕である處に復雜がわく。

**東　魚**＝行きあたるで、一心に御符をもらひに、ひたすら急ぐ人が想像される。

**秋農屋**＝大病人の生命が危篤に陷ると、御貼御符を頂きに行くのであるから、駕籠を飛ばせるので、近頃は牛込南榎町宗柏寺の御貼御符が殊に有名である。此御符に病氣を癒すのではなくて、病苦を除く爲に頂いて來るのだ、これを病人の枕上に貼つて置くと、三日以内に必ず死すと云ふ。

**(217)　貰いさかなのさがるうたた寢**

**省　二**＝貰つた肴が釣されてゐる、氣になりつつうたた寢。

**東　魚**＝「さがる」は釣す事かしらん。うたたねをして居る間に、新鮮な魚が、ちと値打が下がつたと云ふ様な事ではなからうか。

**秋農屋**＝値打が低落するのであらう。

**(218)　身のうちは眼斗出して玉霰**

**省　二**＝お高祖頭巾でも被つてゆく婦人が思はれる。

**東　魚**＝男でもよさそうに思ふが、前句次第。

秋農屋＝男とも女とも決し難い、宗十郎頭巾らしく思はる。

**(219) 何かにつけておとこ兄弟**

省　二＝いざとなると男兄弟でなくては、相談相手力頼みにならぬもの、よし平素仲が悪るくても。

東　魚＝巧くうがつた句だ。言廻しも簡にして要を得てゐる

秋農屋＝自分は兄弟が無いが、一人は有つても宜いと思ふ時がある。

**(220) 深くはいれは法の吉原**

省　二＝悟入透斷。

東　魚＝遊び盡してみれば又そこに悟道がある。理窟めいた句で、理窟らしく響かぬ點は、句調が詠歎味を帶びてゐるからであらう。

秋農屋＝色卽是空。

**(221) 財布てぶつて直に勘當**

省　二＝親の慈悲。古川柳に「勘當を財布でたゝく母の慈悲」

東　魚＝いやに芝居氣のある句だ。少しくイヤ味に感じる。

秋農屋＝劇的氣分が濃厚すぎて、却て詩味が稀薄である。

**(222) 安い藥のまわる木食**

省　二＝私の如く年中服藥して居るものには、兎角藥の効能がみえぬ。木食生活者には安い普通藥でもまわりが良い。――然し「木食に又も女房の竈相して」ケイ」などをみると、木食といふものも、簡易生活とは云へぬかもしれぬ。

東　魚＝支那人に何病でも胃散が効くといふやうなもの。

秋農屋＝米を食はせても、病は癒えやう。

**(223) 傘をさす手は持ぬけいせい**

省　二＝古川柳では「傾城は傘をさす手はもたぬなり」。吉原道中繪卷物。

東　魚＝矢張り十四字の方が引緊つてゐる。大まかな古遊君の面影が忍ばれる。好きな句である。

秋農屋＝客をたらす手は持つてゐる。

**(224) 祈か利て宮芝居隙**

省　二＝雨乞の祈あらたかにして、神社境内の小屋掛芝居も人出がない。

東　魚＝隙はヒマであるか、スクであるか、スクがよいやうに考へる。

秋農屋＝例の俳人の當字で、「すく」に相違ない。

**(225) 季吟にたかる人も月花**

省　二＝北村季吟は近江北村の産、歌は雅草に學び、俳は貞德門、而て一家をなし旺む。芭蕉の如きも其門より出す。國學にも貢献し、源氏物語湖月抄、枕草子春曙抄其他著述多し。法印に叙せられた。寶永二年八十二歿。下谷池端正慶寺に葬る。月花は風流の謂。

東　魚＝「たかる」と云ふと何となく惡ひ意味合ひに現今では思はれるが、此頃では單に「集る」意で、惡い感じはなかつたのであらう。

秋農屋＝季吟は和歌俳諧よりも、連歌師として高名であつたと思ふ。「たかる」は少し下品な言語である。

**(226) 小つつみにほつ〳〵降は淋しけれ**

省　二＝小雨降る日の小鼓の稽古。

東　魚＝春雲の靜かさを思ふ。

秋農屋＝春雨としても秋雨としても、寂寥の光景が顯はれてゐる。

**(227) 此反り橋にほしき牛若**

省　二＝反り橋をみれば牛若を思出すは、私など幼少時の常

識であつた。「風俗研究」誌九十五號に江馬氏が、國定小學教科書の挿畫の誤謬を指摘し、牛若辯慶五條の橋の畫に就て詳細に論じて居らるゝ。

**東　魚**＝牛若の薄衣を被いた姿こそ、全く反り橋に適はしい氣がされる。

**秋農屋**＝五條の橋は反つてゐないが、繪畫にあると大いに反つて居るやうに描く。

**(228)　松茸も喰ぬ物なら小間物屋**

**省　二**＝小間物屋は本職の外に、附けたりの怪しい品物を勸めた句が甚だ多い。此句もそういふ臭ひする。

**東　魚**＝「喰ぬ」は「喰えぬ」であらう。喰えぬものだつたら、小間物屋に扱はせればいゝ、とバレ味の諧謔、ちとあくどい樣に思ふ。

**秋農屋**＝これは俳諧でなくて、川柳畑のものである。

**(229)　筏さし疊の上へ世をのかれ**

**省　二**＝水で果つべき運命の筏さしが、疊の上に隱遁する。「筏さし陸へ上れは只の人」(武九)

**東　魚**＝水上生活をやめた老後の氣安さ。

**秋農屋**＝「川立は川で果る」といふ俗諺は有れど、疊の上で死ぬのも又愛たい。

**(230)　牛に乘る日は遠い鎌くら**

**東　魚**＝馬で行けば近く感ずるのに、といふだけではないか特にどう云ふ場合に牛に乘るとの謂れがある釋けではなからう

**秋農屋**＝何故に牛を見出したのか、其理由が不明。

**省　二**＝一九の「滑稽江之島家土産」にも、牛に乘つて廻る所があり、鎌倉は牛に緣が多いやうに思ふ。「馬に仕立る鎌倉の牛」ム六。「鎌倉に牛のうづまる稻葉雲」(ム十一)。

**(231)　駕から水を貰ふ六月**

**東　魚**＝炎天の駕では乘つてゐても渴く、駕を下りずに飲水を所望する。

**秋農屋**＝東海道逢坂の走井が、聯想される。

**省　二**＝走井の繪をみると、三名水の一つ丈けに淸冽を感じ「夏日往來の人渴を凌ぐの便とす」とある。明治大帝御遷都の際御駐輦遊ばされ　由。橋本關雪氏の邸內に取込まれたとかで此水に關する著述があつた筈。

**(232)　海士の子の頰を舐れは鹽はゆき**

**東　魚**＝潮風にさらされてゐる海士の子、頰も鹽からい。(實際海水浴などにいつてゐると、腕など舐めてみて鹽からい)輕い可笑味であらう。

**秋農屋**＝海士の子の頰では、舐り榮えがしない。

**省　二**＝海士の子ではよく浸込むで居るだらう。呵々。

**(233)　坊主と中のわるい煩い**

**東　魚**＝加持祈禱を厭ふやうな、何かものに憑かれたやうな煩をしてゐる場合かと思はれる。

**秋農屋**＝平安朝時代には、普通の病をも、物の怪の所爲として、坊主に祈禱をさせたから、仲の惡い患者も有つたらう。

**省　二**＝患者の氣分が、多少變になつて、祈禱坊主の惡口でもいふ場合かと思つてゐた。

**(234)　はけしい親の呵そこない**

**東　魚**＝呵過きて却て惡い結果になつた。死ぬ程の事もなかつたにと、後で歎くやうな場合か。

**秋農屋**＝情死する程ならば、二人添はしてやつたものを、後悔は先に立たず、南無阿彌陀佛。

**省　二**＝年頃の者は、うつかり叱りつけられぬ。「むすこを呵る聲もかからくり」(ム七)位の心得は必要だ。

**(235)　禁酒して何を賴の夕しくれ**

**省　二**＝のつぴきならぬ譯なくしては禁酒は出ぬ丈けに世間

が狹くなつた思ひがする。殊に夕時雨の靜さに、身の置所もない感があらう。—「不斷櫻」には「禁酒してあなおほつかな秋の暮」と禁酒は破れ勝ちなもの。

**東**　魚＝禁酒の體驗は再々ある。全く當座はあじきない心持がする。ましてや夕時雨、思合して苦笑に堪へぬ。

**秋農屋**＝自身に禁酒の體驗は無いが、時雨のふる夕の寂しさは、殊に心細いであらう。

**(236)　烏もニツ雪のぬり下駄**

**省**　二＝烏と塗下駄二ツつつ。雪を全景としての點綴。

**東**　魚＝雪に下立つた二羽の烏、塗下駄を脱捨たやうだとの見立ではなからうか。「も」の見方では前說のやうにもある。

**秋農屋**＝東魚君說の如くであらう。少し作り過ぎた。

**(237)　かもしを拔てかゝる關の戸**

**省**　二＝關所を通る女の用意。

**東**　魚＝關所へかゝる日は山路をゆかねばならぬから、髮もちやんと重い髻にしてゐられぬ。かもじも拔いて輕い、きりつとした束ね髮で甲斐々々しい支度でかゝるとの意かと思ふ。

**秋農屋**＝昔の箱根の關所などでは、人見女といふ者が居て、東より西へ行く婦女を改め、不審のものと看ると、髻を解て髮の中まで檢査したと云ふから、關に懸る女達は豫め檢査を受る用意をして、かもじを拔くといふのであらう。

**(238)　大神樂男日照の下へ來る**

**省**　二＝（私解全然誤謬に付取消す）

**東**　魚＝姫を上座に奧女中達の前に呼ばれるのであらう。

**秋農屋**＝大名屋敷の御物見に於て、奧女中達が大神樂をみるのだ。大神樂の親方は、黑羽二重の小袖に白博多の帶を締め、腰に小刀を佩びてきたが、其中に好男子の親方も有つたから、女中達は目を細くして、看惚れた事であらう。

**(239)　婆々か昔は指折の海士**

**省**　二＝評判の高かつた若い時代の面影が殘る。—失禮ながら、我がオリンピック女子水泳選手の老後吟に換え得る。

**東**　魚＝何となく姿も髮も美しかつたやうに想像される。

**秋農屋**＝謠曲「海士」に脚色された、志度の浦の海士のやうに、大宮人の寵を受けた者もある故、澁紙色をした皺くちや婆でも、若い時には濱の千鳥を啼かしたであらう。

**(240)　主從か裸にされて雉子の聲**

**省**　二＝追剝に一物もなく奪はれる。雉子も驚いて其聲が鋭い。

**東**　魚＝雉子の聲で山路を現はしたのである。

**秋農屋**＝摺針峠か、碓氷峠か。

**(241)　みな仇事のほた餅か來**

**東**　魚＝何もかも仇事になつて、彼氏も四十九日のぼた餅になつたといふ意かと思ふ。

**秋農屋**＝灸も鍼も祈禱も呪禁も、只一重の牡丹餅と成り了つた。

**省**　二＝淋しい牡丹餅だ。—（斯る場合には牡丹餅の名が應はしくない思ひがする。砂糖でも利いてゐない方がよい）。

**(242)　ふり付の心の屆く衣かへ**

**東**　魚＝衣更の着こなしぶりに、踊の素養がうかゞはれるといふ意ではないか。

**秋農屋**＝藤間、花柳のお師匠さん。

**省**　二＝考へ過ぎた句だ。

**(243)　長刀で娵くるみ弟子に取**

**東**　魚＝原本の讀み損じて、娵ではなく婿である。お孃さんと賴もしい腰元と二人、長刀の弟子にする意であらう。

**秋農屋**＝如何にも首肯される。

**省**　二＝「長刀で」も良し。

**(244)　手を握られて顏は見ぬ物**

**東**　魚＝此調子なら願望は成就する。娘は手を握られては、恥しさに顏は得上げぬ。

**秋農屋**＝東魚君は經驗が有るとみえる、艶福羨む可し。

省　二＝暫くは茫然として、見えぬかもしれぬ。

**(245) 更行春に禿苦になる**

東　魚＝いつまで禿でも置かれまい。何かにつけて金が先立つ苦勞であらう。
秋農屋＝草も生へ花も咲く。
省　二＝氣づかぬ間に、大きくなるものだ。

**(246) 都のうつけ赤貝に泣く**

秋農屋＝銚子の帥となつた馬鹿息子が、濱で採れた赤貝をつくづくみて、漸く忘れかけたある物を想出し、窃に袖を絞るのであらう。
省　二＝赤貝にそういふ用法はいくらもあるが、さりとは思ひつかざりし。
東　魚＝銚子とは氣付きませんでした。「泣く」をあんまり眞面目に考へて、今更いまくしい氣かする。呵々。

**(247) 砂糖のやうな京へ縁組**

省　二＝甘いから物優しい、しとやか、などの意が含む。こんな句もある。「砂糖氣の過て聖連櫻狩」(李條)。
東　魚＝さつぱりしてゐる江戸が裏面に匂はしてあるのであらう。
秋農屋＝京が砂糖ならば、江戸は鹽でもあらう歟。

**(248) 笠の雪崩れぬやうに脱て見**

省　二＝「我が雪と思へばかるし笠の上」(其角)に對照すると「見る」であらうが、「見せ」とした方が相手も出來て複雜となる頭に頂く笠であるから感じがよい。
東　魚＝「見る」ではないか、大分重いが隨分積たらうとの心持ちも手傳つて、美しいものを崩さぬやうに脱く意であらう。
秋農屋＝「見る」に贊成する。

**(249) そう笑つては辷る反り橋**

省　二＝太鼓橋にはサンを附けてあるが、それにしても油斷がならぬ。「反橋は乳母一生の難所なり」の外、「生酔の齒の立ぬ反橋」(武十一)。「をろかな顔の並ぶ反橋」(武十三)等、反橋は色々と材料になつて居る。
東　魚＝長閑な感じがする。
秋農屋＝若い女中達の神詣らしい、朗かな光景である。

**(250) 仕着の不足下に着て出る**

省　二＝四季施といふ如く、四季に渡つたものが、夏冬の二度となる。「下に着て出る」は、遺憾なく不足を現はして居る。
東　魚＝主人の手前は着て出るものの、其下には自分の氣に入つたのを着込むてゐる。出れば上丈け脱く氣だ。「頂いて四季施の不足舌を出し」た奴である。
秋農屋＝此雇人、決して只の鼠で無い。

**(251) 朝寢する町は鳥居の右左**

省　二＝鳥居兩側の土産物賣る櫛比する街。
東　魚＝土産物賣る店は朝寢には適切でないと思ふ。鳥居の右左は正面通り左右と解せず、社の左右と考へてよろしからう私は芝の神明ありの矢場を想像する。
秋農屋＝江戸ならば淺草の三社、京都ならば祇園の社。
省　二＝何れの説も適合する、例へば淺草二王門前通りの如き朝寢の氣味なしとせず。―然し矢場など面白からむ。又左右は界隈の謂でよい。

**(252) 母はとり込む雨の錦木**

省　二＝謡「錦木」に、旅僧が謂れを尋ねると、「昔より此處(陸奥)の習にて、男女の媒には、此錦木を作り、女の家の門に立つる、しるしの木なれば、美しく色どり飾りて、之を錦木といふ、さる程に逢ふべき男の錦木をは取入れ、逢ふまじきをば取入れねば、或は百夜三年までも立てしによつて千束ともよめり」と。雨にぬるゝ錦木を母が取込むところに、愛情がこもる。
秋農屋＝錦木を取入れると、男の戀を應諾する事となるからたとひ雨が降出すとも、母が自身に取込むのは、越權の所置であると思ふ。今更理窟をいつても仕方が無いけれども。
東　魚＝流石に娘氣の自ら取入れたくも、躊躇するのであらう。娘心を思ひやつた母が雨に濡れるさへいとほしい、取入れてやるのであらう。

# 川柳塔

一路郎選

西田　艸樂

縫ふ事を覺へ來た娘へ買へぬなり
恐れ入つてゐるにも一度言はされる
一夫一婦それを忘れた遊びぢやない
俺の肚を知つてる上は遠慮せぬ
灰深い火種へ寢正月も暮れ
子煩惱來て見りやほんに子煩惱
寢返れば風の流の中の夜具
寄席へ來て體溫計るお正月

破れるほど戸を叩いて今治水一つ
感謝だけする神ならばあつてよし

松丘町　二

わが部屋の空氣を染めて女去り
兒はきたなくてうるさくてはぢけるやうな明るさ
風よ風は貧しきものゝ心知る
サロン夜にして切れながの眼が黑く煙るよ
月出でゝいよいよ暗き家並ぞや
大きく泣いてプロレタリアの子が育つ
妻の眼の濁りて貧を訴ふる
インキ瓶がひつくり返つた二月の机

阿部閑生

おとがひも浸けて初湯のちと溢れ
盃のこぼれぬ程に手がふるひ
新しく照る日の下に自信なし
元日匆々氣まづい事を云ふ
おごられる氣おごる氣が變らないやうに

朝田新水

眞實な事を眼鏡の女給云ひ
濡衣を着たまゝ戻る十二月

弟を養ひかねて女給に出
金貸してまで見送つて來てくれる
ふるく醉ひふるく樂しむ正月ぞ
岩崎柳路

黑ダイヤ仲居の指が荒れて居る
アパートへ遊擊隊の兄が見え
日章旗はつきり見せて戰車隊
法醫學妻に尋ねる事が出來
關本雅幽

吊し柿誰が喰ふともなしに減り
愚陀君を弔
春の光りが冷めたく來てる四ツの窓
安西杏三

弔愚陀君
プールに波立たせし髪の今ははも
洋子納骨
骨壺に冬の陽杏か屆かざり
住田亂耽

愚陀を悼む
めがねに映りしまぼろしのかずかずよ
愚陀の母へさゝぐ
小さき母いよ〳〵小さく經をよむ

吉田水車

實印の用は保證するばかり
丸刈を笑ひしことの最後なる
橋本綠雨

お互が云ひ合ひこして日がながし
姫田夕鐘

父の艶嬉しきものゝひとつなる
資本金男になれと積んでくれ
麻雀が齒拔けになつた急な用
遊泳術をおそはつたおろかさ
茶屋の春柱時計の稼ぐこと
あてがひぶちの柄へ女將のきつう出る
柄にない丹前着せてもらふ春
岩垣日本村

學問は何のためかとつめよられ
一列に同し箸に餅をきり
音がする程の痛みをなでゝやり
お正月女給目立たず街を行く
大辻司郎式の笑ひで俺も行こ
何事も判こですますお役人

腹立つた事も去年になりにけり　荒井英賀夫

一家皆揃ふてお粥好いかげん
その日暮しも戀は好いもの
大晦日父の首筋細ふ見え
晦日にもあはてぬ内の門構へ
あれからは酒もつゝしみ居り候
幸福は嫁づく長女取りまいて
不孝にも女房の方の肩を持ち　西村明珠

もみ手から株が紳士にしてしまひ
デスマスクせめて笑つてゐてほしい

病氣して

約束をたんと殘したのがつらし
無雜作に泣ける躰が羨し
丸鉢上座も下座もなく話し
書置きを書くのではなし夜のしじま
友達が來て罐詰に智惠をかり　石森靜太

十二月素足で金を借りに行く
好きな女がナイトキャップを編んでゐる
そのうちになほりまつしやろ默しけり
大臣の漫畫になつた鼻の穴
ちちははがおわし自殺も出來ず病み　尼絲之助

ダイヤモンド煮ては喰へない尖りやう
母病めばかなしい事を言ひ給ふ
兄弟と呼ばれて握手手が痛し
情熱のさて金なきが腹立たし
胎動に女は決意したのなり　水谷鮎美

はゝのてにたんすはおもくひきだされ
先んずる人が集るエロの春
考へて笑ふたばこのさびしすぎ
てんぴんのゆげにふかれてゐるわかさ
お人柄膝をくづさず醉ひ給ひ　中澤濁水

演習地あぶれたやうな十四五騎

先輩を古い暗記でうなづかせ
とりとめて入院までの馬鹿らしい
墓詣昔の崖も低いこと
つゝましい母の吹出す幼稚園　日野華水

初風呂へお客の名前云ふて來る
郊外の驛看板の巾に居る
正月のお寺靜かに猫がゐる
通過驛只眞白いシヨール居る　喜多春秋

女房のこの頃酌いでくれぬなり
母親へ茶碗突出す子が二人
立派さを見ろと招待したのなり
ほつとくといふ手に負けたヒステリー　須崎豆秋

催促に脚氣ひきずり乍ら來る
くゝられて刑事と話しながらゆく
寒いとこよつて乞食の子は坐り
初風呂の窓から青い空が見え　石曾根民郎

人格はそうかも知れず世を隱れ

晃卓君逝く

なゝとせの床のくぼみに師走の訃
とりあへず大人のオモチヤなるもよし
獨り身の溜息梅はこぼれ來る　白井梅里

二つ迄實例擧げて慣慨し
滿洲を想へとばかり雪が降り
かゝる日に我が小心の現はるゝ　熊谷紅

用がない筈俺は不器用
薄情な聲が聞える大晦日
舊地主埋立へ來て回顧する　市塲沒食子

エロ話し知らぬ顔して後家は縫ひ
二男又休暇を取つてスキーに出
親ごゝろ子ごゝろ嫁の事でもめ　廣江天痴人

縣豊會販路は胸にありといふ
豊會長縣會議長を兼ねて老ひ
紅顔はまだ失せぬに鬼中尉　阿形一杉

さりよげなく居れば輕薄者にされ
唇のかわくをうふと見て置かう

足袋はいて坐るはぢめの日記帳　水田光哉

かくもこころほそりし金をにくむ

長男五歳を迎ふ

自動車が書けてなんぼでもかく　奥野禿山

責任を知らぬ人等が上に立ち

あつさりと云ふてやつたと子にいかれ　生田翠夢

逢ひもどり他人の眼にもありありと

豊橋にて

風の音こゝは吉田の宿のあと　平井蒼太

ペン軸の飾りの金が嗤つてる

あゝ賣女基督のごと抱くかな　松下小柳子

元日もじつとしてゐぬ父の癖

忠實な妻にも似たる夜霧の灯　八木美夜路

酒さめてのちは浮世と覺ゆるよ　村松夢裡

親十週年路郎先生絲雨師に捧ぐ

鳥鳴いて鳥鳴いて十年の繪卷物

## 粒々集

—路郎選—

空にせよ景氣らしさの孤冠り　松山前田五健

凧の兒へ父親低くなつてやり

面白く失念をして猪口をうけ

お待せを快よい程繁昌し

嫉妬とは云はず第六感ですわ　大阪長谷川一徹

はや肌をまかせ悔なし銀狐

金遣れば離れの小間と云ふがあき

倚子に乘り此處に住もかと云ふマダム

人妻の賣られ來しかの口吻し

女達上野憎む事に決め　御影長柳秀

人間になる腹家出よく動き

判の要る話し電灯おろされる

大膽な女の智惠を寒う聞き

お光をあげてる母の背のまるみ

煙草店ハイ〳〵と姿が出る

# 句を味ふ

## ―新年號の三誌よりの―

二町・樓雨山　生閑

川柳塔より

てれくさく父の妾の子を葬り　かほる

**町　二**――「てれくさく」といふ初五は、多少の説明臭と洒落臭を持つてゐて、私は採らぬ。「父の妾の子を葬り」といふ折角のよい言葉を殺してゐる。尤も「總じて同一の歌にて極めてほめる處と、他の人の極めて誹る處とは、同じ點にある者に候」(子規)で「てれくさく」が作者の眞骨頂を表す語で、この句の生命だと褒める人があるかも知れんが……

**山雨樓**――父の妾の子、それは妾の連れ子でない限り異母兄弟である。切つても切れぬ血のつながりを持つ愛の連鎖帶でなければならぬ。只現今の社會制度乃至性道德から見て妾の子は日陰者であり、遺産への邪魔者となる。その妾腹のはらからが敢なく世を去つたと云ふことは一抹の淋しさの中に善意の安堵が感じられる。この妾の子はまだ子供であらう。そこに淡いしかし消え難い哀愁をしみ〴〵と味はされる。てれくさいと云ふ表情は世間体があるための遁辭であらう。しかしこの言葉が川柳家の眼に映じた悲劇に對してユーモラスな客觀性を如何にもよく表はしてゐる。葬りと書いておくりと讀ませる手法も老巧である。

**閑　生**――作句の態度よく、叙法よく、用語よく、そして內容に首を傾けさゝれる句である、凡そ世相が興隆の氣運にある時は人を驅つて物質慾にのみ憧憬せしめるが、廢頽の傾向を辿る時には動作の凡てを感覺的に導き入れるものである、この句一動作をなだらかに叙したゞけで洗練味の豊かなのはその爲めであらう、てれくさいといふ氣持に餘りにも當嵌り過ぎた內容であり、現實に立脚した側近の描寫であるか、てれくさくが生んだ虛構・妄誕の句でないかと、一應疑念を起させる不利はあるが、てれくさくの語が一種の執着を讀者に持たせる强みもある。

川柳塔より

首あげてまだ元日は暗いなり　綠雨

**山雨樓**――この句から早起をする綠雨氏の日常生活を差引くと、無味乾燥な殘滓となつてしまふ。常に早起であり勤勉であるところの彼氏であればこそ元旦の暗さに、そつと首をもたげて見た爲体が無限のユーモアを齎らしたのである。巧まざる、通常の、童心的な感情の躍動が元日と云ふ門戸をくゞることによつて、すばらしい微笑線を畫いてゐる句が句主の生活を通じて內容をより雄辯に物語るてふ好箇の實例を示した句だ。

**閑　生**――暖い日影に糞虫が頭を出すあの形で蒲團から首をあげてまだ白まぬ障子を見る、亦見る、それでゐて明けはなれても起きないんぢやないかと迄詮議する必要はない、子供の時分經驗した元旦の感激は、處世苦のまにまに消え去つて、今は只無事な家庭に無事な元日を迎へたい以上の慾念がない世間に從ふ世間並な心持で、元旦の闇を眺めてゐる、極めて平靜な句で、讀んで物足りなさはあり、膾吹くの嫌はあるが、それだけに野心も厭味もない。

**町　二**――例によつて地味な表現乍ら、しつかりと摑むものを摑んでゐる。この句を生んだのは、技巧でもなく、觀念でもなく、才氣でもなく、正に作者の誠實な心である。元日の

句のうちで、こんなに見事な定着をみせた句は、すくないと思ふ。

近作より

元旦だせめて眼鏡を拭きよう　路郎

**閑生**――川柳作家は必らずしも尖鋭でそして潔癖ではないにしても、眼鏡を拭くといふ所作は毎日、或は日に何回もすることだ、中には一つの癖になってゐる人さへある。この些事と結び付けて元旦の句が成らうとは思ひも寄らぬことである、今の自分、瞬間の自分を句にせんものと、誰しもその正體を探るのである、がそんな時に限って眼鏡を拭くことを忘れ勝ちの場合が多い。

この句は「元旦の自分」を深く凝視して、摑み來れる本來の面目を象徴するに、眼と最短距離にある双つのレンズを得たのである、元日も大晦日も同じことさなどゝ云はず、「せめて眼鏡を拭きましよう」と正月氣分にお附合ひして居るところ、社會に對し、亦自己に對する潛在皮肉があり、しかも眼鏡といふ物が近代生活のある種類を暗示してゐて、單純な表現が豊富な内容を盛ってゐると思ふ。

**町二**――心境の句として、作者の同揭十一句中での佳句である。いさゝかの自嘲と諦觀とを綯ひまぜたやうな複雜な感情を受取るが、迫力は弱い。所謂鈍角の句で、鋭鋒は内部に沈潛せしめて表面に出さぬ主張に立つ句だが、我ら鋭角の句を、作者に待つや久し

**山雨樓**――「約束の首とりにゆく　大三十日」から「元日の町はまばらに夜が明ける」に至る地球の一廻轉を、極度に芽出度がる人間の通有性は、世上多くの新年吟によって耳が蛸になるほど聞かされてゐる。當然來るべくして來た元日をそんなに吃驚して　あらたまる必要は別段ない筈なのに、世間のあはて方はどうだ。しかしまあ朔日と云ふ朝だ、せめて眼鏡位は拭いておこう、と落着拂つた心境の底から靜かに世相へ、大きな皮肉と揶揄の眼が向けられてゐる句だと思ふ。ものやはらかな情熱の中に氷のやうに冷鐵なメスが秘められてゐる。

近作柳樽より

衝動を抑へるバツト深う吸ひ　竹楓

**町二**――戀の衝動か、怒の衝動か、それとも悲しみの……いづれにせよ、衝動といふ激情を抑へた刹那の句としては、如何にも句のリズムが悠長である。よそごとに見える。若しまた第三者としての觀察句なら、つまらぬし、後からその時を顧みた場合の句なら、説明に過ぎぬ。但しバットを吸ふ覗ひ所は確かに面白い。

**山雨樓**――「ふあうすと」新年號には紋太氏の句に氣短かを起す代りに強く喫ふ」がある。一見同巧異曲の句想である。しかし紋太氏の句が、短氣を起すと云ふ刹那的な心理昂奮であるのに對して、竹楓君の句は暗に本能的な情熱をほのめかしてゐるだけ迫る力が大きく感じられる。更に「起す代りに」と云ふ俗な荒削りの言葉に對して「抑へるバット」は遙かに巧妙な表現だ。喫煙の習慣なき自分は「強く」と「深ふ」との體驗的判斷に苦しむが「○く喫ふ」と主觀語とした方がリズムは強くていゝと思ふ。吸ひは喫ひの方が適切な文字だ。

**閑生**――怒りの衝動、驚きの衝動、昂奮の中にある衝動その種類の如何を問はないがこの句から受ける感じは憤りの衝動である恐らくバットの煙は衝動を卷き込んで、腹中深く内攻するであらう、現在に堪へる無言の場面が何等の澁滯なく、力強く現はされてゐる。

川柳街一月號より

牡蠣船はあぶない霜が下り　幸男

**山雨樓**――この句スケッチ川柳から僅かに一歩を踏み出して、中七で俗語を巧みに生か

してゐるに過ぎず、取り立てゝ問題にする程の新鮮味とか獨創味とかがあるわけではないが妙に自分は氣に入つた。この句の價値を否定しやうとすればするほど棄て難い愛着を覺える。僕の句に「ちよこなんと花火工場のある田圃」と云ふのが自分乍ら好きであるがあながちおどけたつぶりな言葉を用ひた爲に自選を敢てするほどの自信を得たわけではない。句を生むだ環境と雰圍氣とが偶然僕の作句衝動を多分に刺激して生れたので忘れ難い句になつたのだらうと思ふ。幸男氏の人柄と好尚に對するおぼろげな記憶からこの句は微笑を以て肯けるものがある。も一つ突込んで云へば幸男氏が句に織り込まれ、句を僞つてゐないからだと思ふ。

**閑　生**――卒然としてこの句に對した時は霜が下りに時の矛盾を感じて納得し兼ねたが、丹念に見てゐると、最終の客となつて深夜に牡蠣船を出る二三人の情景となつて纒つた、等しく生を寫すにしても俳句はなまを寫し川柳はいきを寫す、おつとあぶないのあたり牡蠣船のいきを捉へた行き方である、何にでもあぶないものに、よいものがある。

**町　二**――久良岐氏が喜びさうな句である人を喰つたやうな表現が、面白さうに思へるが、讀返してゐると、どうも腑に落ちかねるやうな氣もしてくる。牡蠣船へ通ずる石段に霜が下りてゐて、辷りさうなので あらうか全くもつて私にはおつとあぶない。

ふあうすとより

働いて食へと都會の音がする　紋太

**閑　生**――都會の雜音は何處までも雜音ではあるが、積極的の響きであつて、教唆はあり誘惑はあるが、同情と救援がない、近來幾多の善人がこの噪音に卷き込まれ壓倒されたか數知れない、これを説明するのでは勿論なく、これを聞く位置を明確に示したのがこの句である、アリストテレス曰く奴隷は馬と人間の混血兒であると、血の通へる機械となつてこの雜音の中へ投じ得るものは、弱者中の强者であらうが、この音に鞭打たれて働いて食ふべく奮起する者は稀であらう、どしどし置き去りにして行く聲だからである、階級意識に立脚せずして階級生活の斷面を見せた句とも云へる。

**町　二**――こゝに都會の音とは、活動してゐる色々な機械や人間の奏でる總ての雜音を指すものとして、どんな種類の音であるかは問はぬ。只觀念的で具象性の乏しいことを問ひたい。「食へるものは食へ」と正午の笛が鳴る」拙作で舊作で、禮を失するが、敢てかゝげて作者の叱正を待つ。

**山雨樓**――類句がありはせぬかと氣遣かはれる、上すべりした句だ。と云ふのは この句がもつ思想、觀念或は見方と云つたものが、餘りに類型的であり概念に近いからだ。三三年にはもつと深刻な踏み込んだ句想を期待したいと思ふ。とは云へこの句に紋太氏の響きと調子がつき廻つてゐるのは感じられ、或日の紋太氏に斯うした句想が湧いて、それを僞りなく自分のものとして創作されたものであらうことは疑を入れぬ。瑕瑾はこの句を世の中に出す前に、も一度振り向かなかつた輕卒さにあるのではなからうか。作句經年の長いもの程陣痛は輕いかも知れぬが句が帶びてくる責任は重い。

道ブラから天牛へ
書籍
賣買　天牛本店
大阪市南區日本橋南詰東入
南側（電話南二五四九番）

# 雜文二題

こゝへ私の「一雜機」を掲げる豫定であつたが遽に病臥したので、蛭子省二、住田麗院兩君の二文を掲載する事にした。拙文よりはずつと面白くて、有益だと思ふ。御愛讀を乞ふ。（病路郎）

## 青々氏の古川柳抄記へ

蛭子省二

松瀨青々氏主宰の俳誌「倦鳥」は、一度も手にした事がないから、二年前より連載して居らるゝ「古川柳抄記」（解説）を知る筈がない。偶々S F氏が御親切にも筆寫して、發送されたのを拜讀すると、流石は一方の古頭目丈けに、筆致簡潔にして要領を得、導かるゝ管がある。が又隨分突飛な謬釋だと思はせるものもあり、難句として互に熟考せねばならぬものもある。直接青々氏に御通信しようと思つても御住所は知り得ず、これを誌上にすると敢て禮を缺きはしまいと思ふ。決して揚足取り的な卑劣な動機からではなく、古川柳を誤傳さるゝを恐れての川柳家としての業であるを諒承して頂きたい。併せてF・S氏の御厚意にも答え得らるゝ。

正岡子規が川柳はつまらぬものだと嫌忌したとかで、彼れは四國猿だ、江戸ッ子の精神を理解し得よう筈がないと惡罵する一派がある。最近の「川柳みなと」誌には、「子規が川柳を嫌ひだと言つた證據はどこにある、いつ何へ置いたと折返し聞いてみると、はつきり知らぬしく、子規遺稿のどこかにあらうなどゝ言つて居り、更に根岸の子規庵を訪問した時、子規からさう言ふ話を聞いたといふやうな至極曖昧なものである」とある。子規の俳句革新運動當時に行はれてゐた川柳（舊派）狂句のみであり、又新川柳當初の作を現存の古い作者自らが見直したなら、其幼稚さに赤面するであらうから、徒らに他を嘲笑するは愚しい。故人に口なし、議論相手に化けて來ぬを、いい氣にすべきではない。古川柳に於ても吾等が二十四篇迄を眼目となし、以下は餘り省みないとすれば柳多留の七八割を子規に抹殺されても、苦情は言へぬ。須らく川柳家は大きい詩的態度を持すべきだ。現に子規門下の青々氏が、古川柳抄記に手をつけられたのは、古川柳への價値を認識し、或は認識せんとする努力で、吾等は俱に握手して精進すべきである。

只川柳家が俳句を研究する程俳人が川柳に思ひを寄せてゐないのは事實であつて、そは俳人の熱心不足を示すのみだ某學者が、川柳を語ると川柳家が直ぐに突込むでくるのでうつかり筆は採れぬと言はれたそうだ。學者も怖れる程眞摯であり、眞劍である證左にして、突込む位の確心がない樣な調査ならば、何んの役に立たうぞ。又手本道に入る。

○米つきは箸をしごいてくひかかり

よくある事、機微を見付けてゐる

「よくある事」の謂の深淺により、句の生死に係る。古句の約束である大食漢の米搗にして、「しごいて」におかしみが出てくる。――此程度の解説

には善解して他句は通過するつもりだ。

○さむがつて質屋の見世でだだを言ひ

下層の生活苦、寒がつて自暴自棄となる所、切にしておもしろい

質屋の店先きで、着てゐる衣服を脱いで質草にするから、寒むがつてであり、だからダダを言ふのが痛切にして躍動する。句のネラヒ所を逸すると複雑味が湧かぬ。

○ふんどしもいらぬとむりに貰はれる

見込まれて婿養子に望まれる所

褌とあるから男性側に解されたのではあらうが、「裸でといへば娘はをかしがり」の通り句もあり、古句の約束に因つて、「いもじ迄先きから出來る美しさ」の、裸嫁。

○朔日の雪物さしでつもる也

朔日冬至の雪を何寸と量つて記録しておくのである

青々氏の名譽にかけて古句解への準備をしてゐて下さつたなら、此解はひど過ぎる。「八朔の雪あつらへる駿河町」八月朔日の白無垢の肚立には物差がゐる。

○通られぬならぬ所に禿居る

他の遊び場を求める男が通らんとする道筋に禿がゐるので逡巡とする所

と、ぼんやりした解でなく、「所」は大門。「禿」は例の伏勢

○船頭の足音を聞くいいすゝみ

屋根船など、櫂さす船頭の船べりを歩く音

師宣ゑがく船遊山、其他の浮世繪に現はれて居る如く、船頭が屋根に居る。だから足音を聞くので、「船頭を屋根へ上げたる面白さ」である。船べりを歩くのでは、いゝ涼みが利かぬ。

○ひきながら三味せんはこぶすす拂

お茶屋商賣などの煤掃の景と、限定する要なく、寧ろお茶屋商賣でない方が、即ち一般家庭の方が、「彈きながら」の煤拂氣分に、滑稽味があるのだ。

○どつからの文と内義にもぎ取られ

くだけた家庭生活

くだけた沙汰ではない。「狀さしへさゝぬで内儀承知せず吉原からの文を、もぎ取つたか内儀には角が生へて居る。

○かわらけの錢跡へ來て下戸はらび

酒の醉で山で土器投げた無暗矢鱈にするその跡へ連れの下戸の男が來てその代を拂ふ所

かわらけといい、下戸といい古句の類咏から、飛鳥山の光景と治定し得らる。

○桑の木の下で女房をめつけ出し

桑中の女と詩にも詠まれてある此句は淫奔な女をいふてゐるのである。

此解は全くお考へ違ひ、秋胡の妻である。列女傳に載る。秋胡は五年振りに家に歸える途に、桑を取る一美婦人を見て、車を下り、金をもて挑まむとす。秋胡家に入つて母に禮をなす、妻を見れば、乃ち桑を採りし婦であるのに、大に慚づ。妾下忍見不孝之人、遂去自投河而死で、後に廟を建て靈を慰むを、潔婦の祀といふのである。「桑をつむ女房に惚れる馬鹿な事」。

○いい年をして傾城のじやみをこふ

「じやみ」といふのは選り屑といふ程の意、傾城のじやみとは年のすつと若い遊女をいふ

「こふ」は「買ふ」の意

「川柳詩」誌には、「ぞうやくの馬子が交つて賭博じやみ」「村ぶげん娘が逃げて芝居じやみ」、「青雲が無くなつてから花はじやみ」を掲げ、俚言集覽の「事の成らんとして留まり止むを云ふ」を以て說明してある。轉用して新造の謂とはならう。

○かやの聲かすかに聞いて雨やどり

軒下の雨宿りに屋内の軒から小鮒がきこえてゐる所うつくしい女主の家と見える

俄かの大雷雨に雷除の軒を釣る鐶の音を聞く、雨宿りであらう——こんな解に三者一致

尙ほ一說はあれど、異見も出なば承はる事にしよう。

右は抄記第二十二回分三十四句中より拔きしものである

# キングの初春

住田亂ち

Dawn from the East
Peace from the Jeneva

「曉の鐘は東方より鳴り響き、平和の鳩はゼネバより飛び來る」こんな風に勝手にこの檄を頭中で意譯して素適な文句だなと思ひ乍ら、いゝ氣持になつて僕は路郎師と火鉢を中にして雜談してゐるのである。

「このビラは川柳の英譯みたいだね」。こゝに於てなつかしき喫茶店キングのインテリ主人は忽ちにして川柳詩人路郎の口吻に變る。

私の視線を一同轉して見るいつか路郎師が雜誌にかいておられた柳路君から送られた滿洲國のビラが四方の壁にかけられてある。

「歡迎和平信者國聯調査團」とか、中には陸軍中將森連の署名のある、今にもフアツショの嵐のまきおこりさうな、おつかないビラがあるなど、この所全く非常時喫茶店と言ふ感じである。

トラピストの彫刻、鐵齋の歡喜の額、支那のお面、ふぐ提灯、住吉踊の人形、油繪、そして路郎師自筆の短冊が、ETC.ETC詩人の手によつて按配せられてゐる風景——これ等のものが釀す微妙なるアトモスヒーアはとても私の拙筆では書きつくせない。所謂ビヨンド、デスクリプションである。

だからその實感を味ひたいて思ふ人はアズ、スーン、ナズ、われ等のキングを一度おとづれて見るべきである。實感は川柳家にとつては大切なものだからね——。

令嬢の純子さんが、第一戰に立たれてのサービスぶりもまた初春らしい嬉しいものである。

「あんたもう新年號の富士みやはつた。映畫と演藝は？」などと、入つて來たヨタ者の若人たちに、先づ雜誌をすゝめて見せてゐるあたり、仲々堂に入つたものだ。「あんた婦人雜誌よみはるか」と、彼等の一人が質問の一矢を發すると「あんな低級なもの見やへん。人間がわやになるわ」と完全に逆襲、見るにノツクアウトしてしまふ。

扉の開く音。どや〳〵とお客さんの御光來。商賣繁昌だ彼等の爲に、私達は自然に居城を明け渡すべく餘儀なくされる。彼等は群小映畫雜誌の頁をパラ〳〵とめくり乍ら、

A「俺の眉毛のうすいとこ大河內傳次郎に似てるやろ」。

B「なに、言ふてんねん。助

平眉毛しやがつて」。
C「俺水谷八重子に實際惚れとんねん。あいつシヤンな」
D「忠臣藏えゝやろな。上山草人もようやるぜ」
なんて勝手なナンセンスを蒸散さしてゐるあたり嬉しいかぎりだが、丁度氣狂い病院からの放送を聞いてゐる氣がするのである。
現代の喫茶店は、極く輕い初期の腦病患者の收容所でもあると私は思つたのである。
おつさんと言はれマツチをすつてやり　路郎
の句を思ひ出してひとりほゝえませられる。
この間、私とキング御主人は葭乃女史の心づくしのカツプの中に金粉のちら〳〵と舞ふておちる、千夜一夜の王子とお姫様がお召し上りになるやうな甘美なカクテルをちびり〳〵とやつてゐる。それは遠い昔の夢を私達の目の前へブリングしてくれるやうな氣のするカクテルだつた。
赤い唇古きパイプなど、流行唄をジヤン〳〵唄つてしまつて、私達並びにこの喫茶店經營者一同への勝手な熱の拜聽料なにがしかの勘定をおいて客が歸つたあとで、御主人は純子さんのサービスに對する熱心なコーチが始る。
不朽洞主人とキングの經營主との性格の使ひ分け、なか〳〵巧みなものである。
「今の様に、四人のお客さんで、テーブル四つもとられたらあかんぜ。お客さんが、入つて來たら、あんたが、リードして、サアどうぞこちらへどうぞ〳〵とうまいこと、アレーンヂせなあかんぜ、バスガールかて、うまいこと奥へつめるやろ。お客さんを壽司つめるやうに考へなあかんぜ。まるでお客さんは壽司と間違はれてしまつてゐる。しかし、高商出だけに、能率增進經營法の講義理に當る事を言はれる。然し純子さんの之に對する答へも亦ふるつてゐる。
「お客さんにも、心があるもん。そんならうまい事いかへん。」
この心の一語、人間を攫み得て妙、恐れ入る言葉である。
とかくするうち、機見女が來られ水車君來る。
豈樂しからずやである。早速路郎師の發言で小集を催す事になる。かほるさんを電話で呼ぶと身體にひまがあるけれど、今日は出られまへんといふ一寸判斷に苦しむ、かほるさん式の御返事只キングに因んで王様といふ題で、愈々句作する事に決定喫茶店キング忽ちにして眞劍な句作道場の空氣に包まれる。
句筐との睨み合ひ、しばし灯し頃に琴人夫妻の御入來。勿論挨拶もそこ〳〵小集の仲間に入つて貰ふ。
樂屋の方では、今年四つになる一歩君が、可愛い管を卷いてゐる。「おーい。一杯のもか。燗してな」。齡四つにして既にこの氣慨あり。唉ー後世畏るべし。
やがて路郎師の披講で、みんなテーブルにかたまり、正月らしく、チヨウダイ、頂戴チヨウタイの聲いともにぎやかにキング初春風景の第一場は幕。
終りに、多忙なお身體で、何くれ〳〵とお厄介をかけました。葭乃女史に深謝してこの筆を擱きます。

——一。三——

# 近作抑揚

路郎選

着飾つて塗つて間抜けた顔で居る　大阪　無鬼
ガンヂーに似た人も居て旅の汽車　同
人の紙幣上手によんで淋しがり　同
憂鬱へズボンのはねと靴のちび　同
減俸にかゝわりもなく兒は笑ひ　同
インチキの城コンクリで出來あがり　小松　しとし
事總べて忘れてみたい吹が出る　同
からつぽの金庫なれども嚴として　同
どの女でも空想の中に入れ　同
禪寺の庭は松葉の落ちてよき　同
十六の少女の素足生きてゐる　大阪　橙舍
ほゝゑみも美女なればこそ冷たかり　同
見てゐても動くものかと鰐のゐる　同
赤ちやんは馬賊の樣な冬帽子　同
眼を病んで居て足音に氣をつかひ　長野　柳兒

## 飛燕往來

仏信のこ　ですから公開を憚るやうなところは冒略、中略、下略、又は××の伏せ字にしました、御諒承を乞ふ。

▼**阿部閑生君**（東京）年内もいよ〳〵押詰りました昨日上京致しまして年末ぎり〳〵まで滯在するつもりです　燒殘りの白木屋が下半身だけで開店した當日で　燒け煽りといつた調子で歳末風景をこゝに引受けてゐます、強勢なものです　地下鐵がこの日京橋まで開通しましたのでこれにも試乘しました　無事御越年を祈ります。〈丸ノ内ホテル、閑生〉十二月廿五日（路郎、益爾宛）

▼**住田亂耽君**（魚崎）路郎先生二日は失禮致しました、あれより水車君と鳴門で一ぱいやりました、それから圓タクを拾はうと、千日前で「おーい、大軌まはつて、東雲町五十錢どないやあ」と云ふと七十錢お臭くなはれと云ふので、糞でもくらへとしばらく東へ歩いて止つてゐる圓タクに「おーい大軌まはつて」と言ひかけると助手が「さつきの口だんがな」と斷られた。何ぞはからん、同じ車をひやかしてゐたのです。私達が歩いた距離と同じ丈圓タクの奴も動てたわけです。之で水車君、もう圓タクは、コリ〳〵やと云ふので、とう〳〵大軌まで歩きました。察する所私は少しアルコールメニアになつていたのですね。併し正月らしいコントでせう。水車君曰く「之から圓タクのナンバー見ておかなあかん」と

情緒の灯旅愁を少しとり戻し　同

素直に拂へば月末淋しすぎ　同

まゝならぬ人生酒に味方され　同

編んで居て男と生れざりし悔　大阪　勝二

處女を失つた捨身を編みつゞけ　同

どん底のみじめさに寢てもう二日　同

湯豆腐に此の世の中がほゝ笑まれ　同

夢さめてほそきかひなを撫でゐたり　靈ケ池　愚龍

秋の雨かたかな好きの男ゐる　同

軍事費が數億さみし失業者　同

愛すればこそその主義なる同邦よ　同

おでん店腰から下へ時雨てる　大阪　木圭

冷酷に斷つて金庫締める音　同

抱負遠し忍苦の靴を磨いてる　同

神樣が見てゐるとして泣寢入り　神戸　晶彦

行末を聞けば醉ひませうと言ふ妓　同

子が出來ぬ伯母の美しさが淋し　同

夢の中にも商品を擴げたり　大阪　柳次

事件待つやうに巡査のあごのひも　同

菊香る部屋で痺が切れてゐる　同

御堂筋風景

なる程と恩ひました。大阪はそれにしても狹いですね。愚陀の家へ寄り、用件は片づきました。先生とこで決定した通りに、—別便で原稿の半端なもの送りました。お笑ひ草までに、おくさまによろしく。（路郎宛）

▼**龜井愚靈君**（靈ケ池）絲雨さん其後は暫らく御無沙汰いたして居ります新年號の川柳雜誌、感銘深く拜見いたしまして、で早速、お手紙を差し上げたいて考へてゐたのですがお正月の氣分に醉つてとう〳〵今日まで遲れて終ひました。

扉の、路郎先生夫妻の寫眞をみてゐると、何だか涙ぐましく先生の顏が悲壯にみえてしかたがないのです、中の文をちつとも讀んでゐないのに——中の文を讀んでから、もう一度みるとほんとうにそれこそ私のようなものは泣けてくるような氣がするのです、お元日の大朝

アラ、ギも二十五年となりにけり
アラ、ギを思へば涙ぐましも　茂吉氏

このうたの氣持と、十週年をお迎へになつた路郎先生の氣持がどこかで一致してゐるのではないかと思つてゐます、とにかく今度の雜誌だけは、値打ちがある思ひました、他のことについても色々、述べたいと思ひますが次にいたします。

八日は句會です、靜太君からお便りしたと思ひますが どうぞよろしくお願ひいたします

短冊展覽會は都合で 來月にしたいと考へて居りますが 何分の御後援お願ひいたしますいつもお願することばかりですけれど。

投球を禁ず銀行の板圍ひ　同　荷千
眉目清秀ちぎれかける金釦　同　同
人体部亡き慴重を聞かされる　盛夕池　同
神經にして院長は笑ふなり　沙門

咯血頻々

手紙破つて死の準備する　同

咯血回想

あの時に死ねばよかつたとも思ひ　同　一柳
母の會病氣見舞の禮を云ひ　堺　同
辨當のつめたさ語る母の會　同　同
低能の子の母親は缺席し　同　同
階段を尻から下りる落し物　大阪　大門
日曜の雜巾バケツ陽が當り　同　同

千日前

歡樂の灯にまぎれなきW・C　同　春光
寄せつけぬ顏で赤字を彈いてる　同　同
慢性でオブラートには用がなし　同　同
貞淑に倦いたでは妻やり切れず　同　佐津美
青い空抱いてる猫の眼に見つけ　同　同
死にゝ行く下駄とも知らず母は買ひ　同　同
戀よりも先きに覺えた煙草なり　同　同

ではお休を大事に失禮いたします。さようなら。一月五日（綠爾宛）

▼**大谷五花村君**（福島縣）拜啓新年の御慶目出度く申納め候 正月號川柳雜誌有り難く拜見仕候十週年記念の一月の會、嘸かし盛大な事と遠察仕り候、十二日の東京の會に出席の序川上三太郎氏と共に是非共久し振りの 大阪訪問をなさん計畫にて之有り候處、合憎な事突發仕り、十五日（丁度貴會のある日）小生等の會長、宮田氏（前の警視總監など やつた人）の息女の結婚式が 東京會館にあるので其日の五時から招待を受けて 出席する事にしてあり候爲め其後に於て 川柳雜誌を拜見十五日とカチ合ふ事となつた爲め 如何ともする能はず、甚だ遺憾乍ら十五日の會には出席出來ず悪からず思召し被下度候 結婚披露のシャンパンを馳走になり乍ら 遙かに同時刻の頃の貴會懇親會の 御盛會を祝福する事に致す可く候。

路郎先生初め皆々樣に 宜しく御傳え願上候

一月七日（綠爾宛）

▼**蛭子省二**（朝鮮）何年前かにお目に掛つた印象と、一月號のお寫眞とは、更にかわらぬ。「最近の」は、おまけではないかと夫妻で笑ふ少しは頭髪が薄くなりましたか。私は白い方が目立つてきた。御健安が嬉しい。藤本兄弟社主の堂々たる御風采は、創刊以來面倒を背負つて下さつた感謝と倶に欣快を覺えた。貴社は藤本氏に對し此好機に、報恩表示をせねばならぬ。是非御打合ありたい。路郎君の重患の折り私は氏に拜眉の幸を喪つてしまつ

藁屑に風強き日の憂鬱や　島根　與詩雄
松が鳴る故郷の唄が流れそだ　同
あはれ青春眉の重たい日が續く　同
偽りの涙と知らず罠に落ち　松江　玲人
安つぽい戀を彩るセレナーデ　同
SOS灰色の風が吼えてゐる　同
菊置くに借家の玄關せますぎる　兵庫　普天
犬鶏猫近所めい〳〵趣味を持ち　同

日曜風景

牛乳をねまきのまゝでとりに出る　同

松岡全權

ゼネバに動く世界を蹴らうではないか　島根　羅門
悲しき批判のくされたる酒よ　同
吹雪音立てゝ來たり部屋ぬちの孤獨　同
改札は美しい手をふと見上げ　今治　曉童
かんな屑ふんで大工の顔を見る　同
銀行の電話銀貨の音がする　同
帶解けばさら〳〵冬の音がして　松江　巷二
理想とは違ふ暮しの靴のひも　同
自惚と知つたノーチップの夜なり　同
陰の子も子だよ遺産を分けと云ふ　鳥取　暢山

た事は忌れられぬ。

晃卓君はお氣の毒でした。少しも知らなかつた。手紙や寫眞を送つても更に返事がこなかつた筈だ。私が東北川柳八月號に君の句に就て書いたのが、せめてもの慰めとなつた。「もう何んにたよる術なく陽を拜み」、こういふ作許りの君だ。惜しい。

「私の十年前」では、藤里氏と平井氏のに驚いて居る。特輯號の充實した意氣で、昭和八年を進行されたい。一月七日これから金魚を食べにゆく。（綠雨寫）

▼**木村半文錢君**（大阪）復啓川柳雜誌創刊十週年記念大會御開催の由先づ何より大兄のため、川柳雜誌のため、同人諸君のため、心から御祝辭を申述べます。淘に御目出度うさまと――

就ては、大會に出席せよとの御懇篤な御招き感謝の外ありません。實はイの一番に驅けつけて切めて駄辯に鞭をあて御祝ひの一席を申述べたいとも思ひますが、御承知の通り、小生近年トンと外出せず、他人樣と殆どもの言はず、六字通りの孤立生活をたのしんで居りますので、多人數の居らる會合の席へ顏出しすることは、ヒド〳〵慄れますし殊に小生のやうな人間が雜魚の　トトマツリを致しては却て失敗を多くいたす憂もありますので甚だ御言葉に背いて濟みませんが、やはり野におけげんげ草で、欠席さしていただきますその方が本人の身のためだと思ひますから――その點、御立腹なく御憫察の程を切望いたします。

賣名にあせるうそとは知つて容れ　同　島根
金借りに來る時丈けは世辭が過ぎ　同　一雄
戀人へ寄つてをしへる畫の月　同　大阪
なれなれしく寄れば畫ですよと女給　永樂
初夢は都會の灯をば見せて呉れ　同　三重
目の色をかへて寫眞を破るなり　迂均
顧客になつて柄擇るも店が閑　同　大和
事急に飯を食うてる子の元氣　翠峯
秋の田に出征さした老夫婦　同　大阪
三十の好きも嫌ひもあるものか　菊路
あれば飲み無ければ寢るも面白し　同　叢ヶ池
正直に子供はみんな云つてのけ　噴兒
あきらめた手足の前の自壁よ　同　松阪
藪醫者の靴の音する兎小屋　沃里
女工さんに畫の欠伸を見うけたり　同
子を連れて行くと蜜柑をもいで呉れ　同

### 靜ちやんの死

わか死の相かまつ毛が長かつた　青鬼　叢ヶ池
マスクかけて來る見舞ならやめてくれ　同
泣かされて來る子を叱る父であり　夜王　大阪
正月は故郷に歸る氣船世帶　同

尙ほ、當日御參會の諸氏、同人諸君にも、わけてよろしく御傳聲を願ひます。
御盛會の程と一層川柳雜誌社の御隆盛とを心からお祈申上ます。匆々一月十二日（露郎宛）

▼**前田五健君**（松江）お寒い事です、川柳雜誌創刊十周年記念大會を遲れ馳せ乍ら祝します

「月に旭にふりかへらぬ梅が咲き」　五健

×

まあ別紙を御覽下さい
松山へ來る御案內狀が北海道へ渡つてゐます　雪の中をくる〳〵廻つて、海峽を渡つて四國へ來たのです……それでも渡島の國福山局員は、コイツは松山だと眼を入れた所がエライです。
可愛さうな、案內狀、寒い雪國を通つて來た封筒を火鉢であたゝめて、やりました。
覗いた、六歲の長男欣一曰く「どうしてあぶるの……」「可愛さうだからさ」「破つたから痛むからなの……」「ムーン、まあ、さうさ」

×

テな工合で、折角の大會へ祝電も送らなかつた罪を謝します。一月二十一日（益爾宛）

▼**松盛琴人君**（大阪）十週年句會の參集者は百二十三名、祝電約三十本、無事終了、記念祝賀宴會も玉むしから一歩氏雨迷氏も出席　本社の爲め祝意を表してくれました、主幹の急病に一同憂慮一方ならず　會は先づ無事に終了いたしましたから御安心を、御病氣はどんな工合ですか直ぐにも伺ひたいのですが、會社

死ぬにしてもやせてゐるのが恥かしい　　蘆ヶ池　舟路

山桐の葉が散るごとに來る寒さ　　神戸　竹楓

門衛のどこか鋭い目の動き　　同

タイピスト思つたよりは内氣なり　　蘆ヶ池　露洲

大晦日たんすの位置もかへてみる　　同

先立ちし子へ佛だんの灯がともり　　大阪　詩郎

下駄迄が俺の氣持にぬげて居る　　同

京都にも妾の居てる旅役者　　愛媛　蛙念

秋の雨ガラ〳〵締めて寢て仕舞ひ　　同

米俵肩へも乘せず四十年　　大阪　いわを

滯納の父を信じて居る子等の　　同

うらゝかな日南松笠拾ふ身の　　同　あや美

母らしさ別れともないぐちになり

みつる君の滿洲進出を祝して

寂しさと別に奮勵してるなり　　同

十二月母に髪結ふ暇があり　　松江　淑子

十二月小兒保險は忘れてす　　同

よいと言ふ明日の運勢それもよし　　香川　三汀

舞妓三人銀扇サラリほうりたり　　同

ルンペンの日に惠まれて並んで居　　堺　平八

カナリヤのよく囀れり哀れなる　　同

へ出ましたので、只だ心配してゐるばかりです、どうか御靜養早く御回復下さる樣祈つてゐます、綠雨氏から聞けばお子達も寢て居られるとか、三人枕を並べてゐるといふ樣な、悲しい話でした、心配してゐます、宴會席上でも酒の席に主幹の姿の見えぬは淋しいと一歩氏が涙ぐましい程の氣持で私に話されて同氏の發聲で主幹の全快と健康を祈る爲一同が乾盃しました、不取敢報告旁々御伺ひ申ます。（路郎宛）

▼**竹内機見女君**（大阪）本日盛會裡に十周年の句會は終りました、私二時近く出席致しましたら路郎先生は御病氣とか承り大變に殘念に思はれました。

一日も早やく御全快を祈ります。

橋本さんの奥さまとお孃さんが見えたきりで光耀會の誰も來てくれませんでがつかりしました。女學生が四人位きて、上りかけて歸つてしまひました、私一生懸命で引きとめましたけれど。純さんのお友達ではなかつたかと思ひますが。原稿がおくれました。あしからず。亂筆にて御見舞まで、かしこ　莫乃宛）

▼**蛭子省二君**（朝鮮）啓肅、今日（一月十六日）は母の命日。年經てばたつ程慈母の愛が憶はれ有難さに涙こぼる。私の不行屆であつたのを懺悔せずには居れぬ。赤い色の關西日報を頂き幼時に偲ぶつでになりました。讀書界欄に於て武玉川研究が認識され後援の言葉を得た事は大に喜ぶ。一ヶ月も早く初篇は完載の希望に燃えてゐます。昨日の記念川柳會は御盛況にして氣焰も上つた事でしよう。十年

タイピスト對給仕小さい貸借　大阪　寂光
邪しまな野心へ女襟を見せ　同　沐天
此のお金なにとは強い振られ方　同　法泉子
生れたは赤い風車の廻るとこ　松江　法泉子
長男の趣味頼りなにことを云ふ　同　利生
バスの着く村で女給が二人下り　大阪　紫雲
叱られて歸つた父と知らずして　愛媛　紫雲
居残つて一人書いてるいゝ手紙　同　醉美
賢母てふ名に世間をば狹ふ住み　大阪寺　醉美
萬葉のこんな言葉が日本語か　同　方眠
夜の雨ハツピの二人朝鮮語　大阪　方眠
境遇の違ふ女へ女の目　同　青米
もろ〳〵の慾をはなれて死がちかし　同　青米
どれからが嘘かはなしにつりこまれ　同　北人
緞帳のおりた舞臺はのぞかれる　同　北人
泣かされる事が女に多すぎる　同　北人
どうしたらよいのか戀を知らぬ父　同　北人
時間勵行正直過ぎた背廣なり　同　雀子
もの皆が小さく見えて世にそむき　岡　雀子
障子から内も冬めく日となりぬ　同　朗
髭後の青く收入減るばかり　大阪　素月

は基礎だ。これから協力建築に着手しよう。（路郎宛）

## 佛の事ども

森　東魚

新年の朗かな氣分のぬけぬのに佛の事を書くのも異なものだが――今年は父の七周忌になる。父の死ンだのは正月の五日であつた、酒に親しんで一生を終つた。飲みさしの酒を德利に殘して枕頭に置いたまゝ卒然として逝つたのだ、末期の言葉は誰も聞かなかつた、餘りにも呆氣ない死であつた、洒脫な江戸者の死樣としては又羨しく思はれないでもない。越後屋三井は知つてゐても、百貨店三越へは一度も足踏みをしなかつた父であつた、アンナのは小賣商人泣かせだ、呉服屋が荒物屋みた樣に何でもかんでも賣る事はなからう――と奮慨した變り者の父であつた。帝劇へ行つた時、佛壇の中へ入つたやうだナと苦笑し、酒も煙草も飲ませ

せめてもと着る洋服の縞あらし　鳥取　同
貧しさの中の小さき炬燵なる　同　湖山
雪が降りや降るで儲けて居る火鉢　同　山
母は母姉は姉らし世辭を云ふ　大阪　白山

長女病む

其の頃は婦長でしたと體溫器　神戸　同
旅戻り机の塵を見て着換へ　同　玲樓
牛乳で育つた事を聞かされる　大阪　洋々
空つ風銅貨の落ちた石疊　同　同
ルンペンの焚火の仲に春があり　松江　靜一
シヤンデリヤにマダムの襟の情婦じみ　同　朗
女には弱い手相だと云はれ

あゝ靜ちやん

蓮の葉の影にかくれしかくれんば　大阪　流之助
冬の陽のかげをみつめてゐたりけり　同　繁堂
アトリエへいきなりは入る許婚　神戸　同
入場券財布の底で皺になり　松江　翠句樓
嘲笑へ身はエプロンの白さなり　同　同
前掛の色も世帶につかれたり　同　慕秋
燦然と朝日をうけたブルの家
薄情な男にされる無妻主義

ねエ芝居があるか、お役所へ呼出されやしめエし――と苦情を並べた古い父であつた。然かも三十年も以前に既にライターで煙草を喫つてゐた新し好きの父であつた。私は讀經を聞き乍ら、それから、それへ色々の思出を辿りつゝフト自分の死ぬ時は――と考へた。そして一句を手向けた。

松の内飲往生は晴れな事

昨年十一月上旬伊勢良輔君が死んだ。彼は全く奇人傳中の人物であつた。三高に學び東大に遊んで獨逸文學を修め、歐洲大戰當時の好況時に一擧して數十萬の富を鐵貿易によつて得たが、忽ち其反動に元の默阿彌に立歸つて間もなく消息が分らなくなつた。二年程して飄然復都に現はれた彼は、久濶を述して呵々大笑した――埼玉の方で不動さんの堂守をしてゐたよ、もうお敎は確かなものだぜ――彼は衣の袖をまくり上げる樣な手つきをして盃をあげたものだ。其後の彼は獨文學の飜譯をやつてゐた、原稿料の取れないのに弱り切つた揚ケ句ハムの行商になつた、遂に深川で鰻の肝燒屋の主人となつた。そして後援者達の骨折りで、其通知狀に述べる所の「肝を燒く事一年有半技漸く進む」と云ふので、銀座の一角に進出したのが昨年の若葉時分の事なのである。

怨んでも見たし火元は保險あり　大阪　青兒
鶏も居れぬ齢になつて來た　長野　同　有爲郎
吐く息の白さもつゝがなく歩む　同
催促の姿そのまゝ石になれ　松江　柳人
決心は堅し大阪行の汽車にゆれ　同　踏人改
物憂き日外は時雨の音がする　赤陽
雨上りのアスファルトに月踏んで行く　同　同
滿蒙の話は更けるものにされ　堺　曲豆
賞與でと買ふ物ばかり增へてゆき　同　同
此人と思ふ御方は眞面目すぎ　小松　白山坊
冬日さす窓へ我手の油じみ　同　水玉改
鼻毛など拔いて師走の夜を笑ひ　大聖寺　萬保
朝日を拜み夕陽を拜む　鐵の艶　松江　みの
氣强さを見せて女の五十すぎ　神戸　麥刀子
宍道湖へ夕陽の落ちて物憂き日　松江　砂詩朗
悲しみの月と歩いて石を蹴り　同　冬生
石炭を焚け〳〵空は曇るまい　尼崎　虛白
生活には追れる愚痴へ冬となり　松江　祥月
ボーナスにもう百圓もほしい妻　西宮　黑波
惡友は金の入るのも氣にかけず　神戸　錢平
學校を命を的に行きたがり　大阪　岩石
近づけばついにシヤンではなくなりぬ
世界地圖廣げて金のある處

數奇な境涯を遽しく終つた彼は、臨終に際して枕頭の友人になつた一ト言云つたさうだ——

「油が切れた」

と。死に臨んで洒々落々としてゐた彼の大悟を私は美しく思ふ。私は一句を献して彼の瞑福を祈つた。

行秋や俺も油が切れかゝる

（昭和八、一、一二稿）

## 豐橋を訪ふ

生田翠夢

三日の朝十時過ぎ睡眠不足の顏を豐橋驛頭に曝した私は未だ見ぬ梅里氏を探し求めるのに可成の不安を感じた。約束の時まで未だ一時間、知らぬ土地と て少々戸迷つて仕舞つた。牟呂まで一里餘とか梅里氏らしい顏が見えぬまゝ、赤帽氏の忠言により昔乍の俥に乘つて南へ向つて一走り。街は家毎に門松が軒の高さに土にさゝれてゐる。一寸遠國に來た氣分である。

細い町はづれを出ると冬の田園風景だ吉田用水の傍の街道を牟呂公文に、着いた。宅は直ぐわかつたが、梅里氏は既に私に逢ふため豐橋へ出たとの事、挨拶もそこ〳〵にして引返す、鳳來山が眞白に光つてゐる、風は可成ある。

豐橋驛へ着くと豐橋川柳土曜會の會旗

夢に見るおさななじみの安否など　一　美　（愛ケ池）
惡友と云ふは社長のお氣に入り　鯉　友　（大阪）
道ならぬ情に追はれ秋も更け　馬　骨　（同）
バスガール鼻のつまつた聲を出し　一　久　（同）
山の端のどこかに落葉焚いてゐる　巷　巴　（愛ケ池）
あの人があれのこれよと人の中　夢　人　（島根）
バツト吸ふ床屋へ焦れて居る師走　松　雨　（愛ケ池）
ふるさとの山に雪ある夢なりき　公　平　（同）
夜逃げしたあとの看板光つてる　小　舟　（大阪）

勅題に因みて

胃を病んで朝の海に親しみぬ　遊　歩　（武蔵川）
退職のこれから生きるひげをそり　素　木　（岡山）
へちまだらりと物憂き眼に垂れる　田　鶴　猪　（島根・大阪）
ひきづつた靴に演習終りなり　銀　波　（大阪）
あれこれと云ふ氣も出ない百貨店　三　郎　（同）
丸刈の飽く迄金の世と信じ　晴　夫　（同）
ボーナスを當に冬服別仕立　一　騎　（同）
休館のまゝ繪看板破れてゐ　い　の　助　（同）
募集した役者顔だけスターなり　古　扇　遊　（同）
不覺にも寢すぎた宿の秋の色　呑　吸　（同）
持參金嫁の里からあゝもせい　南　葉　（愛媛）
本町の埃りを喇叭見て通り　武　夫　（大阪）
はづかしい人へ茶碗の置所　えいを　（同）

の下に梅里氏が寒そうに特徴のある姿で待つてゐられた。同時に豐橋日々新聞社の倉光唐四郎氏の出迎へをうけた事を感謝しながら會場へ。

會場は愛知高等和洋女學校市の東南柳生河の畔に立つた閑靜な校舍である。作法室に通されて、當校長柳人倉田又穗氏にお目にかゝる。御夫人が座を斡旋され心盡しの御馳走に頂かる和やかな空氣を感じて午の酒に陶然としてゐると八寸棒氏、ひろし氏驟人氏等が見える。

風が硝子戸を破る樣に叩いてゐる、聞くとこれで未だ豐橋では穩やな日だとかは一寸返事が出來なかつた、やがて作句清記互選で發表後拙づい筆をとらされて短冊を書かされた、雜誌社と先生の方への寄書を繪葉書ですましてやつと腰を上げたのが六時半頃、夕なぎと云ふ。外へ立つと薄暗い。三河の風は冬の名物ときゝながら畦道を市内電車の終點へ歩るく遠く山々は眞白で風は寒むい。

市内電車で街の中心を通り驛前へ着く吉田驛上の食堂で晩餐を共にする、飯い飲み且談じて柳論に柳界に話はなか〳〵盡きない、とう〳〵九時過ぎ歸阪のため驛へ降りて來た、春には一度路郎師を誘ひ出す約束をして考へてゐる。

十時前名殘りも惜しい豐橋を辭去した

（八、一、五）

ローマンスカーの雜誌へ持ち添へる　同　黑天子
嗤ふ資格があつて嗤つた譯でなし　東京　白丘土
カレンダが吐息と共に剝がされる　大阪　富士雄
素足では雪割草も歎くまい　石川　北陽子
ふびんさを自業自得と目をつむり　大阪　葉光
二十二十そつと袂を撫でて見る　兵庫　義朗
苦心した勅題髷の裏表　金澤　今雨
高島屋此方ですよと輕氣球　大阪　一笑
大金をもつてドアーを肩でおし　今治　紫陽
あの時の投資が首を締めよとは　西條　孤鶴
冬の空さて職業もかへられず　高知　鐵吉
何くはぬ顏で父親席につき　松江　榮
朗らかになれつて金を吳れるのかね　大船寺　白花子
居候でも四五本の年賀狀　新潟　狂花
失業となれて曉知らぬなり　愛媛　世都象
あきらめて居ます喪服の二十四五　同　芳岸
甥や姪しきりにしたふ伯父になり　島取　耕民
身體より金が先だつレントゲン　滋中　耕朗
宿命の音が聞えぬ聽診器　京都　富美三
日がさせはこんなほこりがしてるのに　不明　白菊
片意地な男唇嚙むばかり　京都　阿鴻
帝展の彫刻室を見る
風呂屋ではないのにハダカ許りがゐ　高松　柳夢
叱られて恐い時分を懷かしみ　大阪　四五磨

## 心のふるさと

松丘町　二

ある集會の席上で、クリスチヤンの畫家が云つたことがある。

「私は現代の基督敎に失望してゐる。社會的には何の力も持たない基督敎も基督者も眠つてゐる。眠つてゐなければ騷々しすぎる。何れにしても私が無力であるやうに、現今の大多數の敎會は無力である。だが、私が如何に基督敎に失望しても、黃昏の道ひとり歩きながら、孤獨の窓に瞑想しながら、ふと限りない懷かしさを以て、私の魂に呼びかけてくるのは、イエスの御姿である。懷かしく哀しいイエスの御姿である。私がいかに現代のキリスト敎に失望しても、イエスのみは懷かしい。イエスは私の心に住み給うのだ。私はクリスチヤンであることを、決して悲しみとしない。私の心が知らず〳〵キリストに背いてゐるときも、イエスは限りなく懷かしいのです」と。

この畫家――數度の洋行をして研鑽した――は心のふるさとを持つてゐる。いつでもそのふるさとへ歸ることが出來るそのふるさとには、いつもイエスが住んでゐる。幸福な人であると思つた。

こゝろのふるさとがないさみしさですかつてかう歌つた私は、いまも尙こゝ

上りそなクレンケーキで物言へず　同　神戸　南左右吉

深呼吸先生のシャツ破ぶれさう　島取　柳香緒

豫算てふものに舍外はたそがれる　京都　波樓

響かない心へ今日も涙する　松江　歡次郎

雁を見てこの世を嘆く人も居り　同　研一

早慶戰今日の相塲はほつとかれ　京都　路夏生

染織祭花の大路に綴れ帶　愛媛　西英子

久方に會へば善人笑ふだけ　神戸　幸損

缺勤をしてとじこもる顯微鏡　大阪　笛秀之

日燒けした話マダムの應接間　同　良佑

爪彈を見上げて通る涼み舟　同　蛙川

無花果の葉の散る音の響く宵　同　宏郎

慘劇もものかは街のビルデング　同　紫石

秋寒し無妻は俺と君だけか　京都　麗光

ダンサーと出合ふも夜の車内なり　弘一改

北滿のニュースの後のピアノなり　不明　里町

寂しさは夢を追はない年になり　鳥取　鴉天

資本家と妥協の出來た煙見る　大阪　玉兒

平凡の模範白髮となりにけり　京都　迷兆

賣立に放り出されたる妾と子　同　悲虎

マスクかけてギヤングと見ゆる面白さ　大阪　寒月

防空兵器並べ都會の憂欝よ　京都　ゆきら

ひからびた造花の如くしぼらるゝ　同　冠岐

電燈の數もへらした失業苦　大阪　白蝶

ろのふるさとのない淋しさに生きてゐる柳樽は川柳作家としての私の心のふるさとではない。これは私にとつて悲しいことだ。恐らく歌人には、萬葉集が心のふるさとであらう。俳人には芭蕉が心のふるさとに住むだらう。それらの人々は、自然へ人生へ、探求の眼を向けて、心を歌ひ、生活を歌ひつゝ、歌につかれたとき、そして心の泉の涸渇を覺えたとき、萬集の名歌が、芭蕉の精神が、なつかしく浮ばば上つてくるだらう。彼らはこの心のふるさとに歸ることによつて、魂を慰め力を得て、再び心の泉にこんこんと詩情の水を湛えるだらう。彼らは正に幸福である。

川柳作家の心に荒涼たる風が吹き、柳樽の古句は、徒らに言葉の面白味を面白がつて、皮肉り、くすぐり、警句を吐いて、心の飢には見向きもしてくれない、

――少くとも私ひとりの、拗ねた魂には――淋しさに堪えつゝ、湧き上る情熱のみを唯一の頼みとして、歌ひつゝ苦しみ苦しみつゝ歌ふ。これは確かに幸福なことではなからうが、强靱な川柳詩精神はこれを不幸としてのみ悲しんでゐてよいだらうか。私は決してさうは思はぬ。思ひたくない。心のふるさとのないことは自分で心のふるさとを拓いてゆかねばならぬことを意味するのだ。詩人の本懷ではないか。

# 三笠附に據る流人（上）

## ―本誌十周年紀念大會講演―

藤里好古

只今、御紹介に與りました藤里であります。私は朝鮮の蛭子省二氏と同じく「喘息」と云ふ困つた持病がありまして、一昨日の寒風にやられ昨日は終日臥床致して居りました。未だ全癒の域に及んで居りませぬから、時々、痰の爲めに御聽き苦しい處も御座いませうが、何卒御宥しを願つて置きます。

さて、本題に入るに先立ち、簡單に「三笠附」の構成並に發達の過程を申上げ是れが爲めに遠流に處せられる理由を述べる事に致します。延寶の頃より、宗匠が下の句を出して、多くの人に句を附けさせる、所謂「前句附」なるものが、俳諧の傍系として發生致しました。是が元祿の初年に至つて、高點者へ端物亦は器物を賞として與へるやうになつたのであります。是を「褒美前句」と其頃は呼んで居りました。かくして元祿の五六年頃から、授賞者が賞品を望まぬ際は、其代償として現金を與へるやうになり、これを得むとして貴賤となく、其賞金を目あてに附句し、點錢を費すに至り、幕府はかくなつては博奕に等しいと視て取つて元祿十年十二月廿九日に、前句に褒美を出すことを禁ずる町觸を公布しました。此頃から下の句に上の句を附けることは猶ほむつかしいとて、宗匠より上の句の五文字を出して、次の七文字、五文字を諸人に附さするやうに變化致しました。是を「冠付」或は「笠附」と云ひ、大變流行したのであります。公然と宗匠は看板を掲出し、集會を催して、衆人環視の下に賞金を授與すると云つたやうな調子でした。是れではならぬと云ふ譯けで、元祿十五年二月に、冠付と申す看板を出し、人集致し褒美を出す事を嚴禁する、達書が出たのであります。

越へて寶永二年正月四日にも、同三年正月十五日にも、褒美前句並に冠付を嚴禁する町觸が出て居ります。しかし、此頃よりは元祿より傳統する頽廢氣分は愈々濃厚となり、大衆は僥倖を人生に於ける唯一の刺激だと意識して、より强烈なるものを求めるに至り、冠の五文字を三つ出して、三つ冠に各七文字五文字を附けさせる、「三笠附」が發生したのであります。更に是が普遍化して、宗匠卽ち

點者より冠句を一句と下の句を廿一句と
を列示して、課題の冠句へ提示の廿一句
中より撰出して附句せしむる「三笠附」が
出て參りました。是れですと、何人でも
容易に附句することが出來ますので、其
流行は實にスバランイ速度を以て、江戸
の町々を風靡致しました。其方法を簡略
に云ひますと、點者は「懐紙」と申しま
して鳥の子の紙へ

## はるなれや

太々ゆづり葉門のまつ、喜方にむかひとる
つまみ、名も位も上るぞうになり、一夜で
心もゆるやかな、まひつけて來る福太夫、
まづいゝ初むるゆみはじめ、儀式でいはふ
三日の月、義太夫ぶしは野も山も、はつや
ま見まふやまやくしや、わたらぬさきになな
づながゆ、とろり〳〵となゑしろしゆ、さ
もありげな空の色、鶯はるのまだしごろ、
みなよひ衆のまれをして、こゝやかしこの
節がよひ、醫者はやくしのかゞみわり、喰
ひぞめ武士はいやひ初、人の子いはふはな
嫁子、鬼木にかはるけづりかけ、家々のぞ
く座頭ごぜ、位のついたやぶの梅

如　卯　一葉軒在色

と、「はるなれや」と云ふ冠句と、廿一句
の附句を認めたるものへ、金元と云つて
會計を掌る者、句捨ひと云つて諸方へ出
て附句並に點錢を集めて來る者等立會に
て三笠宿一事務を掌る者の宅一にて點者
は秘密に附句の中から三句を撰び、それ
へ朱點を附し、是を卷きて密封し宿の神
棚へ納めて置くのであります。そして句
捨ひは版に摺つた、同一内容の懐紙を持
ち廻り、諸人に自己が附句する好みの句
へ、點者と同じく朱點を懸けさせ、三句
撰出するを一句と稱し、附句者より一句
に就き十文宛點錢を徴集し、是を宿迄屆
けるのであります。かくて。「まき披き」
と稱する會日には、點者、金元、句拾ひ
立會にて前の懐紙を披き、點者の附句と
悉く一致するものを「卷頭」と云ひ賞金
二兩を與へ、三句の裡二句當りしものを
「二勝」と云ひ百文を與へ、他は沒收と云
ふことになります。句捨ひは茶代とて若
干の固定手當の外に點錢の一割を口錢と
して支給され、自己の扱ひし附句が授賞
した場合には附句者より其一割を與へら
れる定めでした。一折の懐紙に對する附
句は最高千三百三十句にして、當選率多
き場合と云へど收入は二百二十文を切れ
込むことはなかつたそうです。是を點者
金元、宿の者が分割取得したのであります。

寶永七年の秋頃より、今一段と簡易化
され、懐紙には冠句も附句も認めず、一
より廿一迄の數字を

一い　八ち　十五よ
二ろ　九り　十六た
三は　十ぬ　十七れ
四に　十一る　十八そ
五ほ　十二を　十九つ
六へ　十三わ　廿ね
七と　十五か　廿一な

と霞に、宿の分は數字にて、附句者への
分は假名字にて認めるやうになり、亦は
廿一迄の數字から恰も現今の天地人の三
才や日月星の三光の點取法の如く、其伏
句たる數字を「和歌三神」に配當して、卷
紙の内へ

住吉明神　三
玉津嶋姫　六
人丸明神　廿一
和歌三神

と認め、それを封じて宿の正面に縣置き

附句者は單に一より廿一迄の數字より、三字を撰出し、句捨ひの帳へ記入して用を辨ずるやうになつたのです。こゝに至つては文藝上の遊戯ではなく、殆んど博奕に等しくなり終うせたのであります。

太宰春臺をして「春臺獨語」に、和歌の流、その末變じて博奕となるべしとは住吉、玉津嶋の神もいかでか、しろしめさむ、あさましくもかなしきは、俳諧のわざはひならずや、と慨歎せしめるに至つたのです。幕府は正德元年十二月晦日に

三笠付抔名附け、博奕ヶ間敷義堅致間敷候
同心相廻し、右之族有之ば召捕させ、當人ハ曲事ニ申付、其所之家主五人組名主は可爲越度候間、此旨町中急度可相觸候　以上

と、始めて三笠附と指適し、且つ累犯關係を擴大して、其根を絶やし、其子葉を枯らさむとしたのであります。さりながら、一片の法文のみにては何等の强威も示さず、「市尹要覽」に記す如く

三ッ共あたり候と定まらず候事にて　候へ共、五ッ之内にて、あて申すべく哉と存じ五ッすぐり出し遣申候を　五車ー五グルーと申し、是は一ッ分五拾文ー普通は三ッ撰出して十文であるがーづゝにて、五ッ分二百五十文出し申し候、此上、七車、八車、

右之割合にて出錢增申候事

と云ふやうに、點錢の增額に據つての特權が認められるやうになつたのです。がかくして幸にも其内から、卷頭や二勝に當つても、得る處は同じく二兩であり、百文であります。時には當選率の餘りにも多い場合は、披きの際、句捨ひ達に感付れぬやうに、伏句をスリ換へてインチキを行ふことがありました。是を「手づから三笠」と云つたのであります、かくなつては純然たる博奕で、文藝上の遊戯とは沒交渉となつてしまひました。故に江戸南北の町奉行は彈壓の手をゆるめなかつたのであります。こゝに至つて奸智に長した、常習の徒は江戸の近郊や接續の國々へ其本據ヶ置いて活躍致しましたので、正德五年九月には、亦々、諸國在々所々、御料私領の三笠附の徒ー點者、金元、宿、句捨ひ等ーを搦め捕り、早速注進すべき、訓令が擴布されたのであります。

かくて、享保八年六月には、三笠附並に博奕致し候者、當人過料錢を出候儀、難義な者は、地借りは地主、召仕は主人より差し出すべき事、三笠付度々致し候て過料差し上げ、猶やめざる者は上申致すべき事が、達せられてかなりの重罪に行れるに至つたのです。翌九年正月には三笠附の同類たりとも、訴人する者は其罪を許し、銀二十枚ヶ賞賜することが達せられ、十一年の正月から日本橋の高札場に此事が揭示されたのです。同時に幕府の行刑寶典たる「御定書百箇條」へ三笠附關係斷罪指針として

一、三笠附點者、同金元並宿　　遠　島
一、三笠附句捨ひ　　家財取上げ　非人手下
一、三笠附いたし候者　　家財家藏取上候程之過料、家藏なき者は五貫文、或三貫文過料
一、三笠附點者金元並宿之家主　　身体ー資産也ーに應じ過料之上、百日手鎖
一、同地主　　屋敷取上

但、五ヶ年過、元地主え返し下さる之外にて、致し候者の地主は三ヶ年過、返し下さるべし

一、三笠附宿兩隣並五人組

身上一資産の事一に應じ過料

但、在方者組頭五人組共過料

一、同名主

町方在方共、過料五貫文

一、同町内

家並、過料三貫文　向小間に應じ照料

前々よりの例の如し

但、在方は持高に應じ過料

と規定追記されたのであります。かくの如く、何が故に三笠附の徒が嚴科に處せられ、彈壓が激しさかは後刻「流人狀態」を述べる際に申し述ることに致しまして、先づそれに觸れる前提として、遠嶋制度と流人の生活相を簡明に申上げることゝ致します。

江戸幕府の採つた「遠嶋制度」は、「御定書百箇條」に據れば、幼年殺人犯、殺人共犯、幼年放火犯、捨子犯、幼女强姦犯、各博奕犯、盜賊累犯、女犯僧、不受不施宗徒、思想犯、國事犯等の者を、京阪以西の者は、薩摩、五嶋之各嶋、隱岐、壹岐、天草の各地へ、江戸よりの者は伊豆七嶋、卽ち、今回私が巡航致して參りました、大嶋、利嶋、神津嶋、新嶋式根嶋、三宅嶋、御藏嶋、八丈嶋等へ流刑したのであります。「三笠附」の犯罪は殆んど關東地方で行はれましたから、或一部の除外例の他は此伊豆七嶋へ行刑されて居るのであります。亨保十六年三月以來、元文三年三月十四日、同四年三月寛保二年三月と四回に渉つて嶋地の人口政策上、流人減少方を行刑地より出願するに及び、遂に、新嶋、三宅嶋、八丈嶋の三嶋のみに行刑するやう、寛政初年より改定されたのであります。

（以下次號）

## 十を因める　山雨樓調

十違ひ十組

（五五）長崎柳秀　（四五）矢野錦浪
（五〇）庄萬よし　（四〇）永田里十九
（四九）齋藤松窓　（三九）田中五呂八
（四七）蛭子省二　（三七）鹽路吉丁
（四六）麻生路郎　（三六）福田山雨樓
（四三）大谷五花村　（三三）布部幸男
（四二）安川久流美　（三二）松丘町二
（四〇）西田艸樂　（三〇）尼絲之助
（三七）前田雀郎　（二七）楊井二南
（三四）水谷鮎美　（二四）山本丹路

同じ歳十對

木村半文錢（四五）森東魚
本田溪花坊（四四）楫元紋太
岸本水府（四二）橋本綠雨
前田五健（四一）小田夢路
龜井花童子（四一）麻生葭乃
安井ひろし（三八）北山悟郎
關本雅幽（三七）岩崎柳路
高橋かほる（三六）西村明珠
日野華水（二九）河野夜王
三條東洋鬼（二八）中野裸人

物故十大巨石

兒島六厘坊　明治四二・五・一六
藤村青明　大正四・八・二
松村柳珍堂　同八・九・一四
今井卯木　昭和三・二・三
窪田而笑子　同三・一〇・二七
武笠山椒　昭和四・三・一八
西原柳雨　同五・四・二七
河盛芦村　同五・一一・一四
杉村蚊象　同五・一二・二四
淺井五葉　同七・七・六

# 斷章

## 川柳を考へる

松丘町二

### 川柳への懷疑

私はいつも川柳を懷疑する。他の短詩の價値や動向などには、一切頬冠りして耳をかさず、ひたすらに川柳を禮讃してゐる人々の眼に、私は不幸な男と映る。川柳作家として十年に近い時を制作に費しながら、いまだに川柳とは何物かといふ積極的な確信の摑めない不幸な私であり、絶えず動搖する私の心ではある。かゝる私が敢て作品を論じ、作家を論じてきたことに、人々は私の不信を攻せて呉れやう。私は果して諸君を僞つたか。自分で自分の心を穢してきたか。成る程私は過去に懷疑し、現在に懷疑してゐる。だが私の懷疑は懷疑である限りに於て、私のものであつて人様のものではない。懷疑は絶えず私の心を鞭うつ。「汝の懷疑をして單なる懷疑に終らしめるな」懷疑は私の血と共に全身をめぐる。「お前の眞實は何か」かくして私の情熱は、いつも懷疑の上に築かれる。私の作家的情熱は懷疑の化身だ。如何なる場合にも人間情熱は外部に向つて働きかける。永く停滯を許さぬ。内部での雲散霧消もせぬ。こゝに情熱は慾情を伴つて私の歌を歌ふ。この歌が私の川柳だ。私の川柳論だ。私は懷疑はするが、懷疑を懷疑として人様の前に弄びはせぬ。私の懷疑が情熱を呼び、情熱が慾情を伴つて私の歌を歌ふ時私の懷疑は懷疑であつて懷疑ではない。それは一つの確信なのだ　私の懷疑は、私の口から言葉となつて發せられた時、私にとつては既に動かすべからざる確信となるのだ。私は川柳の、現代社會に生きた呼吸をする新しい川柳の眞髓を摑むべく懷疑する。懷疑しつゝ確信する。一つの確信を得て更に新しく懷疑する。人々の眼に、若し私が、絶えず動搖する敍事作家であると共に、不幸を計量する抒情作家と映るならば、正しく私の眞實の姿を射拔く眼だ。この眼が示す輕蔑も尊敬も、私にとつては等しくよき刺戟だ。一番いけないのは知つてくれぬ眼だ。知つて知らん顏をする眼だ。私は劇しい侮蔑の眼を期待しやう。この眼と闘つて行かう。絶えず動搖しつゝ。絶えず不幸を計量しつゝ。

以下私は號を追うて如何に川柳を懷疑せるかを語りたいと思ふ。

### 現實主義と象徴主義

古川柳は怪物である。柳樽は垢にまみれた聖書である。新興を稱する人々と雖も、古句を全的に否定し得るものはあるまい。彼等が如何に新しい衣裳をまとうて登場しやうと、その作句態度は、作品の底を流れる氣息は、やはり古句と同樣の滑稽・皮肉・穿ちの心である。如何にそれらのものを、詩的價値に乏しきものとして輕んじやうとも、川柳を以て通俗な概念によるリアリズムの詩であることを信じて疑はぬ以上、それらのものを否

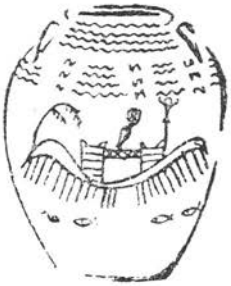
定し去ることは出來ないのだ。誠に川柳はリアリズムの詩であつた。俳句がその發祥以來今日まで、幾多の興替起伏の時代を經ながら、一貫して季題を棄てず季感を貴んできた自然界の諷詠詩であつたと同樣、川聊は柳樽以來狂句を經て今日に至るまで、徹底的に人事に卽した現實詩であつた。彼らは日常茶飯の形而下學的歪みを、生きた人間の生活感情からではなくて、觀念的理智の眼で、寫生的に類型的に歌ふに過ぎない客觀的リアリズムの皮相に終始した。

俳句がその對象を人間社會に求めず、主として自然界に求めたことは、俳句が東洋的なシンボリズムの詩として成功した所以であらう。自然は人間に比べて遙かに豐富であり、純粹であり、無限である。豐富であり純粹であり無限である自然は、從てあらゆるものゝ詩的抽象の可能を意味する。俳句が世界の最短詩型として、十七音字以てよく藝術たり得るのは、かゝる自然をその觀照の基點に置くに依る。そしてその形式が必然的に象徵性となるがためである。人間の如く猥雜にして單純なものを描いて藝術とするには、自然を歌つて藝術とするよりも遙かに多くの言葉を必要とする。現在に於てリアリズムを以て藝術的にその價値を認められたものゝ最短なるものは短歌である。(然も尙藝術的に秀れたものはやはり象徵性を帶びてゐる)

川柳は勇敢にもリアリズムを奉じた。我々が生活しつゝ意識の中で經驗してゐるものを、その在るが儘に寫しくゆく所謂主觀的リアリズムではなくてリアリズムみたいなリアリズムを奉じたのだ。然も表現一當つて一句に許される言葉は十七音に過ぎなかつた。リアリズムはいきほひ滑稽●皮肉●穿ちの理智に生きるの外はなかつた。彼らの句が徒らに低調卑俗讀むに堪えず、藝術としては社會から殆ど顧られないのは、彼らの才能が必ずしも歌人や俳人らに劣るが爲ではなからう。彼らの多くが殆ど無自覺に、無自覺なるが故に石垣のやうに堅く信じて疑はぬ通俗リアリズムの精神に依るのであらう。總じてリアリズムの精神は逞しく健康ではあるが、十七音字の制約下に於ては、少くとも一度は疑はれ、再認識せられなければならぬ精神である。俳壇に於て俳句道の眞髓たるシンボリズムなるものが、兎角觀念的になり、常套的になり月並臭味を帶び易い傾向を持つために、絕えずリアリズムの運動を注入してゐるやうに、川柳に於ても、兎角露骨になり卑俗になり、品格を失ひ易い傾向にあるリアリズムへ、シンボリズム――短詩に於ける象徵とは、その表現の「一」がよく現實の「無限」を代表するもの、卽ち「一」を以て「多」又は「無限」を代表せしめるものを意味する――の心を加味することが新しい川柳の生きる一つの道ではなからうか。

しろ〳〵と道一すじのお骨上げ　杏三
泡白く生れる畫のおかみさん　鮎美
火葬場はカナリヤが居て立つ煙　司郎
クヽと啼く蛙いつぴきにひきの夜　琴人
ふとふりむいてわがかげがある葉平
薄情と見ゆ制服の朝寒し　山雨樓
霧の如くに女の息吹窓によす　愚陀
坑の闇カンテラばかり神經質　有爲郎

以上の諸句は物質の情熱の上に立つ象徵的な川柳の一例であるが在來の句に比して、如何に匂ひ高く、陰翳に富み、しかも豐富なることよ。



# 川柳を人間譯した如な ワグネル

寺川信

この二月はリヒアルト・ワグネルの五十年祭である。

ワグネルが近代の大音樂家であることは、今更こと新しく説くまでもなく、小學生だつて知つてゐる。だが、ほんとうのワグネル、人間としてのワグネルは、案外傳へられてゐない。

眞實のワグネルは、生きた川柳の如きまことに親味深い男なのである。

此處でいふ川柳の如なとは、彼がひねくれた皮肉屋であつたといふ意味でなく可笑しい奇行があつた、といふわけでも更々ない。

そんなのは川柳としても陳くて臭い如くに、人間としても少しも親しめない存在である。

由來、傳記家といふものは。今古東西例外なしに、英雄豪傑、政治家、藝術家の偉い人達を傳すると、なると、賣藥化粧品の廣告、そこのけの最大級の形容をつらね、殊に、言靈のさちほふ我國になると、二千年も昔から先祖代々、漢字で支那風に仰山らしく祭上げないと、承知出來ない惡い病氣があつて。ワグネルなどは、夙くの昔に「樂聖」などと變な冠をおつかぶされてゐる。

彼は決して聖人君子や、神樣の化物でもなかつた。のみならず、吾々同樣に、だらしない處があつたり、おだてには、すぐに乘つて馳け出す、といつた、まことに交際よい人間だつたのである。

×

ワグネルの生れたのは一八一三年五月二十二日(文化十年)ドイツのライプチツヒの下級警察吏の八人目の末子で。生後六ケ月目に父に死別した。生活難に子澤山のおかみさんは、夫の友人にすぐ再婚した　その男は俳優で畫家で小說家で歌手で……と。可成多才で、しかもどれにも傑出してゐない人間だつたらしいワグネルは可愛がられて大きくなり、八歲になつてこの第二の父とも死に別れてゐる。以後、母親の手一つで成人した、ことになつてゐる。

當時の花形音樂家ウエーベルが、その母親の許へ遊に來て、ワグネルを「賢い子だ」と賞めたりしてゐるから、未亡人とこの音樂家の間を疑つてもよいし、疑

はなくてもよい。

但し、ワグネルが八、九歳でギリシヤの古典「オデシイ」を譯したことは疑つてよいかもしれぬ。彼は最初は文學者になるつもりでゐた處、ヴェートフェンの音樂を聞て、大に感奮し、音樂家たるべく決心したのが十五歳。と傳へられてゐるが、こゝらはあまり詮議しないでをかう。それよりも面白いのは二十歳以後である

俳優になつてゐる長兄ゲルバアトが、ウルツブルグの劇場に勤めてゐるので、二十一歳の青年ワグネルは合唱團指揮者に雇入られることになつた　すると、すぐ自作を上場したい野心を起して、再參書くが皆、ハネられる。漸くのことで、ヴェートフェンやウエーベルの曲つき合せて眞似たやうな「妖情」といふのを、賴みに賴んで上演される運びとなつたが結果は不評判、氣を腐らしたワグネルは居耐らないで、其座を去り、方々求職して、チーニスベルヒ劇場の樂長になつた

×

すると、今度はに其座の美しい女優ミンナといふのに惚込んで女房にし、女と愛犬と彼とで、青雲の志を抱いて巴里へ赴いたのが二十四歳とある。

藝術の首都巴里では、田舍者で黄嘴のワグネルなんか唯も相手にしてくれない贅澤だけは覺へて、生活は苦しくなるばかり。借金に責められて、とうとう巴里を脱出して歸國する。これに發憤したか旅中に書いたが、歸獨してからも、次々に樂劇を作してゐる。此頃から少しく世に認られ出したのであるが、一八四八年にドイツ革命が起ると、血の氣の多いワグネルのことである、早速と赤い論文を草し、赤い旗もかつぐといつた調子である。それが爲に、國外に追はれることゝなるとワグネルがあまりに小供のほく、手賴ない、とばかり。女は後足に砂で去つてしまふ。

それが爲に、彼は泣き面に蜂で、旅に幾年か放浪しつゝ作曲しなければならなくなつた。

一八六一年になつてババリヤ王の保護を受ける身となり。左翼から右翼への急回轉して、歸國すると、友人の細君コスミヤ・リツツと相思の仲となり。遂にその女と結婚する。

晩年は自分の作のみを上場すべき、バイロイトの劇場を建てたり、次々に發表する諸作は一世の嘆美の焦點となり、功成り名遂げて、病を南歐の水都某の宮殿に養つて、妻子に圍まれながら、七十歳で平安なその一生の大詰の幕を下したのである。

×

なんと、人間としてのワグネルの一生は、ちつとも偉い處がないではないか。この、偉くない男が「ニイベルンゲンの指環」「四部作のやうな大曲を作し「タンノイザア」や「トリスタンとイソルデ」「ローエングリン」「パルシファル」其他の古今の傑作を遺し、在來のオペラの形式を一變して、藝術的なものとし、音樂的にも種々の開拓を試みた處に、ワグネルの尊さがあると思はれる。

ドスイエフスキイだつて、彼自身は其作中の人物とは凡そ距離のある、家庭では難物の男であつたらしい。其處に人間としての自然さがある。

賴山陽とて、その青年時代は親の手に追へぬ不良兒であり、長じても、人前に孝行を誇示し、母親を吉野山の花見につれ出し人出の多い道に背負ふたり、痴氣と山氣の多い男でありながら「日本外史」それは史書としては價値少きものとしても一の如き倒幕の導火線となつた程の創作を持つとか、彼等、後世に傳ふべきものを遺した人々が、皆、吾々の手も屆かない高所に居るのでないことを有難く思ふのである。

# 肱・枕・艸・紙（二）

梅本塵山

【十】

相撲の横綱は多く有れども、明治年間の常陸山を第一に推す可し。梅ケ谷は彼れの好敵手にて、その體格力量に甲乙無く、兩人が塲に登る時は、龍虎の鬪爭も斯くやと思はれたり。太刀山は有名なれども、其立合きたなくして、看客を顰蹙せしむる癖ありし。

【十一】

三月の雛祭のみは、昔も今も變る事無し。只、昔は雛棚に緋毛氈を敷き、今は赤毛布、緋金巾など敷く、今昔の相違は是れ而已。

【十二】

近頃、國定の忠治、清水の次郎長の如き、博徒を俠客などと稱揚して、其銅像や紀念碑を建設する者有りと聽く、彼等に多少仁俠の行爲ありたりとも、元來、國法を犯せる博徒なれば、俠客などと稱揚する謂れ更に無し。

【十三】

平素予の愛讀する書は、「萬葉集」「平家物語」と森鷗外の史傳、泉鏡花とエミール、ゾラの小說、近松巢林子の淨瑠璃本、式亭三馬の滑稽本等なり。亦、愛誦するは在原業平の歌、杜牧之の詩、與謝蕪村の俳句、四方赤良の狂歌なり。

【十四】

近世、大いに流行する、浪花節といふものを、浪曲と呼ぶは甚だ可笑しと思ふ萬一、新內節を新曲、一中節を一曲。歌澤節を歌曲などゝ呼はゞ如何。

【十五】

女子の衣服、裝身具の流行品といふものは、昔は俳優が或る役に扮して、舞臺に於て使用するものが偶々觀客の評判となり、頓に世間に流行するものなるが、今は百貨店に於て、先づ流行品と唱へて新奇の物品を賣出し、女子の好奇心と、虛榮心とを滿足さするに過ぎず。

【十六】

昔は人氣役者とて、滿都の女子等が、渴迎の的となりし、俳優多くありたるが人氣役者は美貌にして、優秀の手腕ある者に限られたるもの也　九世團十郎の少壯時代には、五世菊五郎の人氣に壓倒されたりといふ。明治年間の人氣役者は、當時福助といひたる今の中村歌右衛門に及ぶ者無かりし

【十七】

江戸名物の一なる、俳優の似顏繪といふものが、明治以後、寫眞に壓倒されて今は全く廢れたるが、此れに伴ひて、少女が新年に弄ぶ、羽子板の押繪の似顏も甚拙劣なるものと成りたり。昔の押繪の似顏は國貞、國芳の筆致を擧したれば、一目して此れは誰、彼れは誰と認知されたれども、今のは孰れを看ても同型にて各俳優の目鼻の特徵を寫せるもの無く、似顏は有名無實となれり。

【十八】

今の深川踊といふものは、昔は住吉踊かつぼれと稱して、大道藝人中の最卑俗なるものと看偏されしが、近頃は寄席に出演し、園遊會の餘興にも出演する也。此れは眞の藝術を觀賞する者の世に尠くなりし故ならむ。

【十九】

江戸の女子は、素顏を伊達となし、靑樓の畫三の遊女、藝者に到るまで、偶々白粉を着けるとも、甚薄くして人目に立たぬを可しとしたるに、現代の東京の女子等は、顏面より頸筋、胸脊までも眞白に塗り、化猫の如き態をなして、得々として居れど、醜惡にて看るに耐へず、彼女等は化粧法を、全く知らぬものゝ如し

【二十】

元來、予は惡筆れば、他より短冊色紙などの、揮毫を需められる時は、背に汗する而已なるが、書籍や雜誌の原稿を書く時には、注意して字畫を正しく書けども、往々誤字もあり充字もありて、其れを後に發見する事有り。亦、植字工に看誤られる事も有る也。手を能く書く程羨ましき無しと思ふ。

【二十一】

諸派の淨瑠璃中にて、淸元節の一派は近來長唄に亞いで、隆昌を極むれども、先代の太兵衛と、今の延壽太夫とは、其歌の節廻しに、多大の相違ありて、殆ど別派の歌を聽く如し。昔の優艶なるに較ぶれば、今のは著しく下卑に聽ゆ。此れは老の僻耳歌。

【二十二】

近世、羽織といふものを、常服にも禮服にもなして、此れを着る者多けれども昔の江戸の市人には、羽織よりも半纏を多く着たり。大商店は特別なれど、小商店の主人は、平素半纏を着て羽織を着ず被雇人には、主人の許可を得ざれば、着る事無かりし也。職工も羽織を着ず、奥長屋に住む細民は、羽織を所有せず、亦女子は夏冬ともに、一切羽織を着ざりし偶々此れを着るは、女醫者か女隱居の圓頂のものに限りたり。然るに近頃は、女子が夏冬ともに、羽織を着る事が流行して、半纏を着る者更になし。自己の虛榮心を滿足させる爲に、孔雀の羽とも見紛ふ、色彩の華美なる羽織を着て、大道を濶步する女を昔の人に看せたならば、色情狂者と思ふならむ。

【二十三】

江戸の町火消といふものは、享保三年の十月始めて設置され、翌四年の四月頃いろは四十餘組に分ちたりと、古文書に記してあるが、當時市內に出火ありて、警鐘を打鳴す音を聽くと、各組の消防夫は、直に出動なし、一組々々隊をなして町役人に引率され、出火の現場に走せ着けて、消防に努力する也。此時は飯時と否とに拘はらず、辨當の焚出しをなして一同に分配されたり。其辨當は、飯の外に鹹き油揚豆腐、大切の澤庵大根各一枚を、籌に包みたるなり。

【二十四】

各組の消防夫は、俗に鳶の者といひ、其長を鳶頭といふ。其鳶頭の下に、纏持、梯子持、道具持、平人足等あり。消防各組の纏は、軍隊の軍旗に等しきものなれば、纏持は勇敢にして敏捷なる者が選まる。當時は彼等が消防中に、屢々他の組の者と衝突し、往々死傷者を出す程、鬪爭する事あり、其時雙方において、敵方の纏を奪取せむと謀り、死力を盡して攻擊する故纏持は生命を賭して、其れを擁護なし、自己の職責を全うしたり。消防夫は無給料なれば、平日は土木工事に雇はれて、賃銀を得る外に、町內の地主等の眷顧に由り、而して妻子を養ふものなりと云ふ

（續く）

# 川柳街談話

定九郎老人

いよう。一ト月ぶりぢやな　まあ上れ。先月の番傘人月旦が好評ぢやから續けてくれちうのか。おだてちや　いけない。こないだ番傘の連中に逢うたら、あれについてブツ〳〵云ふちよつた。「ありやあ褒めた積りぢやから惡く思ふなよ」ちうたら「冗談もいゝ加減にしとき。あんな手きびしい　お世辭なら末代まで御免ぢや」と云ひよつたよ。ぢやが折角の賴みぢやで、今月は「川柳街」へ行かう。異存あるまいの。

○

儂も此の年になるが、京都のことはとんと知らんのぢや。川柳街も毎月は　見ちよらんから、新年號の批評でお茶を濁しちよかう。

表紙は割合にすつきり　しちよる。簡素で品がある。困るのは　同人吟ぢやて。自選だちうが碌な句が一向　見あたらぬ。こんな筈ぢやない筈ぢやがの。まさか儂の　老眼鏡のせいでもあるまい。舜二の「ホントさうホ、、、やれ散歩散歩」なんて一体何ぢや。この男議論の方が句よりも　百歩位先を歩いちよる。折角伸びる素質のありさうな　男ぢやちと自重せんといかん。

○

同人吟の不振に引きかへて、松窓推奬の春畫篇にや佳句が多い。流石ぢや。

雜吟の顏觸も仲々豊富ぢやし、半文錢、松窓の文章も面白いが、氣に喰はんのは座談會ぢや。これだけ集つて面白さうな問題をとりあげちよるのに、皆が皆いゝ加減のところでお茶を濁しちまつちよるのは、頗る遺憾ぢやて。さぞみんな腹がふくれたこつちやらう。

○

募集吟も句會吟も皆　點數制とはどうぢやこりやあお前、ピンポンみたいにカウントの少い方が勝ち句ちう意味ぢやなからう。やつぱり五十點より百點の方が、上等のきめになつちよるのぢやらうが、五十點六十點どころに秀才が多いのは妙ぢや。學校で圖畫や書方に點數をつけるのは、成績表に必要ぢやからぢや。大人の作つた川柳の選に、小學校の先生の眞似をさせるなんて、辛いことを選者にやらせるのぢや。いつそ天地人五客制の方が、何點何點とはつきりしちよらんだけ、罪がなくて結構ぢや。

○

# 光耀抄

—葭乃選—

樂燒の皿一枚は壁にかけ　堺　道子

割烹着着て麗人の寫眞帖　同

頰紅は明日へ希望の色に塗る　同

ペン先をかへて逢ふ日の打合せ　大阪　同
ボーナスの落着く先をきめて居る　公子
失禮をしたと三日の年賀狀　同
主婦の友もう元日の御馳走よ　大阪　茂代
電氣汽車子よりは親がよく遊び　同

恢復期

空腹を玩具で延ばすだけ延ばし　同
おにしめはやめると云つてやはり煮き　同
むつちりやですのと母はつけ加へ　摩天　松代
おばさんと云はれて年を考へる　同
人絹の光へ小供嬉しさう　同
凱旋に提灯の渦旗の波　大阪　愛子
赤ん坊の鼻の低さを母つまみ　同
山茶花は何の苦もなく咲き亂れ　神戸　茂もよ
唯一人の良夫をたのみ長うねる　同
猿芝居刀を見るとにげて行き　大阪　美津女
夢淺く乳母の乳房は細り行く　大阪　貴志子

題機械

又一つ不精をせよの發明機　同
買ひ立てのソフトサロンへ立ち寄る氣　大阪　葭乃
今日の私の心に嵐立ちそびれ　同
自惚れはそれ七階で行きづまり　同
末の子の箸紙手垢だらけなり　同
印刷屋もめて來るほど春近く　同

早い話が數學なんかなら、正解は誰がみても正解ぢやから、百點ちう點も動かんが、藝術作品の川柳ぢやあ選者によつて皆違ふ筈ぢや。太郎兵衛選の百點句は、次郎作選の零點で、三助選の六十點で、平均點數五十三點強の句だなんちゆのは、ナンセンスで正月氣分にやふさはしいが、將來の大を目ざす川柳街にや、あんまり ふさはしくはないやうぢや。

○

遠慮拔きですけ〳〵と云うたから、川柳街の若い連中はかん〳〵になるぢやらう。ぢやが老人短氣ぢやが嘘は云はぬ。川柳の作品で藝術的な佳い句を求めやうちうと、お前とこの雜誌を除いちやあ、川柳街が第一ぢやらうて。それも曉天の星ほどぢやが、光つた句が時々あるやうぢや。それちうのも、こゝの若い連中の多くが、理論を持たうちう心構へで勉强しちよるからぢや。座談會で富美三が「川柳雜誌」は好きちやが、近頃內容が淋しくなつたちうでるのは、何を意味しちよるかお前に解るかれ。解つたらもう歸りな。歸つてちとこの老人の元氣を見習ふやうに、同人連へ云ふちよいてくれ。

# 千日前今昔史（五）

木村半文錢

## （7）横井座と榎木神社

二六時中、笛や太鼓で騒ぎ立てる繁華の中心地千日前に於て、突として怪談めいた慘劇を生じたのは横井座一件だつた。

横井座は現在の東洋劇場の所在地に在つたので、燒失後春日座を再建したが、それも又祝融氏に見舞はれ烏有に歸した。ふく〳〵火災と因緣の深い劇場だつた。

横井座は其の頃千日前の興行師で且つ俠客だつた横井某の建築したもので、從つて其の姓を座名としたのだ。横井座の建つ以前には二三の飲食店と小さな席亭とが在つたと思ふが、それを買收して横井座を經營したものらしい。千日前の劇場としては群を抜いてゐて、面積も廣く且つ建築も立派だつた。

横井某が斯の地で横井座を建築するに就て多少前住者や附近の人々に反感を抱かれてゐたらしい。其の原因の何であるかは筆者の知るところではないが、傳へ聞くところに依ると横井某は可なりのしたゝか者で、興行師仲間に於てもキレ者として尊敬もされ、又同時に多くの敵もつくつてゐたのだ。兎に角彼一代の裡に斯くも大きな劇場を建築する程の男だつたから其の遺り方にも可なり惡辣な點があつたのであらう。

殊に、最も當時の人々に噂炙したのは榎木神社對の抗爭だつた。

榎木神社は現在に於ては東洋劇場にすつかり買收されて了つたが、まだ二三年以前には歴然として東洋劇場と小寶席との中央の狹い道路の南側に祭祀されてあつた。神體は一本の古い榎だつたから從つて榎木神社と稱し、俗に「榎さん」と言つて花柳界の一部に信者が可なり有つた。一說には斯の榎に狸が棲むとも言ひ又ミイさん即ち蛇體だとも言はれてゐる。然し、狸說の方が有力だつた。

この狸が、横井座の建築に禍ひされて其の住居を狹められたと言う理由で、横井某に反感を抱いてゐた。そして稻荷下げの口を通じて「若しわしの住むところを狹めて無理から建築するのだつたら必ず祟つてやる」と戰鬪を布告したのだ。

然し興行師で叩き上げた横井某は、この宣戰に對して敢然と應戰したのだ。「何がど狸めが——」と言ふので、屈せず、讓步せず、豫定の通り建築にかかり、敷地を擴張したのだ。此所に於て横井某と狸とは正面衝突せざるを得なかつた。

殊に、横井座の普請に就ては、土中から夥しい骸骨が掘り出されて土工共の膽を寒からしめた。千日前が往昔の獄門を曝らしたところで從つて千日寺の名に因んだ土地名であることを知る者にとつては、地中から人骨が現れたつて何も奇異に感じたり、驚怖すべき點も無いのだが、一般人にはさうは易く肯けなかつた。

折も折、時も時、對榎木さんとの抗爭を知る者には、一層拍車をかけて話を擴大した。種々の揣摩臆測が行はれて、いやが上にも兩者の關係を險惡ならしめた。

その間に横井座は立派に建築が完成したコケラ落しが盛大に行はれた。世人餘りに呆氣ない無事のコースに失望したのだ。

果然事變が突發した。それは横井某の射殺であり、横井座の燒失であつた。世人の興味は再び沸騰して、この成行に驚異の眼をそばだてたものだ。そして榎木神社は倍加して信者が增大した。

横井某は、横井座の向い側にあつた汁屋から出た時にピストルで射殺されたと記憶するが、犯人は同業者の俠客某の乾兒だつた。意趣は興行上の繩張關係か、それ共他に深い原因があつたのか、その點は詳しくは知らない。

横井座の燒失は、彼の死後間もないことだつたと思ふが、或は其の間一二年の經過があつたのかも知れない。何れしても横井座はすつかり燒失したが、煙草の不始末が失火の原因だと言はれたけれども、世評の中には、榎木神社の祟りであるといふ說が可なり有力だつたことは爭へない。然し、斯かる怪火を認めたものが一人もないのだから、勿論この上に榎木神社の神德を云々する必要は有るまいと信ずる。

横井座は、金澤の福圓一座に對抗して、舊派の芝居を演じた。コケラ落しには中村福圓が特に出演したのではないかと考へる。

横井座が燒失して以後、しばらくは再建する勇者もなく、空しく小屋掛けの見世物ばかり空地を塞いでゐたが、遂に數年後に於て春日座を建築した。この劇場は横井座よりも廣く且つ美しかつた。內部なども御殿風の勾欄造りで觀者を驚倒せしめた。コケラ落しには新派の村田正雄が乘り込んだが、大變な人氣だつた。然し餘り劇場が廣大なのと、千日前の客筋と村田の藝風との乖離から、彼も春日座を去つたが、その後は舊劇を專問に出したが不入を免れなかつた。矢張りその頃の千日前には千日前らしい小屋が必要だつたのであらう。その後へ、今度のやうな東洋一と誇る東洋劇場を建築してゐるが、時代も餘程變つたものだと感嘆する。況んや横井某に挑戰した狸の榎木神社も既に行方不明になつてゐるに於ておや——と言ひたい。

## (8) 奧田社中の輕業

千日前を語る以上は、千日前を斯く歡樂地帶に導いた恩人謂はゞ千日前の草分けたる奧田辨次郎を忘却することは許されない。最も奧田辨次郎が手を染める以前に於ても、千日前の一部即ち現在の北部に於て小屋掛けの見世物を興行しつゝあつたことは事實であるが、千日前の其の實質的飛躍をなさしめたのは何と言つても奧田が頑張つて以來の事である、と聞いてゐる。それほど奧田は千日前の興隆史第一頁を飾るに足る人物だつた。即ち千日前を公然として觀物地帶になさしめた發起人であり同時に實行者だつた。それは奧田辨次郎の名に於て公許されたからだ。

その奧田辨次郎の早くから經營してゐたのが奧田席で、奧田社中の輕業を年百年中興行してゐた。

奧田席は改良座から少こし北に在つたので現在の市電通路の北側の邊に相當する。間口六七間足らずの小さな席亭だつた。表に面して幕があり、時々その幕を上げては外部の人に內部の藝當を見せて觀覽の好奇心を唆るやうに出來てゐた。幕のところには樂隊——と言つても實は輕業帥だ——が四五人ゐて太鼓やクラリネットを鳴らしてゐた。

藝當は普通の輕業であつて、特に聳目せしめるものはなかつたが、然し、明けても暮れても同じ輕業のみで興行を續けてゐたのは寧ろ奇蹟である。筆者の記憶するところでも既に十數年間の連續であつた。それが同じ連中で同じ輕業のみだつた。最も其の期間にはいたいけな肉體の露出で、輕業少年の悲哀を

物語つた小さい人々が、一人前の豊熟した青年の肉體の所有主となつたといふ時間的な變移はあつたのは勿論であるが、然し、あゝして輕業一本で能くお客を吸收したものだと思はれる。

日露戰爭以後、活動寫眞が漸く千日前を襲ひかけた時代にも尙ほ斯の奥田社中は舊態依然として綱渡りや、空中運動を續けて來たが、彼等も遂に時代の力に敵し得ず久しい老舗の地盤を明け渡して了つた。そして多くは旅から旅への輕業師本來の興行に還元した

奥田興行事務所も、樂天他の南横に在つたのだが、現在は其の跡に玉突屋等が營業してゐるやうだ。

筆者は常に此の千日前の恩人奥田辨次郎の銅像を、千日前の一角に建設しても犬も烏も敢て哄はぬだらうと考へてゐる。

## (9) 柴田席と壯士芝居

竹林寺のお大師樣の南隣りが直ぐに柴田席だつた。向いが奥田席で謂はゞ千日前の歡覽地域北端に相當する。尤もずつと北へ行けば播重席があり、法善寺内には落語席が二軒と講談席一軒とがあつたけれども。——

柴田席も種々の興行上の變遷はあつたと信ずるが、筆者の記憶に存するのは白神、櫻井一座の壯士芝居と、その後に替つた井上等の劍舞芝居とである。恐らく當時は日露戰爭に刺戟を受け、劍舞や軍談ものゝ芝居が歡迎された時代であらう。奥田席なども輕業一座の城明け渡しと同時に、その後へ劍舞や飛入勝手劍術試合の興行を打ち、法螺貝をブーブーと吹き鳴らし、陣鐘太鼓を亂調子に叩いてゐたのを知つてゐる。

柴田席は柴田某の未亡人が經營してゐたもので、小屋は小さいし、特に出色した興行もなかつた。たゞ白神や櫻井等の壯士芝居が時を得顔に千日前の客筋を覘つて際物本位の若しくは毒婦や探偵物のアクドイ芝居をやつてゐたに過ぎない。この一座は堀江の明樂座へ出演してゐたこともあるが、兎に角大阪人とは關係の深い顔振であつた。明樂座時代には原等も參加してゐたと思ふが、柴田席には其の記憶がない。

當時は新派の全盛時代で道頓堀の朝日座には高田實一派の成美團が立籠り舊派に對抗してゐた時代であつた。だから同じ書生芝居、壯士芝居の流れを汲む白神、櫻井一座が千日前で舊派を向ふに廻して車輪にザンギリ物を見せてゐたのは敢て不思議ではあるまい。

この一座にとつて代つたのが井上一派の壯士芝居と言うよりは、劍舞芝居の一行だつた。以前井上は柴田席の南隣で劍舞をやつてゐたが、何でも柴田未亡人の恩寵を受けたとかで其の席に招聘されたものらしい。其の間の深い消息は知らないけれども、井上一派が久しい間此所に巢喰つてゐたことは事實である。

## 10) 劍舞芝居と不良味

柴田席の南側に劍舞の定小屋があつた。席名を失念したが、以前は河内音頭や江州音頭の本城であつて、寒くなると海女の水中藝を開演してゐた。今日でいふエロとグロとの本場だつた。

その本場へ劍舞芝居がかかつて、久しく人氣を集めてゐた。最も前にも言つたやうに日露戰爭に刺戟を受けた副産物に過ぎない。

表に面して、陣鐘、太鼓を据え、法螺貝を吹き鳴らしてゐたのは劍術興行と同じ行き方だつた。出演者は年中白木綿の稽古着一枚で小倉の袴を褌短かに穿き、額にいつも白い鉢卷をきりゝと結んでゐた。

出演者の多くは廿歳前後から、四十歳位ま

での壯者で、中には女劍舞士も混つて光彩を放つてゐた。

一座は河野、渡邊、齋藤、栃木、井上等でみな婦女子を誘惑するに足る好男子だつた事實當時の不良少女や不良少年は多く斯の一座の贔屓筋であつた。今日では不良の二字を用ひるが、その當時は墮落と言つてゐた。即ち墮落書生、墮落女學生がそれだつた。この種の不良の徒が日夜出入して暗い反面にエロを極度にに放散したものだつた。

女工の肩入連中も可なり多かつた。女工の公休日は彼等の書入時だつた。從つて二階は實に魔窟に等しかつたのだ。後に、席の構造を改築して舞臺を正面の奥に持つて行き、表のブーブー、ドンドンを廢止してから、面目を一新したが、然し、彼等の特色は矢張り立ち見時代だつたと信ずる。縱令それが淫蕩猥雜な時代であつたにしても、ああした興行の性質自體が既にエロ味を背景としてゐることは爭へないのだ。劍舞と不良とを隔絶したら、殘るものは一體何であるか？。思ひを此に馳するものは壯士芝居風に發展して行つた劍舞の歩みを寧ろ不合理な進出だと信じてゐるのだ。と言つて筆者は不良味を謳歌するものではないが、要は劍舞の特質を尊重する意圖に過ぎない。

劍舞は渡邊五郎と井上潔との二者が出色だつた。前者は劍舞の虫とでも言ふべく實に多種の劍舞を知り特に大物に精通してゐた槍を持たすと曲藝師ほどの遣ひ手であつた後者は活潑で、きりゝとしてゐて、謂はゞ劍舞の劍舞たる要領を完全に發揮した。

河野、栃木は共に詩吟が良く、殊に栃木は音吐朗々たる名調子だつた。

齋藤は美男子で、業平の異名があり、從つて劍舞士としては多少柔けてゐた。然し捨兒などは一座の壓卷で、彼の十八番でもあつた

其他多士儕々十七八名も算した。それが劍舞の間には壯士芝居、軍事劇などを演じて、ピストルや銃砲の物凄い音をさせて、見物の膽を奪つたものだつた。

井上が柴田席に巢替したと同時に河野、栃木等も同座して去つたが、渡邊は踏止つて劍舞を尙ほ固守した。然し既に人心戰爭ものより遠退き、劍舞も次第に飽かれて、劍舞一本では興行價値が乏しくなり、遂に江洲音頭や河内音頭も合併興行をなすやうになつた。そして間もなく衰退して了つた。これも當然の成行だつたのだ。

然し一面から見て劍舞が何故全然廢つて了つたかと考へると、勿論時代が彼等の藝能を必要としなくなつたのであらうが、兎に角全然影を沒してしもうといふのは淋しい氣もする。最も今日に於ても吉本の經營する萬歳の中にいろものとして劍舞を一組入れてはあるが、以前の劍舞とは全く異り、エロもなければ、色彩もない。徒つて劍舞としての本格的定型であつても、劍舞芝居の常道からは遙に遠い存在である。


## 本社二月例會

一月の十週年記念句會に引續き本社二月例會を左記の通り開催いたします時は嚴冬、筆持つ指も冷えがちながら、作句の情熱は反つて反撥的昂騰をみせて、好箇の寒修行の一夜となることを信じます。賑々しく御來會をお待ちしてゐます。

日時　二月八日（水）午後六時半
會場　道頓堀倶樂部（大阪市南區日本橋南詰東入南側、天牛書店階上、電話南二七四九番）
兼題　「吹雪」三句　麻生路郎選
會費　金三十錢
鉛筆御持參のこと

川柳雜誌社
大阪市住吉區平野西之町
電話　天王寺一一六七番

# 噫愚陀

住田亂耿

うすら寒い陽が流れ込むでゐる白々としたベッドの上に半身を起した病詩人の二つの魂が囁き合ふ聲。——

「何をぼんやり考へてゐるんだい。」

「俺のやがて入るだらう棺桶の恰好をさ。」

「緣起でもない。太陽のある日にはもつと浮々として戀人の顏でも思ひ出したらどうだい。」

「ぢやさうでもするか。」

この會話を立ち聞いてゐた彼の第三の魂はやがてペンを走らすと眞白い紙の上に一つの川柳が書かれる。が彼の頰には涙の玉がきらつと光る。

なあに日向で棺桶を考へてるのさ

之は愚陀が昨秋病床に臥した時につくつた句である。その時に既に潛伏してゐた腸チブス菌が、俄然極月の暮に頭をもたげて、一時完全な健康狀態に復してゐた彼の若き一命を無慘にも奪ひとつた。

思へば、この潛伏菌が豫め彼にこの棺桶の句をつくらしたのかも知れない。

死といふ事は常に彼の頭から離れなかつたらしい。彼は二度全く文字通りの死線を越えて來た男で、その事を常に親しい人に話してゐた。だから悟りといふのか、若い年に似合はぬ心の餘裕を具へてゐた珍しい男であつた。

死ればよいと思ひながら電車道越わた

指組むごとに死と眠とを交へゐし

死ぬを思へばいさかひがいさかひが

倉のすみ倉のすみから死がよせる

宿命のまたゝきもせで死んでゆき

これらの句から見ても、彼の一つの心境がはつきり肯けるのである。

彼は常に幻を追ふてゐた。戀を、夢を求めて短い一生を終つた。それは彼の遺した句が殆んど女人を對像とした句である事を見ても判る。彼程あらゆる方面から戀と多角的に觀察して、しかも新鮮に川柳に生かした川柳家は少い。試みに彼の句より拔いて見ると

まばろしに唇の痕おほかりし

夢はふわ〳〵臍より湧きて

手と足から女の線を拾ひ集めて

夢を辿つて行きついた戀

風に雲に女を描く旅なりし

彼又映畫を語り音樂を愛し、酒を好むだ。酒の妖氣をかつて、映畫的幻想を彼は川柳の中に色とりどりに織り交ぜた。

脚のまじゆつに醉ひ痴れて出る
美女の笑へばかすむ大空
首を並べて春の汽車行く
闇に紛れて絹靴下を脱いだらし
秋の女灰となりゆく煙草すふ

彼は不幸にも幼くして父を喪ひ、たゞ一人の母に專ら孝養をつくしてゐた。

彼と母との二人きりの家庭は、美しい程情愛に滿ちてゐた。

のむことをいつはらぬ子の淋しきか
白髮とは淋しきものを持つ母よ
たゞれるばかり母よ極樂
高らかに笑へど影の小さし母
のぞいてくれな母よこゝろを
老ゐし母伸びし子とたゞ默す
母子して朝餉に茄子のつやゝけき
默々と息子の戀を聞きしのみ

然しこの溫かき母性愛に浸るよりも若き血に燃える彼の心に深く喰ひ入つた異性愛があつたことは

寒むかつたかに應へず戀の日を懷ふ

の一句を遺してゐるのを見ても判る。この一句こそ人間愚陀の赤裸々な告白であり、尊い眞實の人生記錄だ。

唇を許せし夜のセレナーデ
夜の街に海月に似たる女あり
体臭へ彼氏不覺によろめいて
カーテンと椅子に痴情の果しなく
こんばんはベットの上の人形よ

こんな風に街から、戀を滿喫して歸つても、彼へ性的には冷たいベットがぽつねんと待つてゐるばかりであつた。たとへいかにあたゝかい母の心が待つてゐたとしても

手枕に何をかくさん獨身者
生々しい弧獨を冬に知られまい
枕にとへば枕は寢ろと云ひました
獨り身の冬の姿に目覺めたり
ひとりぼちで闇の調味を賞りぬ

彼は戀に醉ふ反面に、かくの如く獨身の悲痛な告白をしてゐる。然しこの冷たいベットが反動的に彼に多くの夢を反趣せしめたのである事を、數へきれぬ程度々彼と枕を並べて、彼の家で泊つた經驗のある僕には解るのである。

寢床で、靑いシエードの光りに讀書し作句する事は彼の癖だつた。僕が彼に吹込むだ影響もあるが、彼は芥川龍之介の作品を愛した。又後には形式主義を或ひはシユールレアリズムの書物をも大分漁つてゐたやうである。凡そ私が知る限り彼はこれ等の書物を多く寢床の中で讀破したのである。そしてそれ等の書物から得たヴイジョンと、彼の經驗とが完全にコンビネイトして、天來の妙句がふわり〳〵と彼の寢床へ舞ひ落ちて來たのだ。

彼のベツドは魔術のベツドであり、藝術創造のベツドでもあつた。

京町堀時代、僕と二人でかほる居を訪れては、作句したり、聲色をやつたりして若き日をよくヨタつたものであつた。

河童同志愛の言葉は泡になり
幻は春の襖のものなれや
朝霧に長者靜かな箸をとり
一人娘の部屋に眞赤なチユウリップ
水にあげ水に暮れたり夏の戀
火は赤く客間の夜にペルシヤ猫

これ等の句はかほる居での彼の收獲で

ある。かほるさんから

「愚陀はんと一つしよに偶會たのんまつせ」

といふ葉書をよく貰つたが、今や愚陀と幽明境を異にする僕、うたゝ寂寞の感に打たれるのである。

表情を殺し麻雀負けてゐる

麻雀も僕と一緒によく打ちに出かけた彼は麻雀には弱かつたが、勝敗は問題でなく、麻雀から夢をエキストラクトする事が彼の好みだつたのだ。

空と地をつなぐ都會の輕氣球

BUILDINGが面喰つた彼女のキッス

ふと見上げると、一つの輕氣球が上つて居る。その横に愚陀が大きなロイド眼鏡の底から僕に笑ひかけて話すのである

「亂耽、今年からはしつかりしろよ。」

「おい愚陀!」と聲をかけた時には輕氣球も彼の大きな貌も、すうつと消えて、そこにはもとの澄みきつた青空があるばかりだ。

青空に疲れし若きころの戀

疲れもどりて服を吊せば人畏に似て

彼は戀に疲れた男だ。老ひし母に先立つ不孝の罪はまぬがれぬとも、戀に疲れて死んだ幸福な男だ。

然し愚陀よ。安心して地下にねむれ。君に代つて僕は閑あれば君の母を慰めてあげやうから。——

生前彼は僕に「君が死んだら、句集は僕が編むでやるよ。」とよく言つて呉れたが、今や全く反對の立場に立たされてゐるのである。こつ〳〵と彼の川柳の骨を拾つてゐる僕を、彼は天國で微笑しながら見守つてくれてゐるであらう。

川柳雜誌第五卷に

コケテッシュな女硝子へ息をかけ

といふ、アルベール・プレジヤンの「かつぱらひの一夜」の一シーンを思はす句を吐いてゐるが、五年後の第九卷に

霧の如くに女の息吹き窓にょす

といふ境地にまで、彼の川柳境地を深く堀り下げてゐる。僕は五年後の彼に更にその五年後の彼に多大な期時をかけてゐたのに、さつさと彼らしく昇天してしまつた。惜しむでもあまりある彼だ。

川柳を全く自分に消化して、眞實を叫びつゝユニークな新境地を開拓して行つた彼の足蹟はまことに偉大である。とにかく彼は昭和柳壇の一異彩であり、一天才であつた。

叫べども呼べども今は答へせぬ愚陀よ

肉體は亡びるとも尙ほ句の亡びない川柳

作家の幸福を思ひながら、最後に君の句抄を揭げて諸氏と共に君ありし日をしのぶよすがとする。

愚陀の句集は適當な機會を得て出すつもりであるから前揭の句との重複をもさけ次の句抄には故人の句の一部をぬいたに止る。

## 愚陀句抄

何はさておき春は戀せん

童貞へ吹く春の風春の風

金におぼれし女の黑髪

猫にかゝれた傷へ春風

鼓動も高く春なるか春なるか

のろけきけ〳〵はるのともしび

否定しつゝも戀となりゆく

肩ふれあうて初鮎のごとく

ちつと女の手と金の音

別れともない秋の赤さよ

二の腕の眞白きおなで夢深し

度胸がないと女言ふなり
四十の戀の耳そうじかな
くちづけと言ふが惡夢のうちなりし
もの憂きまでに女あまえる
おかしき限り臍があるなり
叩けばたゝく輕き秋よ
麥ばかり芽がふくでなしこの戀も
彼女の小指は櫻色だつたよ
彼女が一等美しい極樂
逢ふ日もやはりバットなりけり
この戀もかくしおほせぬ春となる
空がゆれ木がゆれ二人默るなり
風呂の寃術に女眞裸
唇を誰にあづけん夏雲よ
都會詩に彼女の靴はひかりたり
自畫像へ青き少女は笑ひたり
探してた夜は白粉瓶にゐてたのよ
風の夜の戀を樂しむ睫かな
太股へ脂切つたる顏描く
失業都市へ嗅覺は犬に似て
情痴の風景にリップスティックが折れたり
馬鹿馬鹿なくつて自分の顏の皮つまむ
苦い愛情となつて風の夜を歩む
ピウテイスポットへ角度を保つ鼻がよる
性愛技巧がネオンサインに露散する

亂耽の結婚　二句

結婚は結婚麻雀打ちに出る
顏二つ窓に並べて山霞む
まじめなども笑ひほぐした心が淋しい
猫が窓へ來て女の顏してた
碎かれし心秋に砂があり

まるれえれ、でいとりひに捧ぐ　一句

廣き額に面影はたゞひとつ
どの汽車も胃袋を運んで來たよ
あさのおちがみゆめをうらなふ
白き風もて女は夢を孕みたり
嫁ぐ話か風がころ〳〵
着物も點景に男ひよろながし
廣い窓椽で娘の腕が物語る
衣裳美學へ春風を卷く

父を喪ひし亂耽へ　一句

鼻の印象に春うそ寒し
勘定書が營養價値を持つ女
淫らな線を夜にとかしてゆく女
唇の端へ宿つたお孃さん
顎なでゝ女の腰のゆら〳〵と
猫の觸感が娼婦の咽喉に住んでゐた

母病む

氷割る手が氷に歪む
研いだ視線が肌の生毛を剃る月夜

愚陀略歴

明治四十二年十一月二十四日、大阪市瓦町二丁目に生れる。昭和三年一月より川柳界に入る。昭和四年一月川柳雜誌維持社友となり、同年四月社の組織變更によつて同人となり、後編輯局の一員として活躍し、異彩ある句風をもつて將來を大いに嘱目されてゐた。趣味は映畫、演劇、麻雀、水泳煙草等。
關西學院英文科在學中昭和八年三月卒業の豫定なりし)
昭和七年十二月二十七日死去す。行年二十四歳、法名釋友慶

故伊藤愚陀君

# 愚陀君を悼む

松丘町　二

愚陀君が死んだ。君の遺影の前に燒香した今も、尙信じられない氣がする。

卒業したら、映畫の監督として働きたいと君は云つてゐた。それから二ヶ月とたゝぬうちに君の訃報だ。君の死をきいた瞬間「自殺では？」と思つた私だつた。何の理由もなしに、そうし心の閃きを覺えたのだつたが、病氣にやられたときかされて、私の輕卒な直覺を恥ぢると共に一層君の死が惜しまれた。

愚陀君の作品は、私が云ふまでもなくユニータなものだつた。私は君に期待しつゝ君の作品を樂しんだ。一度君の作品について書きたいと思つて、初期から昨年初あたりまでの句を集めた原稿が、私の机の曳出にそのまゝになつてゐる。

愚陀君がその人間情熱と生活感情を歌ふのに、川柳を信じ、川柳を愛することのみに依らうとしたとは思はないが、新しい川柳への道を目ざす同志の、最も敬愛すべき一人を失つたことは爭へない。哀しい哉。

謹んで悼む

木枯も聞かない國へ居を移し

# 路傍集　募集句

## 影

前田雀郎選

影もくたびれて行商村へ着き　勝二
盗電の影が目出度いことを云ひ　二南
だん〳〵と影が縮まる落下傘　白丘土
立話だん〳〵影が長うなり　菊路
飛行機は影をさらつて離陸する　曉童
我が影を映じて川は暮れかゝる　法泉子
ビルヂングの影ほがらな日曜日　里町
夕焼の壁に折れてる竿の影　鴉天
影に居て子供爪先立てゝ見る　黒波
影曳いて曳いて兵營まだ遠し　水車
ルンペンの影も形も冬となり　沐天
九官に物云ふ影がある障子　木圭
夜あるきの自分の影もすこし見え　古扇遊
金のない影とは見えぬふところ手　黒天子
父と子の影が重なる猿の檻　八歩
何時だと云へば電氣の笠を上げ　春秋
影一つ破れ障子へつるし柿　南柳
影も亦考へて居る一人ボチ　狂花
人影のあはたゞしさへ黄昏れる　慕秋
きつとなる顔に鼻筋からの影　吉左右
二階から思わせ振りな影を見せ　三郎
ついて來る影もやつぱり淋しすぎ　しとし
我が影もやつぱり淋しく一人居る　一笑

### 五　客

人形師動く自分の影の中　白丘土
同情の影が目出度ことを云ひ　二南
ふり向ば我が影ながら親しめず　萬保
壁へ影大きく更ける妻として　勝二
影二つ並んでわけのある月夜　青兒
(人)我が影をいつか知つて岩田帶　明珠

---

## Nishi No Cho MEMO

### 雨緑

▼記念特輯號は豫想以上の好評ですばらしい壹行であつた事は愛讀者諸氏と共に欣びます今後も皆様の御後援を願つて、尚一層よき雜誌にしたいと思つてゐます。

▼十週年記念大會は豫想外に盛會でありました。當日は神戸の「ふあうすと川柳社」並び京都の「川柳街社」に新春句會があつたので、この方面から出席者がなかつたのにかゝはらず百二十三名出席で大盛會で滯りなく大會を終つたが、只主幹が突然の病氣で欠席されたのが實に遺憾でした。

▼川柳大會に際して祝電や祝吟を頂いた方々に記念句手拭を贈りました。

▼正月に因める「川柳展覽會」が一月九日より十五日迄五日間京都川柳五社聯盟後援の下で京都驛前丸物百貨店で開催されました。

▼同人福田山雨樓君は令息を連れて新春二日東京見物に行かれましたが、時間の都合で柳人の誰にも會はずに歸阪されました。

▼同人阿部閑生君は十二月二十五日商用で上京されました。

▼社友生田翠夢君は一月三日豊橋支部幹事の白井梅里君を訪れられ翠夢君の歡迎句會を催されました。別稿歡迎句會を參照されたし。

▼本社も聯盟の一社に加はり京都支部の平

（地）午前二時我が影法師を信じ切り　華水

## 姿

父といふ姿になつてぶしよう髭　西英子
親切な後姿へうなだれる　洩食子
新妻の姿の一つ割烹着　勝二
母の背の丸みも冬の姿なる　夕鐘
金のない姿へ笑ふものがゐる　變人
見られては困る姿をバスに乘せ　紫石
様々な姿の並ぶ檢疫所　幸捐
氣をつけの姿勢今日から二等卒　方眠
盛裝をこらした姿つんとゐる　白花子
屑買ひの姿早くも看破られ　世都象
落ぶれた姿へ秋の陽がまとも　芳峯
兒は母を案んじて姿遠くなり　銀波
舞妓もう御座敷といふ姿なり　曉童
それ〴〵に皆苦があるといふ姿　禿山
散髪屋已が姿を見て暮し　松之助
女給の姿夜でこそ良けれ　富士雄
姿なら聲なら父に似て淋し　えいを
寢姿の淫らを舍監知つてゐる　今雨
我が姿朝の電波のまゝになり　一笑

（天）仲よしに影はなつてゝ月の道　勝二

## 住田亂耽選

出勤と別な姿で飲みに來る　紫陽
姿など眼中にない筈であり　利生
錢湯に人間様の姿かな　鐵吉
だらしない姿生徒に見つけられ　紫雲
新婦の寫眞に妻を見比べる　耕民
母と言ふ姿むつきを洗ひ居る　紅
エプロンの姿となつて強く生き　沐天
日本の姿か春の二合瓶　日本村
洋粧の姿あぶなしアスファルト　錦石

### 住　句

ほつこりの後姿も面白し　白峰
みめかたち心の糧を考へず　荷千
理に勝つて歸る姿が淋しすぎ　孤鶴
幻のあらゆる姿闇に消え　ゆきら
淺ましい心の姿夢に見る　白丘土
鐵骨の端にはつきり我が姿　紫陽
姿見た者なし五年ほどになり　春秋
食ふ爲の姿へ女會ひに來る　明珠
世を呪ふ姿へ星はまたゝきぬ　變人

---

▼社友水田光哉君は本社記念大會の當日來阪されましたが繰合せがつかず不參されたので春の好季節を選んで支部一同が揃つて來阪される由是非御來社をお待ちしてゐます。

▼同人吉田水車君が今後編輯同人として活躍されることになりました。

▼平岩司郎君は桑原京郎君と交替されて京都支部の幹事として活躍されることになりました。

▼同人社友會を一月七日夜拙宅で催しました。出席者は路郎先生、山雨樓、里十九、艸樂、新水、夢裡、豆秋、梧郎、八歩、鶴峰、諸君と私

▼川柳光頭會の創立句會が二月十日夜カナメ喫茶店で開かれます、發起人は里十九、禿山、豆秋の諸君で目下奔走中です。

▼酒井駒人、中川めかく子の兩君は家事の都合で退社されることになりました。一日も早く兩君の復活を望みます。

▼社友妹尾變人君は病氣で郷里鹿兒島縣妙見溫泉へ湯治に行つてゐられます。一日も早く全快を祈ります。「來年も再來年もと湯にひたり」變人の句

▼同人伊藤愚陀君は本社編輯部同人として多年活躍されてゐましたが突然十二月廿七日永眠されました。一月十五日自宅で告別式を行はれ當日本社から多數參列されました哀悼の意を表します。

▼社友福田鶴峰君は郷里（島根縣）の親戚に不幸があつたので一月廿一日の夜行で歸省されました。

▼番傘、國民川柳、はりこの各誌は新年號より菊版型に改正されました。漸次この傾向を辿ることはよいと思ひます。

▼左記の所から寄せ書を頂きました。

岩司郎君がその任に當つて令兄欵乃君と共に本社のため活躍されました。

# 半額

半額を安いと賞めて買はぬなり　鐵吉
半額の堀り出し物へ澁い趣味　柳人
半額はキツチリ時間通りなり　水車
半額の慌てゝ買ふも女なり　三郎
半額は半分閉めた店じまひ　禿山
日給の半額呑んでいゝ氣嫌　利生
ほめられて遂半額と口に出て　伊勢子
暇がなく半額券を持ち歩き　華水
半額に買ふた六神丸の粒　春秋
「君だから半額」とは寂しいぞ　慕秋
半額で濟まぬ半額券を貰つて來　田鶴緒
半額券の奇攻——超滿員　美登利草
半額へまひるのにほふキネマ館　羅門
半額に下る北濱恐くなり　山月
二時間も待つ賣出しの五割引　路城
半額奉仕なんて圖太い宣傳馬　首
インチキでなし半額は廣告費　紅
工場の退けへ半額券をまき　明珠
半額券が二枚とてもこれ同志なり　同
半額デー味噌屋夜明けの人だから　春光
半額を切り拔いてゐる公休日　同

# 尼　綠之助選

公休日半額券もある財布たけを　角帶へ挾んだまゝの半額券　同
半額でくれた夜店をうらむこと　天知人
半額の値うちはあると父と口　同
半額は資本が搾取する定價　勝二
半額券無い活動へ損をする　同

佳　作

半額の夜店は秋の灯に疲れ　萬保
ボーナスの半額洋服屋に取られ　寒月
半額にしてもつまらぬのが殘り　祥月
半額券期限の切れたまゝ袂　柳次
半額の時間へ時計合ふてゐる　今雨
半額になつて間もなくチョン切れ　沐天
半額ですむレーヨンの柄を賞め　勝二
半額券二枚の連れを考へる　同
繪看板半額券を忘れて來　紅

◎選後感　課題がいゝ句を見せてくれなかつた。私にはピンと來る句が見つからなかつた。結局選に何か知ら不滿がある。然し無責任だと言はれても仕方がない。この二つにしか分ける事が出來なかつた。

「金澤川柳會」十五日更生初句會「本社小松支部」十二月十六日「絲の街川柳會」十二月五日「本社松江支部」一月五日新句會「AAC吟社」一月四日岡崎祥月居偶會一月八日附

▼本社十週記念大會で特製した路郎主幹の句手拭の殘部が少しありますから御希望の方には送料共金十五錢で特にお頒ちいたします。

▼本號の編輯は路郎先生、山雨樓、町二、杏三、鶴峰、禿山の諸君と私とで本社で致しました

## 前號の正誤

四十三頁（こんな夢で畢つてしまふのか毛膚抱く　民郎

## 新誌友

（八年一月廿三日まで）

「川柳雜誌」半年分（金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を提載します）

何卒此際新讀者を勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（緣雨）

澄川比紗緒、河谷田鶴緒、板倉與詩雄、井原鴉天、石飛雀天、梶谷汀雨、寶藏海月、金岡草路、金築夢人、澄田羅門、岸美登草利、柳人（鯱川支部）白曜兒、六郎、山紫、城府、柳人暮秋、巷二、祥月、玲一、研一路（松江支部）中小路孝、田村西英子、黑川孤鶴、荒井英賀夫）東晋平、沖山小市、富岡白峰、岸本木鬼（藤田紫石）八田鐘生（小西無鬼）米本貴志子（麻生路郎）湖崎清一（長崎柳秀）阿波泊水（橋本綠雨）南喜三郎、森井微十、正木琴舟、安井ひろし、奥村偉三郎、奥田啓坊、木山貞雄、須山重陽子、大越富士雄、高見柳骨、釜本柳村、有澤鐵吉、森立名、山本葉光、鈴木九葉屋丁、荒井英賀夫、仲井洋々、沖野冲咲、藤井皐山、横田精一郎、藤川三代吉（本社事務所）括弧内は紹介者

# 松蟲花壇の夜宴

## ——本社十週年を記念すべく——

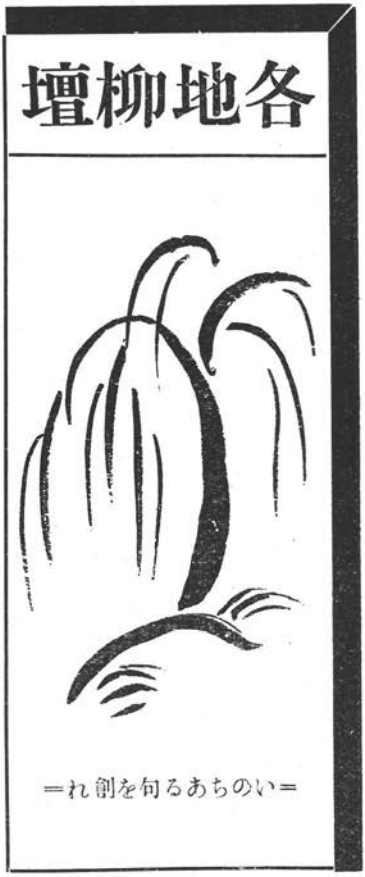
日本柳壇の水先案内として不斷の努力を續け來りたる吾が社の記念すべき、十週年祝賀川柳大會は、豫想以上の盛況裡に幕を閉され。次いで席を松蟲花壇に移して、柳壇のため且つは我社の將來を祝福するための祝盃を擧ぐると同時に、柳友懇親の實を結ばんとして有志二十四名會場へ自動車を連ねた。當席出席者に對して路郎主幹は短冊の席上揮毫をなす豫定であつたが、不幸にして主幹遽の發病により出席不可能となつた事は、かへす〳〵も遺憾であつたと共に出席者の數も豫想を裏切り、一歩、綠雨、琴人、雅幽かほる、ひろし、新水、里十九、水車、夢裡、艸樂、翠夢、鮎美、みのる、豆秋夕鐘、雨迷、禿山、鶴峰、文蝶、鵜足、葉平、四五磨、歳太郎の諸君に過ぎなかつた。

市内と云つても、松虫花壇は俗に流れず、しかも金屬性の騷音の到らぬ閑寂の地、詩を談ずるに好適の宴會場であつた階下、庭に面した廣間が我等のために當てられた。どこからか嬌聲と弦歌が流れて來るのも既に道頓堀倶樂部の句會に於て一役目すませた吾々にはいゝ氣分であつた。

何がさて、一騎當千の猛者揃ひ、宴始まるるに先つて、意氣軒昂、歡談と哄笑絶へざる中に、有藝紅裙連の應酬もうれしく、艸樂立つて開宴の挨拶を述べ、鳥山一歩氏主唱にて路郎主幹のための乾盃あり、安井ひろし氏立つて綠雨氏の過去十年、本誌に盡された功勞を激賞して乾盃、綠雨、雅幽兩氏の所感の辭あり、稍席上固く靜まらんとする時、創刊當時よりの同人かほる、ほどよい潮時と見て今夕の演藝總帥格よろしく立つて「夕暮」を舞ふ拍手と笑聲にどつとばかり、空氣は軟く碎けて、いよいよ本格的のうたげに入る

夕鐘の「梅にも春」、鮎美の手品、里十九、鮎美の「鈴ケ森」、琴人のゴンベ、ステ、コ、四五磨の奴さん、ひろしの仁和加、何れも素人放れがしてゐることはいふまでもない。續いて水車得意の聲色澤正の國定忠次、艸樂又强られるまゝにおどけた手品で責をふさぎ、兩迷のダンス一歩自ら三味線をとつてチヤツキリ節を唄ふ。里十九立ち、水車出でゝ、かほる代り、四五磨續き、禿山負けず。踊る、唄ふ、落語あり、にわかあり、歡喜と愉悦に時の移るを知らぬありさま。いざとなれば川柳雜誌社の會員この道にかけても人後に落ちず酒間を斡旋する紅裙連をして啞然たらしめる。メートルは愈々上つて、宴數時間に及び、十時過ぎ、醉步漫散席を立つ。更に遠征の相談が幾組か出來上つてゐた事は、想像に難くない。斯くも盛大なる懇親宴も多年身血を濺いで奮鬪に次ぐに奮鬪を以てせられたる主幹の病臥を思ふとき一種の淋びしさを感じずにはゐられなかつた。（艸樂記）

# 各地柳壇




## 本社十週年祝賀記念大會

一月十五日正午より道頓堀倶樂部にて

「日は東西の年にて候か」珍らしく空は廣重の昔に還り、人は屠蘇の醉覺めて、漸く詩の探求に現實の情熱を向けやうとする 三三年新春十五日、南地道頓堀倶樂部に正午を期して、我社十周年記念大會の幕は開けられた 艸樂司會者となり、華水開會の辭を述べる。定刻を過ぐる三十分、既に六十名の出席者だ 路郎主幹の「君たまへ菠薐草が伸びてゐる」の句を染め抜いた手拭に添へて、ライオンポックスと菓子包が、次々來會者に渡される。そして その都度福引の番號が讀み上げられる。全部が句の趣向。景品は句にちなんだハーモニカだ。靴墨だ エトセトラ、エトセトラ。兼題と並んで席題が四題。句會 プリントは山雨樓案の「十づくし」琴人編の「雪」特輯號だ。午後一時出席者は既に百名を突破した豫期通りの盛會である 二時半題吟全部を締切る。次で講演にうつる前「たまむし」の鳥山一歩氏等代表して祝辭を述べられ、珍らしく大阪時事新報社の渡邊虹衣氏、次で本田溪花坊氏 交々立つて、祝辭と共に所感を述べられた。最後に本社藤里好古「三笠附に據る流人」なる題下に、日頃の研讃を傾けて講演四十分に渉る。この間記念撮影あり。終るや各席題の披講、路郎主幹に代る 兼題選者庄萬よし、一場の挨拶を述べて「松過ぎ」を披講、各題三方に呈賞あり終るや鳥山一歩氏の發聲により「川柳雜誌社萬歳」を三唱、新水の閉會の辭にて、大盛況裡に記念すべきこの祝賀大會を終つた。時に午後五時半。

參會者左の通り。

綠雨、町二、夜王、鶴峰、夢裡、英賀夫、新市街、光太郎、鳴戸、新水、冬光、夏光、柳笑、豆秋、角丸、鮎美、沐天、竹勢、白蝶、星城、二那子、春陽、外喜、靜江、杏三、千春、夕鐘、白峰、翠峰、鐵史、紅、琴人、錦石、明珠、荷千、當藥、文義、雨少、繁堂、呑吸、華水、吉左右、竹楓、幸捐、春秋、文蝶、銀波、禿山、九文錢、水車、晴夫、流之助、梨風、白帝子、陽喜亭、丈五、雅幽、阿鴻、默平、南耕、鉛位、三郎、かほる、詩郎、たけを、聞路、掉二、政夫、楳太郎、葉平、柳次、さだを、窮巢、虹衣、生朗、寒月、豊豆、春光、四五磨、春齋、勝二、いわを、遊歩、柳骨、艸樂、富美三、壽仙、鬼丸、耕之助、二南、南面子、白柳子、紀太、いさむ、みつる、あやみ、翠夢、小松園、麗光、正甫多郎、溪花坊、方眠、進一、朴甫、山月、沒食子、機見女、萬よし、比古、紫石、雨迷、一歩、福太郎、享史、司郎、亂耽、山茶花、鳥語、稔、鶏足、ひろし、木邨。

### 祝電

ゴセイカイチシクス　きやり吟社
ハルカニタイカイノセイカイチシュクス　函館川柳社
トモニヨキヒチリ　京都川柳社
一〇ネンチシュクシリウカイノタメニ　マス〳〵ハッテンチイノル　神戸ふあうすと川柳社
セイカイチシュクス　みちのく吟社
ハルカニシュクス　エチゴメウコウサンロク　番傘川柳社岸本水府
一〇ポンノユビヲアハセテカンシヤスル　東京きやり吟社西島〇丸

ヤスミトレヌハルカニシユクイチヘウシ
セイカイチイノル　東京　塚越　迷亭
コウキアルキシ一〇シユネンチシクス
媛柳川柳會森雞牛子
ツギノ一〇ネンヘノカンセイチキタイス
朝鮮　蛭子省二
セイカイチシクシライカイシヨクンノケン
コウチイノル　大連　大島　濤明
ツツシミテ一〇ゐユウネンチシクス
大阪帝國大學　長崎柳秀
一〇ネンキネンチシユクシサラニハツテン
チイノル　京城　正木　柳建寺
ザンネンナガラケツセキセイカイチイノル
函館　亀井　花童子
キネンタイカイチシユクス　同
セイカイチシクス　石川縣本社小松支部
ゴセイカイチシクス　島根　尼　綠之助
ゴセイカイチシユクス　岡山　田邊　苦香瓏
一〇ネンクチシユクス　伊豫　田村　西英子
セイカイチシクス　山口　吉川　啞人
キネンクカイチシクス　京都　紀　二山
ゴセイカイホシユクス　奉天　岩崎　柳路
セイカイイノルケツレイバンシヤ
福田　山　雨　樓
シユクス　ヒトムカシドチラチミテモ
ナツカシク　田　中　彩　秋
ジユウネンノニンクケフノヨキヒクル
青　山　孤　舟
ゴダイカイチシユクスケツセキザンネン
京都　藤本　福造
ゴセイカイチシクス　大　石　文　久
セイカイチシクスベツフニテ
別府ニテ　武田北人

## 祝　吟

丘の上に立つ子よ歌へ高らかに
大阪新日報社　吉本　寛汀

## 席題　初　雪

松丘町二選

初雪をつめたう受けし掌　比古
とける程初雪のある掌　吉左右
初雪は瓦で溶けるものなりし　白柳子
初雪が胸に積つた仕事服　翠峯
初雪を見る手女の肩にかけ　春秋
初雪へ煙突のけむり生きてゐる　鮎美
初雪に匂ひせぬのが淋しくて　みつる
初雪へ去年の簑を出してみる　いわを
初雪に下駄の鼻緒がゆるむなり　同
初雪を載せて工場は動き初め　沐天
初雪へ嬉しく歩く肩車　柳笑
初雪に郵便脚夫ひとりゆく　葉平
初雪の廊下に生徒居らぬなり　幸捐
初雪へ人形抱いて濡れたがり　雅幽
初雪の現像室で暮れてゐる　艸樂
友禪が匂ふ初雪暖うゐる　新市街
初雪へ襖の隙を叱られる　柳次
初雪のちらつく中に羽根を突き　琴人
初雪をかけて來た子のまろき瞳よ　吉左右
初雪へ子等の外套轉びさう　荷千
初雪に傘はいらない男の子　掉二
初雪へ好い姑と手をあぶり　かほる
(佳)タクシーの片腕寒い初雪の　鳥語
(同)初雪へ妻高下駄の齒を削り　四五磨
(同)初雪にひよこが死んで一羽ゐる　艸樂
(同)初雪の煤をまじえて消えてゆき　二南
(同)初雪へボタン落した兒が戻り　柳次
(同)初雪へ河の中なる快速車　竹楓
(同)初雪を默殺したるビルディング　杏三
(人)初雪に寒い親子の萬歳師　冬光
(地)初雪もたつきの靴に汚したり　水車
(天)初雪に將棋の駒と溫たまり　鮎美
(軸)初雪が睫毛に降るも女の子　町二

## 席題　襦　袢

かほる選

三段の友は刺子の襦袢にて　鳥語
長襦袢爪つて欲しい姿なり　柳次
長襦袢脱ぐ妹はせなをむけ　掉二
長襦袢蹴出しチラ〳〵醉ふてゐる　竹楓
みなみ陽の部屋にまつ赤な長襦袢　豆秋
長襦袢今宵敷布の白さに寢　沐天
流連が夢にえがいた長襦袢　柳骨
襦袢まで女房に着せてもらうなり　翠峯
快方に向ひ襦袢の襟を替へ　沒食子
長襦袢男の顔が近くある　町二
長襦袢ふすまひとへの返事する　吉左右
長襦袢ちらりと見せて座られる　曲豆
花びらが襦袢の襟にひつかゝり　華水
おつさんのネルの襦袢へ紐をつけ　文蝶
着こなしを叱り襦袢の褄をひき　白柳子
十能を襦袢の袖に持つ娘　禿山
ぬかるみに舞子は襦袢たんと見せ　夕鐘
二階から襦袢がのぞく廊の街　いわを
唐人お吉の長襦袢淋しくかゝつた　楪太郎
未亡人者氣を見せてゐる襦袢　聞路
古着屋の安い襦袢は風をうけ　陽喜亭
長襦袢いらぬと云ふは十五六　白蝶
見合ひいま襦袢に汗をして戻り　夜王
長襦袢亭主の知らぬ柄があり　英賀夫
奥樣の襦袢姿に氣を引かれ　小松園
ぐんぐんと異性へ迫る長襦袢　白帝子
色街に育ち襦袢の襟が派手　春秋

長襦袢見せて仲居はヒョイと立ち　山月
長襦袢見せんがための安來節　里十九
令嬢の襦袢の柄が見たいなり　鐵史
長襦袢一つありますと女給なり　みつる
襦袢まで見せておばんは踊るなり　新水
女房の襦袢に殘る若さを見　光太樓
長襦袢だけが知つてるかくし藝　同
干竿のしゆばんへ冬の陽が當り　紅
よくはげた襦袢炬燵の上にかけ　幸捐
一人者淋しく襦袢へ手を通し　鳴戸
初産へガーゼの襦袢買つて來る　丈五
長襦袢柄も小まかく氣も變り　四五磨
赤過ぎた姉の襦袢を踏んでゆき　明珠
口答へ襦袢の襟を直される　二南
長襦袢　女を赤で埋めて居　小松園
長襦袢好きな芝居の繪を染めて　鶴峰
絹ものを擴げた中の長襦袢　文義
(人)長襦袢近所の噂面白し　雨少
(地)啖呵とは別にきれいな襦袢なり　水車
(天)襦袢一つで勘平に生きうつし　鮎美
(軸)襦袢とは別に息の足が延び　かほる

席題　女　琴

階級をはつきり知つた女工達　人選
朝のバス男々しく女ぶら下り　麗光
思ひきりすねを見る氣のコンパクト　紀太
女の手つめたう感じて落葉ふむ　杏三
女からくどかれてゐる律義者　比古
紅つけて今宵を生きてゆく女　いわを
ひよろながい素顔の女とはなりぬ　沐天
ゴム靴で働く女貧けでゐず　鮎美
相談は未だ纏まらぬ女客　陽喜亭
嬉しさを女はつきり意識する　阿鴻
聲震はせし唄　女に　道淋し
子を抱いて母なる女丸う寢る　晴夫
母に似て小さく座る女の子　柳骨
二三盃いける女の老けて見へ　かほる
嬲られた女に思ひ寄せて春　詩郎
洋裝の女へ凍るアスハルト　錦石
思ひ出に女の瞳若やぎぬ　竹楓
二十一金糸の胸に秘める事　新市街
橋に立つ女に寒い〳〵風　鳥語
哀愁にみつる女の眼に氷雨　町二
氣持ちよく醉はして女座りかへ　明珠
あれこれと迷ふて女行くと決め　文蝶
生意氣な女へコーヒあついなり　華水
見違へた女へ話し口籠り　夢裡
金貯めて女、女の理想あり　耕之助
逆つてゐるのを女氣づくなり　雨少
養父母へ女になつた立姿　春秋
(佳)ぬけて出る女に土地が固過ぎる　雨少
(同)まけていよまけてをりなる女親　方眠
(同)鐵瓶の湯氣をへだてゝみる靨　町二
(同)人込みへ女腹立つ顔で居る　掉二
(同)決心の鈍い女と歩かされ　華水
(同)鏡拭き〳〵女の匂ひ朝にゐる　竹楓
(同)ほゝ杖の耳へ女の笑ひ聲　富美三
(同)その弱さ女手紙で云つて來る　みつる
(人)ほんたうの姿乳房を吸はせて　春秋
(地)子をひとり生めば女のたゞり切り　紀太
(天)愚痴つぽい女財布を二つ持ち　柳路

喜び　雅

幽選

さだを
綉帶に込み上げて來る凱施譜　政史
竹勢
喜びの席酒があり餅があり　南耕
喜びと別に女の顔のつや　白峰
喜びを迎へる彼女隅に居る　阿鴻
喜びを冷たき石に告げる身の　禿山
成功を喜ぶ母の瞳は濡れて　三郎
喜びを母は涙に見せて居る　富美三
喜びは一家揃うて興安嶺　楳太郎
喜びをかくし切れない無口者　耕之介
母一人この喜びに泣いてゐる　光太樓
喜びえ母不覺にも泣けてくる　鬼丸
喜びの顔へ女房は問ひつめて　銀波
喜びは社友同人のみならず　曲豆
喜びの席にひろげた海老のひげ　錦石
喜びにカフス釦が見つからず　鐵史
喜びの姉は花輪へうつむける　吉左右
よく賣れた厚司金錢登錄器　幸捐
喜びの涙となつた手を握り　夕鐘
喜びに次の襖もはづされる　掉二
喜びに母はあはてた聲になり　夢裡
母の耳へ聞こえてほしい歡喜なり　春秋
喜びの中へおくれて叱られる　明珠
突然に來て喜びの席にゐる　水車
喜びの部屋きつちりと閉められず　陽喜亭
喜びの頰にヂレット音を立て　町二
喜びはかくせず鯛をつゝいてゐ　夜王
喜びの涙流れるまゝでよし　同
喜びの言葉は記者にまかしとき　角丸
喜びへ出入はげしい勝手口　同
喜びへ花かんざしはゆれるまゝ　春陽
喜びか知らぬが子供八人目　同
喜びに火鉢の椽があつくなり　豆秋

喜びの電波は春の海を越え　同
(佳)お師匠に喜ぶを叱かられる　丈五
(同)喜びへ銚子次ぎ次ぎ並べられ　鬼石
(同)喜びは父と母とに手をひかれ　英賀夫
(同)喜びの顔は危ぶなく泣ける顔　文義
(同)喜びを告げに行く卷帶をする　同
(人)喜びの涙ぐましく居るばかり　柳笑
(地)喜びへ小さな髷の母であり　春秋
(天)喜びの聲は九官鳥もして　萬よし

兼題　松過ぎ　選

松過ぎの街は眞冬の風尖り　みつる
松過ぎへ南天の實が一つ落ち　機見女
松過ぎに粥をすゝつて立ち上り　豆秋
松過ぎのまだ歸らない旅便り　千春
松過ぎて夢なる金がよごれてゐ　鮎美
松過ぎて島田嬉しく結ひ馴れる　阿鴻
部屋住は松過ぎバーを寒く出る　多郎
柴つ葉服もう松過ぎを脂染み　默平
松過ぎて電話の角のとれて聞け　夏光
松過ぎを畏つて仕舞ふ氣で出かけ　毒仙
松過ぎを靴下ずらす子が歸へり　司郎
時の流れと松過ぎて老舗賣る　新水
松過ぎて去年拾ふた金を吳れ　耕之介
松過ぎて茶の間の母の靜かなり　冬光
松過ぎて青バス銀バス疲れて居　雅幽
松壓ぎのリズムたっラッシュアワー　富美三
胸に手を組み松過ぎの灯へ座り　荷千
松過ぎへ金糸銀糸の胸淋し　新市街
松過ぎの下駄の鼻緒に降る粉雪　町二
松過ぎの餅燒いて妻と夜を籠る　比古
松過ぎたことはつきりと爪に見る　柿次

松過ぎてまだいゝ口が見あたらず　鬼丸
松過ぎになつて手術をとりかゝり　豆秋
松過ぎてからも元氣な赤ら顔　山月
松過ぎて愈々整理するらしい　雅幽
松過ぎを留置場から戻つて來　陽喜亭
松過ぎて日光浴の陽が弱し　鮎美
松過ぎに九官鳥は陽を浴びる　竹楓
松過ぎてスキーも出來ぬ暖い冬　曲豆
松過ぎて元の都會となりにけり　沐天
松過ぎて碁仇の來るいゝ日和　吉左右
松過ぎて屠屋が擱むポチ袋　紅
松過ぎて人の姿のあからさま　水車
七五三繩を粉雪と共に採りに來る　杏三
白石は持たずじまいで松は過ぎ　豆秋
松過ぎてどうにもならぬ出納簿　掉二
松過ぎを樽奴も吸ふたことにされ　同
一錢にもならず二月の聲まじか　鬼丸
松過ぎにまだ醉がある朝の壁　白柳子
朝寢する事も松過ぎ許される　鳥語
松過ぎて逢ひに來たとは產の親　新水
松とれてからは押賣ばかり來る　京郎
松過ぎに揮發の瓶と訪問衣　山月
背水の陣へ松過ぎやつて來る　華水
松過ぎの風に影ある裏通り　雅幽
名士記事減つて新聞松をすぎ　當藥
とぼけ顔して松過ぎの火鉢にゐ　春秋
松過ぎは養子厚司の聲で來る　たけを
松過ぎの星へ迷ひを捨てる足　荷千
〃飾りとれば淋しきもとの家　夏光
松過ぎを嫉妬の妻の前に居る　沒食子
松過ぎの入口なにか淋しすぎ　千代吉

松過ぎて簡易保險を集めに來　耕之介
松過ぎも袴はなさず國家主義　亂耽
松過ぎて一升瓶が疑ぐられ　英賀夫
松過ぎた又も工面だ借金だ　春齋
松過ぎてこめかみ寒い今朝の風　白峯
一儲けする氣で松の内を過ぎ　柳笑
松過ぎて仲居國への初爲替　春光
松過ぎて月給日まで日を數へ　勝二
松過ぎて去年の月賦取りに來る　九文錢
松過ぎに妻あつけなく笑ふなり　四五磨
更生の意氣松過ぎを宵に寢る　默乎
松過ぎの女中きれいな手で戻り　夕鐘
松過ぎを靴はきしめて出は出たり　夜王
松過ぎを犬つながれたまゝでゐる　同
松過ぎの戸を叩くは風か手か　葉平
松過ぎの宵の蒲團をのべさせぬ　同
松過ぎをこうして居れぬ餅のひゞ　二南
松過ぎの風邪を叱つて風邪をひき　同
松過ぎの女房豆炭使ひ出し　琴人
松過ぎの輪飾り一つ風にあり　同
(佳)松過ぎを新たな悲觀飲み續け　春齋
(同)〃明の風雲急の街を行く　新市街
(同)松過ぎをも一度誓ひ直すなり　勝二
(同)松過ぎに心の隙を指摘され　明珠
(同)松過ぎて機械の如へ動くなり　四五磨
(同)松過ぎて忘れた事のある氣持　光太樓
(同)松の内の暗示のまゝに動くかな　一步
(人)松過ぎてやはゝ生活線にあり　新市街
(地)松過ぎもつての外の友が來る　聞路
(天)松過ぎて眞面目に廻る日附判　文義

## 川柳雑誌社 小松句會（石川）

上野錦水

辭

壓迫から逃避、逃避から再生と云つた道程を辿つて、再び柳界に立つ事になつた。もう壓迫は受けない。

夫れ天地の力は無限である。我々の詩索の開拓には、其無限に對應すべき更に偉大なる努力を要す。自らの天才をたのみて、常に練磨せざる者は、寧ろ凡才にして孜々と倦まざる者に及ぶ能はず、川柳達成の要諦は自らの不斷の努力に歸す。

柳の滴

白き齒に觸れし笑の多き夜　錦水
あでやかに最初の火蓋切られたり　同
くづれても又積み上る蟻の塔　同
絶對にと言ふ力を信じたい　同
置き去りにされてくバットのかなしさ　白山坊
くわへ楊枝のドテラ向座に坐り　同
荒壁の干せガラス戸の蟲　太魚
大吉え女將は女將だけの腹　同
長蛇の夢あまりにも汗の襟　同

（十二月十五日夜）木の香り高き太魚居の奥二階折柄硝子戸へバチ〳〵と降りしきる霰の音を聞きつゝチン〳〵と湯のたぎる火鉢を圍んで懸命の作句、當夜は大阪の本部（川柳雑誌）より祝電に接し同人の意氣強く盛會裡に午後十時散會す

出席者　兎月　松水　柳村　青嵐　革又　太魚　白山坊　錦水　美松の諸氏

新築　錦水選

新築へ柱時計のかけどころ　松水
新築の家へ名札のあらたまり　柳村
新築のやうやくなれた勝手元　美松
新築は先づ神棚のかけどころ　松水
（五）新築のかべぬれてまた今日も雨　白山坊
新築に坐ればチン〳〵湯がたぎり　兎月
設計へ妻の勝手も取り入れて　柳村
新築の白さ電燈の明るすぎ　白山坊
新築へ明るい朝が訪れる　松水
（人）夜の襟へ新築ごこち風があり　革又
（地）新築へ古びた板の使いごこ　青嵐
（天）新築の壁のしめりに冬を知り　革又

男の子　太魚選

一猪口を呑んで男の子が笑ひ　白山坊
ぬかるみをわざ〳〵あるく男の子　柳村
こんな事で泣くんぢやない男の子　兎月
玩具だけ貰つて男の子抱かれない　錦水
男の子お客があつて尚ふざけ　兎月
男の子さて中學か商業か　柳村
男の子巡査になつて見たい劍　革又
男の子打つて嬉しい父となり　錦水
女へ連れて來た子の溫和しい　同
（秀）乳母の手をのがれすばやい男の子　松水
（同）軍艦も鐵砲もほしい男の子　柳村
（同）男の子吹雪の中を歌つて來　革又
（軸）大關がきまるまんま子の角力　太魚

會社　白山坊選

酬當はこれきり出來ぬ會社なり　柳村
會社まで立小便をこらへてゐ　美松
會社出て他人染みるも女事務　革又
會社もう社長が退けたにぎやかさ　松水
會社かと問へば返事のあつけなし　柳村
會社の空地に畫を出て遊び　錦水
退け際へ社用の外のメモを書き　革又
支店長六法全書などをくり　柳村
（秀）コンパクト使つて退社時間なり　柳村
（同）別莊の横に會社の分譲地　同
（同）カナリヤが今日も給仕の世話をし　太魚
（同）夕闇へ重く會社の門が閉ぢ　松水
（同）暫くは朝の會社へ續く人　錦水

火鉢を圍んで　松水選

あけつぱなしにする火鉢から指圖　錦水
十二月火鉢を圍む十二月　兎月
マダ宵の置屋火鉢へ居崩れて　革又
炭ついでそれから話しひとしきり　柳村
溜息の二人へ火鉢冷へて行き　革又
（佳）女客火鉢に遠い膝がしら　革又
（同）停電の火鉢女の手が揃ひ　自山坊
（同）火鉢から一人立つた風を知り　青嵐

日溜り　柳村選

日溜りに相手のない子一人居る　兎月
（佳）日溜りえ子供をせて何に賣り　太魚
（同）日溜りにあやぶく生きた冬の縄　兎月
（同）日溜りを見つけ無性な小犬なり　革又

## 川柳雑誌社 天王寺句會（大阪）

一月十一日夜　於釜本柳村居　須崎豆秋報

寶惠駕　琴人選

インフレの春へ寶惠駕威勢よし　豆秋
混雜へ寶惠駕邪魔な足で來る　三郎
甘酒が出て寶惠駕のつかれてゐ　卜居
寶惠駕へ乞食の坐つたままでゐる　綠之助

寶惠駕の女の秋よごれそう　鬼丸
兒等のく寶惠駕に乘るキューピサン　柳村
寶惠駕に附くパトロンは漫畫めき　水車
寶惠駕の聲夕闇にとけて行く　紫石
鼻の穴黑うして寶惠駕戻つて來　夕鐘
二階からみる寶惠駕はゆれてゐる　鮎美
(客)出しぬいて寶惠駕を持つ喫茶店　南面子
(同)寶惠駕の妓やわらかそうに搖れ　豆秋
(同)寶惠駕の景氣へ春の霰する　鮎美
(同)寶惠駕くるわへ派手に歸つて來　友帆
(同)寶惠駕へ勝氣を見せる姉藝者　同
(人)寶惠駕の內の伏目の長まつ毛　葉光
(地)寶惠駕の聲ばかり聞きもされてゐ　紫石
(天)寶惠駕の方へ懷手も押され　流之助
(軸)寶惠駕はお輕の型で搖られきて　琴人

心　琴人選

顏つきの割に心の張すぎる　遊步
獵奇の灯心亂れぬ空財布　南面子
履歷書が心にもなき世辭となり　柳村
それだけを女給に心見すかされ　三郎
矢のように急ぐ心をバスにゆれ　友帆
心をいたむ母の背丸し　鬼丸
ほんとうの心を書いた置手紙　晩春
心から禮を言ふてる二日醉　夕鐘
こゝろうごいて瞳のやりばに困り　卜居
その疑心暗夜へ狂奇續くなり　紫石
表情の心にうつる暗い晝　鮎美
春さきの心に觸れし青い空　豆秋
アスフヮルトをころがつて行く遊心　葉平
(軸)氣心を知つたばかりで未だ他人　琴人

黎明　鮎美選

山寺で見る黎明へ朝がすみ　夕鐘
黎明にひとり尼僧の蓮を剪り　卜居
黎明や己が心を恥じて立ち　友帆
寢不足の眼へ黎明の富士が見え　同
黎明へ提りこぶしの筋青し　紫石
黎明へ橋の下から起きて來る　豆秋
(佳)頤紐をかけた巡査へ明けかける　同
(同)黎明へ生きる憐みの列が出來　南面子
(同)善人の呼吸黎明に應へたる　卜居
(軸)黎明へ露はひかりて水となり　鮎美

陽氣　水車選

あすを信じて一合の酒に醉ひ　鬼丸
二日醉陽氣な朝の懷手　南面子
陽氣な男に金は無いのなり　梨風
大丸髷へ湯がしやん〳〵と沸いてゐ　卜居
酒呑んでやつと陽氣を取戻し　紫石
盃をなで〳〵父は陽氣なり　同
(軸)たなさんに陽氣になつて怪しまれ　水車

金　夕鐘選

バットの金が反抗兒となる夜　卜居
金の無い足が靜かな夜をたどり　三郎
金の音本能的な目をさまし　友帆
金鑛の夢草鞋がけの夢　豆秋
金もなく子寶もなく六十五　晩春
ひとり身へ金が嗤ふた夜の壁　鮎美
(軸)千圓と輕うに言つてのけたので　夕鐘

朝風呂　友帆選

內の親父も朝風呂がすきでした　晩春
朝風呂を出ればまぶしい陽があたり　遊步
今着いた船で朝風呂たづねられ　夕鐘
朝風呂に我顏だけが貧乏相　柳村
朝風呂は人の數だけ桶を出し　水車
健やかに吾れ生であり朝の風呂　葉平
朝風呂の湯氣に動いた女の子　卜居
朝風呂は日課素足のまゝで行く　南面子

心境雜吟　葉平選

水色のネオンに似たる戀なりき　友帆
一人れむれば枕のモミが飛出して　三郎
裸木へ共に笑ふた兒を偲び　南面子
別れて寂し雲脂をかく哉　紫石
冬の朝馬のひづめがとがりきり　夕鐘
嚴として父のすがたに暮れるなり　鮎美
松よこになり正月の色褪せる　琴人
(軸)ひたすらに夜をとかす灯のゆれやまず　葉平

## 川柳雜誌社 御旅句會（大阪）

生田翠夢報

一月十日の十日戎の宵から南地いし堂に於て恒例の句會を開いた。寶惠籠の聲が表を賑やかに通る。隣座敷も春のさゞめきの中に作句に精進した路郎先生琴人さんの御出席あり樂しい會であつた。

席題　刺　青　翠夢選

世の中は押しの一手と入墨の　圓角
老ひたとて刺青だけの若さあり　みつる
刺青へ女給こわ〳〵酒をづき　紫石
二の腕の刺青小供聞いてゐる　多郎
親方と云ふ刺青の細い腕　文蝶
大阪もせまく刺青生きてゐる　同
(人)入墨をちらと見せて藝者醉ひ　多郎
(地)刺青の鍵へ眞冬の風が泌む　紫石
(天)入墨に嬉しい戀を秘めて生き　琴人

（軸）入墨もしますと　女命がけ　翠夢
席題　十日戎　圓角選
練飴を握つたまゝに子はれむり　紫石
十日戎下ばつかりを見て歩き　文蝶
十日戎すきな女をはぐれさし　多郎
儲ける氣十日戎の列になり　みつる
（秀）笹に福ぶら〳〵させて醉つ來る　琴人
席題　パイプ　路郎選
どろ〳〵に醉つてパイプ見當らず　紫石
社長のパイプつまる日のあり決算期　翠夢
マドロスへ煙草つめ〳〵生返事　多郎
煙草より象牙パイプに艶をつけ　同
（人）春風よ吹け〳〵パイプ逢ひにゆく　文蝶
（地）スマートを誇るパイプはコハク色　琴人
（天）うつぶんの歯に竹パイプ歪めつ　紫石
（軸）パイプくわえて赤字みつめる　路郎
兼題　眞冬　琴人選
水流る眞冬寂寞だけ感じ　新水
ほりごたつ眞冬湯の町靜かに居　多郎
眞冬夜へ背を向けコップ酒をのみ　紫石
とんがつた眞冬の風へ逢ひに出る　翠夢
寒行の夜更の冷えへ泌みわたり　同
（佳）逢曳きに驛は眞冬の風が吹き　多郎
佳　煙突の煙りのみ動く眞冬なり　圓角
（同）逢つて歸へれば眞冬が尖る　みつる
（軸）背を丸く眞冬の街の四十妻　琴人
兼題　鐵　路郎選
成程なーと地下鐵を見て歸へり　文蝶
鐵骨がゆらぐと見たり醉眼の　翠夢
兼題　秘密　路郎選
いつになく秘密を知つた眼を反らし　新水
疑を晴らす秘密の小さすぎ　文蝶
摑んでる秘密妾は負けてゐず　多郎
鍵だけが秘密を守る味方です　同
桃色の秘密を抱いて淑やかさ　琴人
旦さんの秘密運轉手だけが知り　同
片鱗をのぞかし女默したり　翠夢
こゝだけと云ふ秘密をばきかされ　同
過去は過去水に流してくちづけん　同
（人）無口だが秘密なんかは守れない　圓角
（地）泥はけばはくそで女逃げてゆく　多郎
（天）ホテル〳〵秘密の屑の溜りごこ　同
（軸）こゝまでは云そもよいとじなれ　路郎
（同）隱しても嘘を云つても子は育ち　同

川柳雜誌社　加茂川句會　（京都）

一月廿一日夜仲源寺にて　平岩司郎報

首　紫明選

モデル毫首に格子の影が伸び　麗光
無精髭首の黑さを笑はれる　晃淵
假縫の首へ廻つて唾をのみ　良之祐
雪國の首だけ出して人がくる　由之助
首をかしげて借金のこと　綠雨
いたづらを知つてしまつた龜の首　迷兆
ストーブに首の話か丸うより　蜂郎
ふと出した首を見上げるビルヂング　乃の字
遠ざかる驛へ名殘りの首を出し　冠岐
言切つて出た首すぢの寒かりし　白扇
剃刀へかましきつたる首を向け　啓秀
父親の首へ冷たい兒の手來る　佐一郎
首すじをはふ毛も姉の世帶じみ　迷兆
觀衆へキリンの首は延び足らず　同
（五）首になつたとほがらにてやつ來る　葉平
（同）悶々の首をかしげて夜の氷雨　悟久
（同）情實の首をちゃめた關東煮　竹雅
（同）首筋へ抜毛の落うて侘びしかり　昌一
（同）詰衿の汚れて今日も無事な首　佐一郎
（人）首たれて挨拶花を雨の音　竹雅
（地）首にするだけと妾へ洩したり　乃の字
（天）首卷きの狐が恐い他人の兒　同

先生　良之祐選

先生の通りに動く運動場　雨水
先生の氣げんの惡いひなたぼこ　綠雨
先生の子が先生に叱られて　乃の字
獨身と云ふ先生の靴の泥　双光
先生の手が冷たいに皆さはり　欵乃
先生の嘘あちこちに取り卷かれ　迷兆
先生の靴下の穴兒がみつけ　富美三
先生と先生他愛ない話　紫明
盛り場で子と先生と行違ひ　櫻月
先生に合へば昔の事になり　悟久
先生の昔の靴が干してあり　新水
（佳）先生に許して貰ふ父の主義　竹雅
（同）先生の碁に宿直を更せさせる　雨山

綠雨選

悪友の便り英語を交ぜて來る　双光
消息を絶つてアルプス又吹雪　冠岐
初年兵たまの便りへ親しめず　逆兆
寄宿舍に一人殘つて便り書き　櫻月
久しぶりの便りに墨がうすすぎる　富美三
此の便り書く屋外は吹雪です　同
簡單な便りに皆んな無事な里　悟久
假名だけの母の手紙へ泣けて來る　紫明

春の夜のひみつを包み便りくる　葉平
發車ベルすぐお便りが消へかゝり　雨山
(佳)國に出す便りの端に兒が育ち　佐一郎
(同)京の春氣安う居ます初便り　竹雅
(同)打明けて吳れる便に腕をくみ　良之祐

商人　新水選

商賣氣放れた春の緒口を受け　紫明
小店等出して奥樣腰低く　白扇
株の値の事に商人二人ねる　双光
生きるべき恥なき心よ屋臺店　冠岐
行商人不作の事を聞き飽きる　櫻月
儲からぬ事も商人頭下げ　悟久
商人の自分は無理な日が續き　麗光
商人は屈托のない時間あり　良之祐
青春の意氣商ひ親しめず　迷兆
無理聞いて商人といふ型で居る　啓秀
商人の腹立ち笑ひに紛らしぬ　同
(人)行商人故郷の道をそれて行き　白扇
(地)商人の言葉を笑ふクラス會　迷兆
(天)商人の厚司冷たき夜の膳　麗光
(軸)電話にも又商人の辯があり　新水

校門　司郎選

母の背にくぐる今日から一年生　ひとら
校門を出ればかすめる春の風　乃の字
就職も出來ず校門離るゝ日　冠岐
校門をくぐり朗かな氣を取戻し　啓秀
校門で遲刻の足をゆるめたり　良之祐
電車から見る校門にある懷舊　コウシュ
校門に待ち伏せをして奢らせる　乃の字
校門に先生が立つ一年生　富美三
兄の姉の居る校門へ遊びに來　蜂郎
新築の校門電車道になり　双虎
校門を出てから走る俄雨　新水
校門を出るとノードが邪魔になり　佐一郎
親友を待つ校門が寒いなり　同
(人)皆母の傘で校門行きつまり　雨山
(地)泣かされた子が校門の隅を　麗光
(天)校門へ足袋をはかないのが目立ち　新水
(軸)校門へ校醫スリッパなで來る　司郎

新しき歡び　葉平選

添ひとげる二人山手の家を借り　双光
草の家の何をか云はん草の餅　歎乃
降つて湧いた歡びさらの割烹着　紫明
更生の鍬に感じた歡びよ　冠岐
中知らずとも朗かなり子の瞳　迷兆
感激のるつぼにむせて歩み寄り　ヒトラ
少さな生命が躍動せる歡び　富美三
胎動の希望に萠る母性愛　白扇
萠ゑづる新芽と共に開拓地　同
新生の歡喜へ晴れる雲走る　佐一郎
手紙燒盡して新しき歡びに入る　同

(軸)勤務先大原社會研究所　葉平
(同)新しき歡びにある影二つ　同

## 阪大川柳會（大阪）

十二月十九日　丸島利生報

B就職する

兼題　卵　路郎選

見舞品迷つた末が玉子なり　一笑
累卵の生活になれた女なる　利生
手品師の手付きで卵透して見　芳一
生卵すゝるベットに聞く落葉　同
地玉ありと拙い筆のわび住居　山彦
身仕度が出來て卵をのむ選手　同
逃げて來た朝をわびしく生卵　橙舎
焦臭いオムレツも良し新世帶　同
卵卵ニュームの鍋に踊つてゐる　路生
感覺は卵に似たる彼女はも　同
(人)白い手に卵無慘に割られたり　橙舎
(地)卵でも召されと上目つかわれ　湧三
(天)「地玉あり」がキリ〳〵十二月　利生

兼題　上役　路郎選

強ひられて下つ端酒をのみならひ　山彦
事勿れ主義に上役晃をつけ　利生
わざとらしからず上役氣をくばり　方正
上役のその上役の方針だ　正甫
影日向上役チャンと知つて居り　同
賢さはたゞ上役を奉り　芳一
長官へ心易げに給仕ゆき　同
下役をバックにもつた強さなり　湧三
また來いと云ふ上役の應揚さ　同
上役は云ふ丈云ふて歸るなり　柳秀
上役の短氣に惱む女事務　同
上役の機嫌給仕に敎へられ　同
法網をくゞる課長の凄い腕　同
フン〳〵と云ふ上役の前に立ち　路生
上役であるをおちよやん知つてゐる　同
聞く丈は上役聞いておくと云ふ　同
感激のない上役を輕んずる　同
(人)上役と時計の針を見て暮し　橙舎
(地)上役の椅子は外から占められる　方正
(天)我乍ら追從笑ひ課長室　橙舎

雜吟　路郎選

歯がぬけて妻憎らしい顔になり　正甫

月給をとるばつかりが能ぢやないせき止めた水の力を知らなんだまとまりのつかぬ話も春なれやすゝりなく合間〳〵のコンパクト君だけは貸して呉れると思ふたが折カバン辨當箱の音がする　路

席題　笑

笑はせるだけで應援　辯士濟み　利生
笑ふといふ事を忘れて金をため　方正
氣を引いて笑ひ話にしてしまい　路生
笑はれて貯めたお金がものを云ひ　橙舍
笑顔見るたのしさ同じ社につとめ　同
十八はまだ笑ひたい期であり　同
何時になれば笑つて越せる年の暮れ　方正
病人へ醫者の笑のうつろなる　同
舞臺では笑ふて居れぬ五郎なり　路生
花道の五郎笑ひに送られる　同
馬太傳に生きて笑はぬ女はも　橙舍
にも〳〵と笑ふ視線は避けられず　同
嘲笑ふ横顔なれど美しき　路生
(人)大聲に笑ひ度い程淋しくて　同
(同)押へつける樣に笑を手で制し　柳秀
(同)笑はれて居るも知らず老婆心　利生
(地)一笑に付して上役とり合はず　山彦
(同)爆笑でかの人ありと知られず　橙舍
(天)その顏を笑顏に變へて高座に出　路郎
(軸)笑はぬ父に恩給がつき　路郎
(同)笑はれた事を娘は根にもつて　路郎
(同)掏られる苦笑ですまず地位にゐる　路郎
(同)笑ひ事でなく屋上の煙を見　路郎
(同)輕蔑の意味も含ませ笑つとき　路郎

席題　支人

支人は手振りで解る　路郎
それみたか支人上りとさげすまれ　正甫
素人と云はれて旦那不服なり　利生
そんなこと醫者でなくとも知つてゐる　橙舍
デザートに入つて支人看破され　山彦
(人)支人の樣な話うそがあり　筑川
(地)支人を落藉して母と呼ばせない　芳一
(天)錦魚やに舞妓たもとを敎へられ　正甫
　　柳秀

川柳雜誌社　**神戸句會**（神戸）

十二月十三日　於華水居　明珠報

ぬくい　互選

ぬくもつてからは何んにも言はぬなり　明珠
懷手ぬくい銀貨で釣りを取り　繁堂
子守唄家をはなれて溫いとこ　幸捐
ストーブの溫みへ手紙來ない夜　華水

火箸　互選

火箸まだ晝の返事が來ないなり　明珠
握られるまでは立つてる火箸　春秋
どこからか火箸を出して關東煮　華水
よく笑ひ火箸へくせのある男　吉左右
立つて行く女房火箸を横にさし　同
煙草吸はぬ男は火箸持ちつゞけ　明珠

落ちる、毛糸　互選

毛糸玉小さくなつて夜が冷え　華水
毛糸針母は自然のまゝで編み　明珠
落ちぶれて電車のパスを拾ふたり　同

ポチ袋　互選

ポチ袋叔母はたしかな聲でくれ　吉左右
ポチ袋銀貨二枚の音をきく　繁堂
ポチ袋まあすみませんぬれ手なり　春秋
ポチ袋廊下でやればもらふなり　同
ポチ袋中を想像してるなり　華水
ポチ袋用意してゐた樣にやり　明珠
ポチ袋土產を持たぬ伯母がくれ　幸捐
掃除夫の聲へあはてるポチ袋　同
賃搗の一人が貰ふポチ袋　繁堂

一より十まで　互選

紙芝居第二卷目にちと困り　吉左右
子は五人話上手になつてゐる　春秋
一錢をもうごはんですごはんです　明珠
十本の指がそろうてゐて淋びし　華水
十まで數へる子供歸つて來　同
算筒から三ばん目かと亭主立ち

川柳雜誌社　**大地吟社忘年句會**（島根）

師走の風が凍てついた町を吹き捲くる　十八
日夜忘年句會を第十四區倶樂部に開催、句會終了後席を紅屋にうつし一九三二年を振り返り柳談に花咲かせ十二時を過ぎて散會した。

河谷田鶴緒報

兼題　誰

誰だらう見馴れぬ靴に入りかれ　設子
誰の事さと空とぼけてる　鶏天
先生の憤怒に誰も默しゐる　與詩雄
誰にともなく挨拶して座り　雅天
誰かが誘ひに來さうな春の宵　田鶴緒
誰が筆ぞ情熱のムボかき立てる　秋步
誰の爲の勞働ぞ明日が憂鬱だ　傳重
誰一人知る人もなく死んで行き　汀雨
(五)誰？誰？操短の解雇へひしめきぬ　美登利草

(同)誰も居ぬ炬燵布團の派手な色　鶏　天
(同)裏切るは誰か？一角より扇る　輿詩雄
(同)誰かあて口笛を吹く枇杷の花　羅　門
(同)ノンストッキングの口笛誰かに逢へるらし　同
(人)誰れだつていいはよ金のある男　輿詩雄
(地)青春を誰も疲れてゐる工場　同
(天)手枕の空しき欠伸誰も來ず　羅　門

兼題　漫　談　田鶴緒　選

漫談は好きな旅行のナンセンス　羅　門
漫談が上手で女工らにもよし　比佐緒
漫談に煙草の煙よどんでゐる　鶏　天
(佳)漫談はさてエロとグロナンセンス　羅　門
(同)漫談にすき焼鍋のにつゝまり　鶏　天
(同)笑はせて漫談人を食つてゐる　美登利草
(同)漫談に更けてほのかな戀心　緑之助
(秀)漫談の職員室へ入りかれ　設　子
(同)人世を茶化して漫談罪のなし　美登利草
(同)嫌はれてゐる漫談まだ續け　緑之助

席題　剃　那　羅　門　選

シャンデリア剃那剃那の青春ぞ　輿詩雄
その剃那瞼に浮ぶ父母の顔　同
剃那のウインクに輝く笑顔　美登利草
その剃那！君は情火に飛び來たり　緑之助
その剃那俺は強者になつてゐる　傳　重
キッスー剃那に失せる羞恥心　田鶴緒
(佳)剃那の笑ひものぞみ失せし日よ　緑之助
(同)反抗に堪へた剃那の眼で見おろ　同
(同)剃那主義それもいゝ生活よ　傳　重

席題　幸　福　比佐緒　選

どん底よ幸福は總て過去のもの　傳　重
鶏がなくその幸福な共稼ぎ　夢　人
幸福を深く刻んでゐる笑靨　輿詩雄
幸福な晝のラヂオの二人きり　羅　門
新婚のたより幸福な文ばかり　緑之助
幸福を讓つて淋しい姉の戀　美登利草
幸福な豫感にいそ〳〵出る稼ぎ　田鶴緒
(人)月光を浴びて待つ間の幸福感　美登利草
(地)幸福と思ふ日もあり茶碗食ふ　緑之助
(天)幸福は歸らじ酒に痛む胸　輿詩雄

席題　眞　劍　美登利草　選

眞劍になれば苦難もなんのその　比佐緒
眞劍なことに無産黨とも見られ　緑之助
締切の迫る眞劍味へ刻む秒針　田鶴緒
眞劍な戀生活の中に咲き　輿詩雄
(佳)眞劍な頼みすげなく斷れず　比佐緒
(同)純情の瞳に應へて目を伏せる　羅　門
(同)胸を割く手術生きた目をつゞり　緑之助
(秀)煽動じやあなし生命線の死守なん　輿詩雄
(同)賽ころを圍んで眞劍な眼が光り　田鶴緒
(同)血のまじる叫び默殺とは何んだ　緑之助

川柳雑誌社
松江支部
## 正月の集ひ（松江）

一月五日夜、寺町龍昌寺にて天痴人報

兼題　初　夢　柳　人　選

初夢にマダムの惱み續くなり　法泉子
髪を結ひ結ひ初夢を思ふなり　まさを
初夢は景氣を知らす朝の膳　祥　月
初夢に母に逢つたと泣かされる　亂　笑
初夢の蒲團の裏は赤い色　卷　二
プロ線に立ち初夢も香ばしく　喋　朗
初夢の腦裏に淡く戀心　青　波
初夢を記す日記の書き初め　まさを
初夢に唄つてるらしい笑顔なり　亂　笑
初夢も矢張り農民飢えんとす　天痴人
(佳)債券があたり初夢起される　祥　月
(同)姐はんに濟まぬ初夢見てしまひ　喋　朗
(同)初夢を見る氣女の薄化粧　卷　二
(人)初夢に醒むれば餅を焼く匂ひ　まさを
(地)新年に銃後の强味を夢に見る　六　郎
(天)陸相の初夢世界を呑んでゐる　天痴人

兼題　海　天痴人　選

移民船父子だまつて海を見る　法泉子
海距たれど摘取に起ちし兄弟ぞ　六　郎
航空母艦日本海は狹いなり　卷　二
潮風にヨット浮べて戀心　青　波
海を背に二人の戀は成立し　岩　帆
夏の海處女の肢体は伸びきつて　法泉子
別莊の窓から海がつゝくなり　卷　二
この海がどこまで續く舟をこぎ　祥　月
初海へ希望にみちた陽に躍り　湯　畔
(客)躍る陽へ鯨五色の汐を吹き　亂　笑
(同)感傷に拍車をかけて見入る海　喋　朗
(同)元旦の海へ鷗が一羽飛び　祥　月
(同)いそさゝえ海の鼓動を聞きつゝ　舍　笑
(同)失望は海へ石を投げさせる　亂　行
(同)杭の如く淋しき海にたゝずめり　まさを
(同)水族館海の獲奇が躍る晝　喋　朗
(人)太平洋汝平和を裝へり　まさを

（露艦引揚げ策）

(地)皮算用今度は海へもつてゆき　喋　朗
(天)默してゐる太平洋の戰雲よ　まさを

席題　一九三三年　法泉子、卷二共選

八年度家計簿やはり波亂あり　喋　朗

雞年の二日支那軍負け初め　同
席題　闘志　田中まさを選
アルの子に闘志を秘めてお辭儀する　法泉子
闘志などいつしか捨てゝ女と居　同
戀愛へ闘志のにぶる夜が來る　六郎
（秀）闘志ある男の前のウイスキー　卷二
（同）諸々の闘志こぼれて路次は暮れ　柳人
（同）闘志滿々豚箱の高いびき　天痴人
（同）ビラの字が皆とんがつてる闘志　同
席題　新松江風景　喋朗選
築港に松江は松江らしい煙　卷二
新松江湖岸工事の赤字なる　法泉子
宍道湖の夜景が殖えたビルディング　同
大橋をはさんでネオン映す水　柳人
新松江へルンが生きてをつたなら　まさを
火事の跡區切つて街が派手になり　青波
築港と觀光團は氣付かない　六郎
女學生鶴屋マートへ歩が揃ひ　天痴人
知事夫人尾原デパートほめ給ひ　同
席題　桃色　互選（三點以下略）
桃色の風が吹いてる會へる朝　法泉子
桃色の夕靄となる無事な村　柳人

川柳雜誌社　**四條新春句會**（愛媛）

一月四日　於支部事務所　荒井英賀夫報
席題　喜び　互選
風買ふてうしさうに見せに來る　古舟
喜びを乘せて御用船は着き　承春
喜びは初めて出來た子をかこみ　英賀夫
夢だけが喜ばせてる片思ひ　羊童人
我が事の樣に恩師の喜んで　矢舟
喜びのその夜カン〳〵火をいこし　孤鶴
席題　溫泉　矢舟選
溫泉へ保養に來たのが飲んでゐる　承春
溫泉のために私鐵が付いてゐる　虹一
思出の溫泉今もなつかしく　古舟
寒中の浴衣がそゝる溫泉の氣分　孤鶴
溫泉の效能書を讀んで來る　英賀夫
席題　盃　春選
御下賜の木杯へ思出す祖父の顏　冷槍
酒豪と見えて盃飛んで來る　虹一
不愛相に女給が吳れたお盃　矢舟
（人）天盃は見る物にしてたつと　英賀夫
（地）五ツ六ツ盃すえた人氣者　羊童人
（天）親戚もよんで天盃いたがかせ　英賀夫
席題　ポスト　虹一選
道問へば角のポストを敎へられ　古舟
受取つて吳れたポストの音であり　英賀夫
（秀）ラブレター夜のポストに入れ　孤鶴
（同）微笑をポストへ落ちる音を聞き　西英子
（人）仕合はせはポストの口が啞で　孤鶴
（地）興奮をソツトポストへ込み　吐月
（天）行幸へポストは塗り替へられて　英賀夫
兼題　早起　孤鶴選
朝寢坊たまの早起ひやかされ　集人
早起の家は宵寢の家であり　英賀夫
坊ちやまの早起きの何かあり　羊童人
早起をして戸を開けぬ松の內　虹一
（人）早起きを又病弱の勵まされ　冷槍
（地）早起きの姑へしり〳〵嫁は起き　承春
（天）今朝も又明け切る迄に門を掃き　西英子
兼題　初夢　英賀夫選
富士山へ登つた處で夢はさめ　承春
初夢の好い所で妹の手　集人
初夢を聞けばにこり笑ふだけ　孤鶴
初夢を思ひ出せないじれつたさ　羊童人
初夢も見ずに榮養不良の子　虹一
（人）初夢はよければよいで氣に　孤鶴
（地）初夢を語りあつてる今朝の膳　矢舟
（天）初夢に齒がぬけた氣にかゝり　古舟

川柳雜誌社　**螢ケ池新春句會**（大阪）

一月八日　石森靜太報
兼題　曙、大海、朝の海　綠雨選
病院の曙しばし咳の聲　六華
賣られ來し娘へ曙の空の色　公平
此の船が迷つたやうな碧い海　寒子
日の出ばかふ碇船のうらゝかさ　露洲
明け初めし社前にしばし願ひ事　青糸
大海に唯一筋の船の趾　靜太
ふるさとへ夜明けについた成功者　六華
（佳）旅の宿思はぬ方から日の出　公平
（同）橫濱を出て十日目の海の色　岳三
（同）初日の出金波銀波の海となり　卷巴
（同）朝靄を衝いてブラザルゆきの船　流之助
（同）曙へまだ大阪は暗いなり　靜太
（客）大海を越えて北滿守備にあり　清香
（同）明けがたへ大漁船が續くなり　卷巴
（同）曙へ緊張する刑事室　公平
（同）生活の朝の海の眞帆片帆　岳三
（同）大海へ乘出す男の子と生れ來し　流之助
（人）大海をデツキゴルフに今日も暮れ　青糸
（地）故郷の香ひとなつて夜のあける　靜太

(天)ロケーション曙さして皆揃ひ　露洲
兼題　笑　ひ　鮎　美選　流之助
ひさ〳〵の父と笑へりお元日　定城
看護婦の笑ひを聞いて病み疲れ　露洲
笑顔さへ消えて病んでる二十三　青鬼
笑ひたく笑へば淋しい顔になり　一夫
何氣なし笑つたあとを寂しめり　静太
なぐさめてやれば淋しく笑ふのみ　友坊
愛想よく笑ふてくれる女店員　公平
心から笑へる人の健かさ　静太
その噂打ち消しもせず笑つてゐ　清香
よういわんはなどゝ娘は良く笑ひ　一馬
高笑ひ店とは別の顔になり　愚寵
看護婦が笑つた僕の若さです　憤兒
(佳)笑へない男となつて雲雀鳴く　寒子
(同)ついに子の笑顔が撮れて母嬉し　青糸
(同)午後の陽に友微笑んで讀んでゐる　巻巴
(同)身體ゆすつて外人はよく笑ひ　静太
(同)ブラックインク片戀を笑ったり　静太
(同)初笑ひ母の眼鏡が落ちかゝり　一夫
(客)笑はふとして病友は泣いてゐる　巻巴
(同)囁けばその横顔が笑ふなり　愚寵
(同)何事も笑つてすます兄でした　青鬼
(同)笑ふ事此頃少なしフケをとる　同
(同)笑へない世相を五郎笑はせる　寒子
(人)葉巻吸ふ顔へ笑つて女來る　静太
(地)看護婦は笑ふ淋しい瞳をふせる　寒子
(天)靴先のよごれ酒場は笑つてる　鮎美
(軸)心から笑へる朝におがむなり　巻巴選

席題　髪　正月の髪を子供はよろこばず　青鬼
髪すいてやるも姉らしくませてゐる　松雨
梳髪で來て寂しい朝の滝　静太
ほゝえみの母の白髪が目立つなり　同
(軸)寢返れば女の髪が匂ふなり　巻巴

席題　みかん　正月の下宿へみかん届くなり　互選　青鬼
酔ふた手で密柑の山がくずされる　流之助
密柑食ふ女に物を言ひそびれ　憤兒
お蜜柑を中に歌留多がはずむなり　巻巴
純情はみかんをそつとむいてゐる　静太
情熱の瞳にみかんころがりて　同

川柳雑誌社　**高知句會**（高知）

十二月十日　於プラジル樓　中澤濁水報

席題「獨酌」　翠華選
獨酌の味におでんの串の數　青果
獨酌の酒はよつぽど好であり　朗水
腹の立つ譯を獨酌知つてゐる　映珠
獨酌のしみ〴〵過去を辿る宵　濁水
(五客)獨酌は相手の欲しい顔で飲み　青雨
(同)待兼れた風を獨酌見せぬなり　紫白
(同)獨酌へ確に客の下駄の音　濁水
(同)獨酌のとこへ復縁持出され　六絃
(同)獨酌も今宵嬉しい雨が降り　春水
(人)獨酌は鼠の殖えた事を知り　濁水
(地)獨酌む酒年寄に成つて居る　春水
(天)獨酌の父へ讀めない本が來る　六絃

席題「花魁」　映珠選
泣けるだけ泣いて花魁強く生き　青雨
花魁の誠を試めす端た金　青果
主のことばかり思つて待ちんした　朗水
花魁も床しい京の目鼻立　春水
久振お受けなんしと酌いでくれ　紫白
(五)花魁の煙管詰つた日の悲し　青果
(同)花魁の衣裳寒さにかゝはらず　翠葉
(同)愚痴言うて飲んで廓の夜が明ける　朗水
(同)花魁の壁一面の髪の影　濁水
(同)花魁も馴れて淋しい身のまはり　春水
(人)花魁に廊下の塵はついて行き　青果
(地)寢不足の目で花魁は下駄を出し　紫白
(天)島原へ來て花魁を見そこなひ　同

兼題「鯨」　濁水選
理化室に鯨の齒など教へられ　翠葉
土佐沖で鯨は連を見失ひ　紫白
捕獲して悠々歸る捕鯨船　春水
子鯨の目に珍らしい捕鯨船　芽柳
(五)洋行の話鯨も見てもどり　翠葉
(同)狂氣でもしたのか鯨迷ひ込み　六絃
(同)思出の陸を鯨は見て通り　青果
(同)演習を横切る鯨間違はれ　同
(同)手負した鯨は斜に汐を吹き　朗水
(人)しばらくは船も鯨も必死なり　春水
(地)大敷に掛かつた鯨あぎ笑　芽柳
(天)捕鯨船兎に角沈むことにする　映珠
(軸)クレヨンの鯨は烟る船に見え　濁水

川柳雑誌社　**加古川忘年句會**（兵庫）

初風呂　光哉報
初風呂の初風呂に入る遊び人　泰山
初風呂の中で食客考へる　同

初風呂に裸と　裸お芽出たう　光　督　二
初風呂にみんなきれいな顔で會ひ　同
初風呂にちと朱子足袋が履きにくい　同
初風呂に何思　惑もない天井　同

餅

鏡餅夫へ　鉋丁渡される　光　哉
鏡餅床に置くにはちと低し　泰　山
餅つけば隣近所へ氣兼なし　同
餅つきの音を羨む人もあろ　美也光
重餅貰ふに氣兼な買物よ　同
雑煮餅くつゝいたまゝつぎこまれ　督　二

## 關西土地句會（大阪）

一月十八日　大橋素月報

琴

腕自慢その要領を話して居　一　久
せがむ子の力に母は引摺られ　無　鬼
力の前にうなだれる影　即　人選
更生の朝なり力瘤を見る　葉　平
握られた力へそつと觸れて見る　鐘　生

（奈良にて）

大釣鐘撞いて非力を笑はれる　同
發止と打てば鐵橋が鳴る　素　月
ハンマ振る腕で二世をさし上げる　同
ブレーキがぐつとこたへる腕の瘤　同

育　ち　琴

母親の僻の通りに子は育ち　無　鬼
延びる音が聞こえる雨の朝　即　人選
健やかに兒は育つ也朝の風呂　葉　平
離縁とも知らずまる〳〵育ちき　素　月
さはあれど社長育ちを淋しがり　同

二十八一人育つた積りでゐ　同　一　久
背中丸るう孫の育ちを人に賞め　同　鐘　生
いくらでも出來るらしい子を育だて　同　同
老ひの眼へ三つになつた子の育ち　同　琴　人
（佳）景氣など菊の育ちが氣にかゝり
（軸）片言に愛しさの増す朝な夕

女　客　琴

女客繼母なるを見逃がさず　素　月
母と妻へ氣の張り過ぎる女客　無　鬼
小笠原流に歩いて女客　同　一　久
女客洗濯物を氣にかける　同
女客度々小供を賞めて去に　同　鐘　生
女客來てゐるらしい襖越し　鐘　生
（佳）女客噂の中へ歸つて來　同
幾度も座りかへてる女客　葉　平
（佳）玄關に江戸紫の下駄をぬぎ　同
（佳）トマトが熟れて女客ある家　同　琴　人
（軸）女客子供返して派手に去に

氷　雨　琴

決心の付かず氷雨の音を聞き　鐘　生
虚ろに氷雨の窓をみつめる　即　人選
切れ話いつか氷雨となつた音　素　月
（佳）敢然と氷雨に立てばマント鳴る　同
氷雨する中を今日食ふワンタン屋　無　鬼
氷雨ぽそ〳〵外交の靴　同
轉寢へ氷雨淋しく音を立て　一　久
氷雨氷雨子の事を案じる　同
見返へれば影なし街に氷雨する　葉　平
ビル街に三角形の氷雨する　同
（軸）ゴム靴に氷雨しませて儲かず　琴　人

## 雑誌社川柳大地吟社新年句會（島根）

一月五日　於第十四區倶樂部　河谷田鶴緒報

松江から小田無鐵砲、吾郷玲人、田儀カラス吟社から鴉天、汀雨の諸氏を迎へ定刻午後一時尼絲之助氏の挨拶があり一同初春の和かな氣分で句作にふける。終了後席を紅屋に移し恒例の祝賀會を開き九時過萬歳裡に力強く一九三三年の第一歩を踏した。

席題　精　力　小田無鐵砲選

精力の陰に小さくゐる亭主　夢人
あらはなる腕に精力的魅惑　鴉天
精力を誇りテロにも容赦せず　絲之助
精力の限り報はれで今日もまた　田鶴緒
（秀）病床へただ夢に見る精力よ　雅月
（同）こんな戀に酷使されるエネルギー　絲之助

席題　人　氣　吾郷玲人選

議員には次點町では人氣者　絲之助
心を痛めて痛めて人氣を得　華村
上司への反抗が人氣男となりて　田鶴緒
男性を罵りて女給人氣あり　同
人氣とは別に女優の鍍がふえ　鴉天
（秀）人氣とは實名である淋しさよ　羅門
（同）春は春は人氣が爆發する彼女　同
（同）クッションに埋り人氣の女　同

席題　木　魚　井原鴉天選

悲しみを母は木魚でまぎらはし　汀雨
人の死を木魚へ輕く打ち告げる　無鐵砲
靜寂へ木魚のリズムとなる朝　美登利草
戀捨てて握る木魚の音冴ゆる　田鶴緒
（人）雨の日の木魚味氣なきもよし　絲之助

（地）春風に木魚もまろいほほえみよ　羅門
（天）木魚にふれるは晝のエロチック　同
（軸）山うらら木魚の音と鶯と　鴉天

席題　襟巻　河谷田鶴緒選

戀もなく襟巻に令嬢包まれて　華村
襟巻の口笛が戻る鋪道　玲人
襟巻にまだ殘つてるいきごほり　鴉天
襟巻に悔を包んでゐる女　羅門
（客）襟巻が尖つた感情おさへてる　汀雨
（同）襟巻に包んだ戀も明らかよ　季美
（同）襟巻へ悲しい戀の顔を埋め　美登利草
（同）襟巻にうぶな娘の片鬣　羅門
（同）襟巻の色にも年齢は爭へず　絲之助
（同）襟巻に埋れ豆嚙む七十才　同
（同）襟巻も知らぬではない娘の吐息　無鐵砲
（人）電柱にもたれ襟巻を直す戀　羅門
（地）誰にやる襟巻か彼女編み續け　絲之助
（天）襟巻をはずす淨財箱の冷え　無鐵砲

兼題　男　尼絲之助選

炭をつぐ男の無器用笑はれる　鴉天
意地張つた視線男に投げて去り　水煙
ステージのライトが照すいい男　玲人
味氣なき晝を男の帶ゆるみ　羅門
生活だ男だ自轉車を踏みたくる　まさる
失戀が強い男にしてくれた　汀雨
男親一つ二つは撲りつけ　無鐵砲
一家の生命を支へて飲んでゐる男　夢人
男だときつぱり云つた賴母しさ　青石
誕生の日から男はあがめられ　設子
（佳）肩組んで男同志の血が通ひ　鴉天
（同）振りむけばけものに似たる男かな　無鐵砲
（同）男一匹空しく春の部屋　田鶴緒
同　衝動へ自嘲の唾棄も男なる　美登利草
（人）男てふ自覺冷めたく微笑みぬ　鴉天
（地）純心をけがされた男に春が來る　羅門
（天）そうだ強い男は泣くんだよ　夢人
（軸）戀の眞ん中へ男を立ててゐる　絲之助

雜誌社　川柳　**塗青支部師走句會**（大阪）

十二月十二日於熊谷紅居

顔　元山選

我が顔を皆んなが見てる嬉しい日　木馬
何所やらで見た顔だがと氣にかかり　謙公
髯のびた顔が喧嘩に借りられる　紅
出來上り苦笑して居る書き似顔　謙公
思案顔して齒ブラシの手が休み　鬼木
顔かくす事を忘れて世帶浸み　木馬
藝者皆御顔名染のやうに酌ぎ　光
車中皆瞳あつめる顔が乘り　同
吃驚の顔が映つて皆嗤ひ　紅
（軸）寢顔見て父の滿足そうな顔　元山

木枯し　木馬選

木枯へ途切れ〳〵の夜泣そば　元山
木枯しへ更生せよと鐘が鳴る　紅
木枯しに走る女工の忙しそう　謙公
木枯しへ獨りぼつちは寢てるなり　紅
木枯しに毛皮は後ろ振り返り　光
木枯しが俺の世帶を搖ぶるよ　紅

夜景　光選

ソノタンのラッパも呀えて人もなし　鬼木
マネキンもたへて夜景に色を增し　元山
中の島夜景に寒い砂埃り　紅
デッキから見た夜の景異國じみ　謙公
鴨川の夜景二人で思ひ出し　同
神戸市の夜景に覺める高架線　紅
停電のやうな氣がする田舍へ來　木馬

友情　謙公選

落ちぶれて又友情に泣かされる　紅
親友は本當の意見して吳れる　同
唯一人變らぬ友の遠く居て　光
友情を込めて滿州からの父　紅
友情に泣いても親を泣かせてる　鬼木
（佳）友情に泣き更生へ立ち上がり　紅
（同）友情についだまされた五圓札　元山
（同）友情は忘れはせぬが新世帶　木馬
（軸）友情を押賣される地位になり　謙公

兼題　年の暮　紅選

新聞がたゝんだ儘の年の暮　元山
來年の夢へ働く年の暮　鬼木
勿体ない溫泉で聞く除夜の鐘　謙公
年の暮タクシーに轢かれかけた吾　木馬
年の暮ネオンの影に慈善鍋　光
（佳）年の暮あんな男が自殺する　元山
（同）年の暮髮結ふて娘らしくなり　謙公
（同）年の暮街も電車も走るなり　光
（秀）子が一人殖えた丈けなり年の暮　謙公
（軸）弱點を知られたくなし年の暮　紅
（同）誤解した儘の二人へ年の暮　同

## 耕閑莊詠草（A）

一九三二年一二月第三日曜日午後天痴人宅に集つたヤンゲ川柳家、研一路、白曜兒、菩二、墓秋、まさを達と例の如く密柑の皮を盛

にむきながら作句に耽る。席題「女教員」「股」「冬晴」「愛着」「闘牛」「生活」「ベンチ」。

ベンチ皆ルンペンの寝る場所となり　研一路

瞬間に女らしさをきづく股　まさを

丙午脂ぎつたる女教員　同

女教員理智ばかりでは淋しかろ　同

悔の湧くベンチに風の鳴る宵だ　同

猿股く勞苦の疲れ汗となる　墓秋

愛着を見せて女の足袋白く　同

米櫃へ今日の暮しに疲れぬる　同

お婆さんしばしベンチに疲れぬる　同

つい女大股になる水溜り　卷二

愛着の瞳にコスモスは皆な散り　同

生活の爲と口紅おもわれず　同

二人ゐるベンチいつしか流行唄　同

我が戀はならず冬晴れへ唾を吐く　白曜兒

トラピストの慾愛着續くなり　同

愛着へ冷たく尖る角砂糖　天痴人

愛着を呪ひ斜斷機はたと降り　同

女教員袴を脱げばお姉様　同

## 天痴人居偶會（松江）

一九三三年一月三日　カフェーの色名刺を持参の卷二や、まさを、硯滴に古志原のABC吟社の法泉子、六郎、青波（いさを改め）、檳榔等と作句初めの偶會を目出度く開く。天痴人報、席題は、「松飾り」酒」「ポケット」「土」並に五分間吟の「女性生活線一切」。

妓生のリボンの色よ冬の街　檳榔

朝の土踏んで發奮の腕を撫で　青波

松飾り世は平等のものと知り　同

ポケットに手を突つ込んで世を呪ひ　同

農村の疲れ飢えたる土があり　硯滴

ひつそりと廊へ並ぶ松飾り　同

參政と叫ぶ女の近視眼　同

眞珠の汗が畑に滲みこんでる　まさを

敏感な瞼毛もシツヨプガールなり　同

大根の土を落せば冬の色　卷二

松飾り踊り妓じみた足が來る　同

農民へ土地を返せと組合旗　六郎

松飾り借金忘れて呑んでゐる　同

こぼすなよなどゝ叔父上酒が好き　同

どん底に生きる親子の酒の味　同

恩給で土に親しむといふ暮し　法泉子

門松にかゝつた羽根へ白い腕　同

裏切つた心に酒は苦いなり　同

陸相から先づ滿洲の土となれ　天痴人

ブルヂヨアよ土喰つてみろ喰つてみる　同

松飾りへシルクハットがすれて出る　同

片戀の清算となる酒となり　同

## 喫茶店 三週年記念會

カナメ

七年十二月十八日　於カナメ喫茶店　吉田水車報

祝　吟

三年の祝ひに店がせますぎる　鮎美

飼猫も顔馴染なり三週年　豆秋

蝦フライ祝の皿で踊りそう　夕鐘

親分の睨みも利いて三週年　水車

おつさんのはげもうれしい三週年　龍一

三歳の駒にして競馬群を抜き　禿山

三年越し祝發展の酒に酔ひ　銀波

席題　餅　花

餅花へお湯はしやん〳〵たぎり　鮎美

餅花の鏡にうつる美しさ　同

餅花の一つ辻占出そうなり　同

餅花の數を當てさすにぎやかさ　水車

餅花へ結ひたての髪氣にかゝり　同

餅花に柱時計が小さく見へ　豆秋

踊り子の手が餅花にふれるなり　夕鐘

餅花の下でうれしい針仕事　同

盛況を語る餅花へ灯がともり　龍一

餅花の短册何も書かぬなり　禿山

餅花は千兩箱も輕るく提げ　同

餅花を一枝ほしい人が來る　龍一

餅花をお客もともにかざるなり　あき女

餅花の下でおつさんよく光り　沐天

餅花の下にお道化た顔が寄り　同

餅花にまだ醉ひ足らぬ客の來る　銀波

餅花に知つた同志の客が呑み　同

## 翠夢歡迎句會（豐橋）

一月三日　豐橋支部幹事　白井梅里報

本社の生田翠夢氏を迎へた豐橋川柳土曜會は一年振りで三日正午柳生河畔和洋女學校作法で歡迎句會を開き會するものは、又穗、八寸棒、ひろし、騷人、唐四郎と諸氏と私又穗夫人の心盡しの御馳走を戴き柳談に花を咲かせ松月堂寄贈の志香須賀と新年句を互選し、更に古田驛階上の食堂で晩餐を共にし、翠夢氏より大阪柳壇の動向と柳人の消息聽き、十時近い列車で歸阪されました。扮裝の努力も正にお正月　梅里

一月三日の黒き夕雲　又穂
黎明をたゝ一聲に癸酉　八寸棒　翠夢
しかすがに遠く來たのを風で知り　ひろし
挨拶の足が少しく醉つてゐる　唐四郎
しかすがに三河の夜の風の音　梅里
八年の初頭伏字を組んでゐる　翠夢
遙々と來てしかすがによみがへり　又穂
木枯のまゝ元日の朝となり　梅里
しかすがに無言の松の殘されつ
葉平を思ふ
遺憾なり三河の風に觸れさせず　唐四郎

## カラス吟社忘年句座（島根）

十二月十九日　於なぎら亭　鴉　天報
題　送、別、頭、祈　鴉　天選
送られて明日より御國の盾となる　野露馬
見送りのうるんで見へる汽車の窓　鴉水
この俺れに送別なぞともたいない　汀雨
悲しみを引きさく樣に汽車は出る　水煙
入營に有難し村民送つて居　同
愛情の別離を乘せて終列車　一可
友人を送るに話し未た盡きず　無路通

## カラス吟社（島根）

十二月十日　於雅天居　雅天報
題　心配、母、羽織、笑ひ　雅天選
心配を分けて與れよと友は言ひ　貞夫
乳呑兒は母でなくては手に負へず　同
心配があるのか父は默つてる　雅水
久しぶり同級が母となつてゐる　同
病んでゐて人の笑ひが羨し　同
心配は師走の人へつき當り　水煙
喜びの中を羽織はよく動き　同
叱つた子の涙を母は拭いてやり　汀雨
羽織着て一人前の顏で來る　同
出迎へに母のやつれた顏があり　無路通
笑ふだけの餘祐も出來た全快期　野露馬

## 祥月居偶會（松江）

正月八日夜　岡崎祥月報
題　自轉車、カレンダー、歌がるた、非常時
非常時は借金などは氣にかけず　勝人
非常時に雄々しく立つた日本人　萬壽
非常時をインフレ景氣に忘れたり　三郎
カレンダー其日暮しの手でめくり　同
歌がるた紅一點へ眼が向いて　同
非常時へ働かせたいブルの腕　彌次馬
カレンダーめくつて今日も暮れて居る　同
歌がるたやつぱり僕が弱いのだ　祥月
人生を刻まれて行くカレンダー　同
自轉車の進度が鈍る向ひ風　柳人
生き甲斐も知らカレンダーめくつてる　同
平凡な一日と知るカレンダー　同
讀み人へ不平が出るは負けた方　同

## 德島川柳（德島）

姫田夕鐘報

正月五日
甥とふたりで新春のふるさとを川柳で散歩しました。

德島公園
五位鷺の淋しく鳴くのも冬のこと　岩男
山鳩の聲もさびしい公園なり　同
公園で見る眉山の夕まぐれ　夕鐘
姫小松のうねり〳〵て道が出來　同
六抱へもある大木うれしがり　同
大瀧山
頂上でゆつくり疲れを休むなり　岩男
大瀧の水がとぎれて淋しがり　同
鐘の音へ大瀧山の暮れかゝり　夕鐘
空砲が大瀧山に呀へかへり　同
小松島
岸をうつ波も靜かな小松島　岩男
小松島時雨れて景の增すところ　夕鐘
小松島かへりともない夕景色　同
飛島へ歩いて行ける潮になり　同

## 亂笑鼎座吟（島根）

十二月十五日夜　田久和白曜兒報
音、花瓶、紙
停留所置忘れたまゝの紙包　亂笑
腹立ちを手紙の上へたゝきつけ　同
壁一重へだてた音へ靜かなり　六郎
雨の音淋しいものにする女　白曜兒
花瓶とは別な心の社長居る　同
十二月十七日夜（其二）
タオル、水、ラッパ
蒸タオルのせて理髮屋手を休め　亂笑
水臭いことは言ふなと醉ふてゐる　檳榔
休戰のラッパ爆音長閑なり　白曜兒
斷水の町に夕陽い燃えてゐる　同

## ひかり集　その十二　水谷鮎美報

坩堝
無熱の坩堝冷たき瞳ばかりなり　卜居
情熱の坩堝にたぎる夜の呼吸　同

吾がうごく影が坩堝に燃へてゐる　鮎美
默人の坩堝に惡魔踊るなり　同
善人の坩堝にうつるパラダイク　同

## クリスマスのひる　水谷鮎美報

果物（その一）

ほそながくつゞくりんごの皮に病み　ト居
果物へ四十一度の君ならん　同
花嫁のこゝろにそむくあんずの實　鮎美
僞つてからくだものの皮をむく　同

（その二）

川

失望のどんぞこ川の水の色　白菊

武庫川にて

初戀の石投げてゆく川を沿ひ　同
自殺でもあつたか堤の人だかり　同
友達と語れば川にきてしまひ　鮎美
傘さして魚つる川の雨の晝　同

人蔘（その三）

百兩といふ人蔘へ娘を賣つて　遊歩
人蔘をさげて田舍の父がくる　同
人蔘のあかさ僕にはエロチック　鮎美
人蔘を箸でつゝいて醉ふてゐる　同

## プリント瓦選句

課題　女

十四點 口說かれる姿になつて女ゐる　小松園
十三點 言ふだけ言つて女は泣いてゐる　一笑
九點 泣けるだけ泣いて女强くなり　柳笑
七點 あゝ美しき虛僞の肌なる　ト居
同 帶巾女の野心波を打ち　竹楓
同 振り返へる女の方も美しい　司郎
六點 もう娘十九になつた柄を選り　水車
同 斷髮も女らしさを少し見せ　勝二
同 はづかしい煙草盆から持つて立ち　多郎
五點 朗かな笑ひあの聲女なり　夢一
同 眞劍に女の意地が恐くなり　裡
同 淺間しき女となりし冬の宵　四五磨
同 女てふ弱さを見せず髮を切り　白柳子
四點 從順であれよお前は女なり　紅
同 減配を知つて慰む女なる　方眠
同 佛性の女容姿に惠まれず　幸捐
同 妻のある有難さ知る臺所　山雨樓
三點 灰色のおみなの戀が空が雪　角丸
同 子を生んで女はじめて愛を知り　葉平
同 やつぱり女になつて勝つてゐる　正夫
同 女らしくなつて姉の里歸り　多郎
同 冷やかな女寂しさ意識する　千里
同 たつたそれだけに女が若過ぎる　黑天子
雜吟
十四點 貧しさに夫婦の個性似て來たり　雨少
十點 壁白くおのれひとりがそむかれて　默平
同 春さい嬉しさ足袋を履き替へる　あや美
八點 張のない妻の寢顏へ觸れて見る　雅幽
同 うらぶれし昼が姿なる木葉散る　ト居
七點 笑はれた戀より又の傷のあと　紅
同 ふれまいと思ふ心の奥のもの　えいを
六點 よりそへとばかりに寒い〳〵風　正夫
同 煩惱へ水は屈托なく流れ　新水
同 拗れた子の膳へつまんでやる魚　千里
同 出る朝を蜘蛛が邪魔をする　あや美
同 瞳れの都會へ急ぐ終列車　方眠
同 幸福は働く音へ笑ひ聲　失名
五點 人事でない貸家札見て通り　麗光
同 忘れたい時を鮒浮く池へ立ち　鬼丸
四點 父のない子に祖父の眼がいたむ　柳笑
同 見逢へた人を見直す街の中　
四 れんれんした頓見て叱つた事を悔ひ　
同 箱庭の如し一萬二千尺　

## ABC小集（松江）

一月七日左義長の夜於亂笑居　法泉子報

題　占ひ。惡魔。夜。

占ひの歸りの母のほつれ髮　舍行
赤い酒青い酒惡魔とも知らず　同
占ひも淋しきものに母は病み　槇椰
辻易者一人喋つて師走の灯　同
鄕愁の汽車の窓から見る夕餉　同
カップルの心を寒くする易者　法泉子
宵の二人へ惡魔と變る占ひぞ　同
失業の債苦へ病魔つきまとふ　同
失戀の占ひなどをしてみんか　六郎
占ひにまで俺の運暗くして　同
惡魔の繪遊境に立つ我に似て　同
結末をよく嚙分けて親子の夜　同
靜かな夜婚期後れし姉と僕　同

## つどひ（其八）

笑　吉田水車報

見へすいたサービスへ笑ひ殺したり　夕鐘
笑はしてたけと財布をしまひかけ　同
笑ふこと多き日を待つ母にして　水車
笑ひ顏見せず將軍凱旋し　同

## 川柳雑誌社 高知句會（高知）

十一月廿一日　中澤濁水報　濁水選

足の裏

死を賭して踏繪を拒む足の裏　映珠
見た者がない銅像の足の裏　六紘
夜遊の歸知つてる足の裏　春水
反對の足袋を合した足の裏　柳風
煉炭を入れたい今朝の足の裏　映珠
健脚者足の裏まで見せてやり　芳水
松葉杖　責任の無い足の裏　翠葉
新疊敷いて氣になる足の裏　芳水
足の裏ピッコの主を持であまし　紫白
奉公に慣れて冷めたい足の裏　翠葉
足の裏見せて雑魚寝の足の裏　青果
(人)もう土俵際だと思ふ足の裏　映珠
(地)若いパパ子をあやしてる足の裏　六紘
(天)禮法の腰へすなな足の裏　紫白
(軸)靴下で妻に知られた足の裏　濁水

## 岡山栗炊居（岡山）

一月七日夜　森本素木報　橋本綠雨選

雑　吟

子が出來て金のいる事でも嬉し　雀子朗
僕の子へ見知らぬ人も愛想よし　同
職工ですきつぱり云へ日に出合ひ　同
ライターが高級煙草に間に合はず　同
空腹で歸る故郷はまぶしすぎ　同
男らしい男と酒の上でほめ　同
仕立賃學資にもたして灯に疲れ　素木
おべつかが上手な奴が勝つて居り　同
沒落の現實を踏む靈草履　同
非常線夜啼に何かひて行き　同
旅の宿妻の計をきく今朝の鐘　同
血と汗を又しぼられる日が來た　同

## 四人集（松江）

十二月四日夜　於矢車莊　神田研一路報

席題　さらばまなびや　天痴人選

學校の窓よポプラよさようなら　巻二
卒業を壽くやうに鐘が鳴り　墓秋
別れたくない學校と別れる日　研一路
(人)鐘聞けば世に出る我にあるうつ　墓秋
(地)さらば學舍僕の希望は待てるよ　研一路
(天)校門へまで先生に見送られ　同

席題　羊飼

羊飼ひの口笛消えて丘の上　巻二
角笛に慣れて羊の氣がそろひ　墓秋
失戀へ世間を拗れて羊飼ひ　天痴人
(佳)青春を羊に托し啞の子の　墓秋
(同)角笛に郷愁つのる羊飼ひ　天痴人

席題　冬ごもり　互選

涙の音無事に聞いてる冬籠り　巻二
小春日和だ冬籠りなどよし給へ　研一路
積雪の高さを量り冬籠る　天痴人
冬籠り爺やに戀の話あり　同
冬籠る父の額ひにやせが見え　墓秋
冬籠る父は米の値を考へる　同

兼題　せゝらぎ　墓秋選

せゝらぎの音に口笛とぎれたり　巻二
(佳)せゝらぎの音に淡きホームシック　同
(同)せゝらぎに慰さめられて村の娘よ　天痴人
(軸)せゝらぎに哀愁となる非人小屋　墓秋

## 火燵に倚りて（松江）

師走二十九日夜　於六郎居　法泉子報

題　打算續ける

算盤をおけば矢張り儲らぬ　法泉子
凱旋の波止場に人波續くなり　同
秋晴れの窓に空想續くなり　同
世の中は打算だけでは生きられず　六郎
居續の客へ朝日のうらさびし　同

## 明珠居小集（神戸）

十二月七日　西村明珠報

割れる　華水選

岩の割目へ地質學者の思案　春秋
割れてゐる柘榴を背の子が見つけ　晶彦
(佳)硝子一枚割れて長屋の顔が出る　明珠

仕事　明珠選

仕事場へ社長自慢の犬を連れ　晶彦
平凡な仕事へ嵐吹いて來る　華水
無心狀仕事歸りに封切られ　春秋

伸びる　晶彦選

伸びる丈け伸びてパチンコそれひろま　明珠
伸びるもの伸ばしておいてソファにね　春秋
金魚見せて群衆の中伸び上り　華水
(佳)伸びる手にテーブル掛けがゆがんでる　同
(軸)退校をさせて個性が伸びて行き　晶彦

進物　春秋選

進物にものを言はせて戻つて來　晶彦
進物を出してひけ目を感じて來　明珠
(軸)進物の押もごさるゝ一二寸　春秋

長男　互選

長男へ山と畑と殘つてゐ　春秋

長男が呼ばれて相談されるなり　明珠
長男として叔父さんに用が出來　寄舟
長男が來て米俵運こばれる　晶彦
戸籍とは別に長男遠く居る　華水
長男の顔を知つてる友が來る　同

窓、病室　互選

勿論と云へば窓から朝陽來る　葉水
病室の白さへだまつてゐ　明珠

## 睦會句報（神戸）

一月十日　西村明珠報

トーキー、團結、寒い風

トーキーを英語の教師も見に來て　芳雪
トーキーの音の切れ目が氣に懸り　同
團結がエーテルに乘りゼネバ行き　同
寒い風虚無僧二人露路で逢ひ　同
トーキーでより實感をさそわれる　貞三
團結が破れて爭議敗けになり　同
三本の矢で團結を遺言し　同
寒風にキリ〳〵まひのお嬢さん　同
トーキーになつて毛唐の笑ひ聲　みさを
トーキーになつて樂隊旅廻り　同
團結に足をとられたバス爭議　同
トーキーでイエスとノーと丈け　明珠
トーキーの事で貴える晝休み　同
團結の強さが怖い資本主　同
團結に女子供を遠ざける　同
乘替へを待つてる辻の寒い風　同

## ABC吟社新年句會（松江）

一月四日夜　於六郎居　法泉子報

席題　感謝　研一路選

薄情よ先づ太陽に感謝せよ　青波
校舍さへ感謝してゐる優勝旗　天痴人
大黒の惠みへ夫婦かしこまり　墓秋
恩師まだいつも變らぬ手紙が來　檳榔
（秀）とびつきたい母は無心を聞くれて　同
（同）感謝飛行街の廣さへ丸く舞ひ　亂笑
（同）うるみたる瞳感謝の心なる　法泉子
（同）頑固なる父にも感謝ある涙　六郎

席題　逆境　墓秋選

逆境に蠶でもつかむ氣持なり　舍行
逆境に見つゐる夜の爪の垢　法泉子
逆境を嘲けるやうに春が來る　檳榔
逆境を戰ひきれず四十年　田の字
逆境だ門松などに用がなし　天痴人
逆境へ米屋としての發奮ぞ　六郎
落ちぶれてから無口の父となり　亂笑
（佳）轉落の身にうらめしや三味の音　同
（同）逆境に居て本當の友を知り　六郎
（同）逆境に育つて守錢奴とはなる　天痴人
（同）逆境の今宵淋しい糸繰る手　檳榔
（軸）死は安し生は悲しきものと知る　墓秋

席題　北滿　互選

北滿へ行けど農民惠まれず　法泉子
北滿の認識不足を指摘され　青波
北滿の寒さ輕く聞き流し　同
北滿の雪解の道に馬の跡　舍行
北滿は零下四十度の年賀狀　天痴人
北滿の戰場に身は戀もなし　墓秋
北滿も春が來たらし柳の芽　檳榔
北滿は唯寒いとこにして慰問品　同
北滿にやまとなでしこ咲く强み　六郎

北滿に涙こぼるゝ日章旗　同
北滿の露營の夢に月高し　亂笑
北滿の空重爆機のうなり樣　同

兼題　切符　法泉子選

高飛をする氣で高い切符買ひ　岩帆
檢札へ威嚴を見せる一等車　墓秋
新京で降りて切符も疲れ果て　檳榔
遠足の近くの切符物足らず　研一路
白切符營養のよい手が買つた　天痴人
切符片手に別れともない握手して　六郎
（佳）新婚旅行切符あまりに淡い色　同
（同）白切符痩せた二號をつゝてゐる　天痴人
（同）故郷は近し切符の手がれば　墓秋
（同）改札で切符へあはてる國訛　亂笑

兼題　商品券　檳榔選

商品券いらぬものまで買つて來る　岩帆
商品券を買ふに窮屈な客で居る　墓秋
商品券デパートたゞでくれた樣　天痴人
（客）商品券の客へ面倒くさい顔　岩帆
（同）商品券紙幣のやうにもつてあり　舍行
（同）女房と少うしもめる商品券　墓秋
（同）商品券買ひに女給を連れて出る　法泉子
（人）商品券の歳暮がとゞく文化村　天痴人
（地）兄妹の住ひへ商品券がとゞけられ　法泉子
（天）デパートへ來て商品券は迷つてる　同

兼題　時　六郎選

一秒二秒時もせまつ死刑場　研一路
非常時を知らずに蛙飛んでゐる　青波
退時を逃がした顔でパスが來る　檳榔
あの時は氣付かなかつた泣きほくろ　法泉子
時々は若さほのめく琴の爪　墓秋

その時を思ひかへして不安あり　天痴人
お隣の時報へあわて左腰をあげ　亂笑
(佳)秒針をはつきり聞いて夜の看護　檳榔
(同)ひけ時の女工に乳がはりきつて　法泉子
(同)開會の八時へ幹事一人だけ　田の字
(同)柱時計と僕などかな幾夜なる　墓秋
(同)歡びの限りへ逢ふ夜の腕時計　同

兼題　インフレーション　天痴人選

インフレも修道院は知らずして　檳榔
インフレの景氣で三號園はれる　法泉子
インフレーション町の工場が活氣づき　青波
橋の下インフレ景氣の餘波をうけ　六郎
インフレーション株屋ばりが景氣よし　岩帆
(佳)インフレ景氣には知らず生れた子　研一路
(同)株の値が上つてもプロに用ばか　岩帆
(同)インフレの波兜町の下駄の音　法泉子
(客)インフレにたサラリーマンの愚痴なる　同
(人)インフレーション一時せもよい景氣なり　舍行
(同)インフレ政策飢へた日本の姿なる　墓秋
(地)インフレにまだ自信ある株をもち　沿泉子
(天)インフレ景氣日本の危機の前面を　墓秋

## 川柳義士會と祝賀會（松江）

師走十四日　於柳人宅　奈良井柳人報

日本武士道の精華！赤穂義士追善の川柳會と本社募集吟選者に推薦された廣江天痴人君の祝賀會とを兼ねて柳人宅にて開催した。集る柳士は天痴人、まさを、卷二、墓秋、祥月、硯滴、研一路に居主柳人の八士、何れも支部の名譽と天痴人君の喜びとを祝ひ、義士の追憶に時を過した。

席題　「炭」天痴人選、「陣太鼓」柳人選、「天野屋」まさを選、「蕎麥」卷二選、「振袖」墓秋選、「師遠」研一路選、「雪」「スキー」互選、「髮」

炭切つた其の手でおやき一つ食ひ　同
スキーヤー明日の天氣が氣遣はれ　研一路
入營の兄はアッサリ刈つて來た　同
大雪ですよと炭屋が今日云つて來た　同
スキーヤー銀の原つぽ待つてるぞ　硯滴
太平の夢を破つた陣太鼓　同
おでん屋で雪見て別な酒を飲み　同
散髮をしてから街を歩くらん　墓秋
利兵衛フト間抜けた利兵衛になつて見る　同
はれる炭窓をあければ觸るゝ風　同
黑髮に未だ理想の人がなく　卷二
ひかされたその日からなる髮の型　同
振袖は灯を一ぱいに受けて立ち　同
いゝ話女しきりに炭をつぎ　同
慈善鍋師走の人へ呼びかける　同
髮結つた口から洩れる子守唄　同
テレマーク雜木林のめまぐるし　まさを
雷鳴に似て吉良邸の陣太鼓　同
陣太鼓恐怖となりて卻する　同
振袖の仕草も處女の戀なりき　同
ハネ炭の我が憤懣にふれ易く　同
スキー隊朝の吹雪に吸ひこまれ　柳人
長髮を搔き上げ友へ書く手紙　同
人足と師走の風との交叉點　同
舊友と膝付き合はす蕎麥の湯氣　同
天野屋の生き甲斐を知る十四日　同
炭ついて下宿の夕餉靜かなり　同
スキー場有閑婦人巧みなる　天痴人
スキー場すべつて轉んでおゝ愉快　同
首を擧げに來たぞと鳴らす陣太鼓　同
拂はせる聲で師走を家主來る　同
特高課師走の風へ別な目よ　同
善良な友に蕎麥屋へ誘われる　同
振袖で惡戲な手を押へたり　同

## 川柳雜誌社此花句會（大阪）

八年一月十四日夜　於藤田特許事務所

藤田紫石報

當夜披講後琴人氏一夫氏、翠夢氏並に會員諸氏間に有益なる川柳詩論に花が咲き十二時ぎ閉會しました。

席題　手　葉平選

手のひらの硬さに母のながらへて　比古
摑めど寂し眞冬の掌　紫石
つかもうとする手の青きかげ　即
親の手と子の手と影繪夜のほめき　琴人
(軸)冷へた手をそつと預けて笑みぬ　葉平

席題　五　翠夢選

五客まで行かないまでも選に入り　野洲
今年も五月幟が一つ增え　比古
五年目に會つて友の子友の妻　紫石
五五の春過ぎて人生解り出し　石人
(人)五色の酒に浮く戀の味　即
(地)不仕合もう知り盡し五十過ぎ　素月
(天)改心の眼にきら〳〵と五色の灯　四五磨

席題　七　琴人選

溜息の窓に七星光るなり　香峯
七人の素見だん〳〵減つてゆく　紫石
出勤の七時へ靴の紐が切れ　素月
七草の夜明なりけり土の色　比古
ラッキーの七つの回はつゝがなし
一と七日また新しき泪なり　野洲
七回忌四人の子ある未亡人　四五磨
(軸)七寶のメタル女シャンであり　香峯
　　琴人

席題　空　集　琴人選

空巣ふと猫の寝てるのに驚き　葉平
氣の長いこと空巣は飯まで食ひ　比古
つかまつた空巣前からちぢこまり　同
空巣ざる下駄一足を持つて逃げ　野洲
捕かまつた空巣憂しい男なり　弘法
鐵條網張つて空巣に見まはれる　香峯
長屋今朝空巣があつた人だかり　素月
足音へ空巣れらひの顔の色　紫石
市場まで行く間空巣にしてやられ　四五磨
(軸)其後は層屋も空巣かと思ひ　琴人

兼題　水　翠夢選

飢餓線も一時は救ふ水であり　一水
泥水もネオンライトに彩られ　弘法
水の音故郷を捨てた身にしみる　素月
水へ白靴遠くさけて行き　天笑坊
水臭い事を云ふなと酒をつき　曉星
病床へ水藥佗しく夕日うけ　紫石
(佳)醉ひざめの水こく〳〵と喉に入り　琴人
(同)コップ水すげのう置で女給去　比古
(人)心境は坦々として水流る　葉平
(地)水盤の水切れ〴〵に花が咲き　四五磨
(天)母性愛寒い雫を並べ干し　琴人
(軸)過去は過去水に流しそくらづけん　翠夢

兼題　月　琴人選

泉水に今夜も浮いた白い月　曉星
さしのべし手に清淨の月の色　比古
月浴び妻の戸開くるを待ち　木兎
醉ざめを月の魅惑に歩いて見　弘法
父の月子の月母の月昇り　素月
月光に二人は一つ道を行き　四五磨
日に月に我子の背丈け見て稼ぎ　野洲
(佳)失意今日月を背にして歸つて來　一水
(同)小さき灯眞向に月を射る　即
(同)雲を貫き雲を貫き月の雄々しさ　同
(同)奥池の月は淋しく朝を待ち　曉星
(同)默々と工場街を月と行く　香峯
(同)寒月へ醉ふてかへれば塀長し　比古
(同)月影を背にうけ淋しい影みつめ　紫石
(人)去る人は去る月はたゞ白く　葉平
(地)あゝ月よお前と同じ空に居る　白瀧
(天)寂寥のどん底を行く青い月　香峯
(軸)よろめいてゐる月影は哀れまん　琴人

兼題　火　琴人選

冬空へ野火メラ〳〵と舌を出し　比古
妻病みて今日の火鉢を冷たく居　素月
火の消へた樣にカフェー客がなし　野洲
貸座敷火鉢冷たく待つてゐる　香峯
街頭の燈火淋しく秋が暮れ　一水
幾千年燈原の火は燃え立ちぬ　葉平
試驗前火を盛り上げて夜の机　弘法
メラ〳〵と甜めゆく火事へうつるに居　紫石
焚火あか〳〵ルンペン等哄笑し　木兎
(客)煙草の火すげのう貸され驛寒し　比古
(同)保險屋が來る〳〵火事がいきそに　四五磨
(同)遠のきて山燒のさみしがり　比古
(同)眞赤な火だ火だ火だ　即
(同)スイッチを切れ爐の灯を絶ぜや手を堪れ　葉平
(人)火の用心〳〵社長火を嫌ひ　四五磨
(地)劫火今ニヒリストに似て燃わる　素月
(天)熔鑛爐の火にたくましい男なり　比古
(軸)打て打て鍛冶師の意氣に火花散る　琴人

## キング喫茶店偶會（大阪）

一月二日　廊生　蔑乃報

王　樣

王樣が動けば列座膝が鳴り　琴人
印度人その王樣も黑いなり　水車
こつそりと馬車に乘る夜の若き王　機見女
月星の光りも王は眼にふれず　同
王樣の好みの貨幣出來てくる　亂耽
王樣の頭の惡い日に出合ひ　同
エジプトの事が王樣のみこめず　同
王樣の耳へ遠くの鳩時計　同
夢はとかれず王になつの日が續き　蔑乃
王樣は王樣ながら端役にて　同
王も王子も戀愛至上論者なる　同
イゴイスト王にさびしい日の多く　路郎
王樣の戀へ大きな月が出る　同
王樣の御意のまに〳〵日が永し　同
王冠なのせりや太陽たじろかせ　同

## 川柳光耀會 新年句會

竹内機見女報

一月八日、廣くなつたキング喫茶室に於て三三年度こそと意氣込む我が愛すべき光耀會の卵連は路郎師、葭乃女史の亟の許に勝手な氣陷を擧げて時の移るを知らず。女史は御自分の句の冗漫な點を指摘されて、光耀抄のともすれば陷らんとする缺點に反省を與へて下さる。こんな會合が月に幾度もあればと慾ふかき事この上なし。

席題　命令　葭乃選

命令のまに〳〵春の日がぬくし　機見女
一度だけ反抗したい十八九　貴志子
もの云はぬ牛馬筈にしたがわず　同
諾べなへぬ顔で女中は聞いて居る　同
（軸）云ひつぢばかり女將の長火鉢　葭乃
命令はたゞ聞き流すだけの事　同

席題　煙草　葭乃選

失業をしても煙草はやめられず　茂代
やせたい事の煙草の烟にむせ　機見女
洋裝の手前たばこも吸つて見る　貴志子
條件の一つ煙草も飲まぬとか　同
（軸）脫稿は近し煙草はもうしまひ　葭乃
まぼろしは消えず煙草を輪にふかし　同

兼題　意地　葭乃選

意地わるい人大阪になれてゐる　公子
失戀へだゞ金を蓄め金ため　貴志子
機會さへあれば曲げた意地を張り　茂代
意氣地なう戀女房に養はれ　同
意地がほぐれた朝の硝子戸　機見女
おみならの意地を嗤ひ金の艶　同
（軸）片意地な親子だまつて膳につく　葭乃
下戸の意地上戸の意地が辻でもめ　同
妻の意地物足らぬ程妬かぬなり　同

兼題　誘惑　葭乃選

誘惑に遺兒の双手を感じたり　機見女
赤い灯へ誘惑されぬ方が無理　茂代
誘惑の經驗もなく二十八　同
重役へたゞロボットで居る彼女　貴志子
闇を行く才覺もなく闇へ行く　同
（軸）誘惑の灯をタクシーで見て通り　葭乃
慢も知らず惡友肩を打ち　同
誘ひ手をことはる妻の聲を聞き　同

兼題　新年雜詠　葭乃選

竿ゆれる影を見つめて松の内　機見女
年賀狀長女の年もかいてゐる　公子
黎明の海へ大きく呼びかける　貴志子
子供等のかしこかつたも三ヶ日　同
陸膳の名代今年十となり　同

## 天王寺句報（大阪）

須崎豆秋報

題　惚れる　互選

お喋りを控へてソッと惚れる妓　葉光
惚れてから女すげない日もあつて　詩郎
惚れ〳〵と見入る親子の嫁さがし　南面子
惚れたのも娘はつきりせずにゐる　三郎
ほれられる少し手前で金がなし　柳村
物言ふてくれぬ男へ惚れてゐる　豆秋

# 編輯の窓

葭乃記

▼前號は非常な好評を博したので、路郎も喜んでゐます。本號からは二十頁以上增頁する事になりましたが定價は從來通り赤字時代の大勉强です、ぜひ〳〵御吹聽御愛讀を希ひます。

▲社並びに路郎宛への賀狀感謝してゐます。刷上つた賀狀も書く閑がなく四日からぶつ通しで發送してゐましたが或は御返しも出來なかつた方もあつたかと思はれるので私が代つて御禮とお詫びを申し上げます。

▲白髮を發見しても、動脈瘤が駱駝の背中のやうに隆起しても、若さを失はざらむとする路郎は頼まれた仕事には人一倍馬力をかけたがる。勢、睡眠時間を僅しか持たない彼氏の勞役過度は又しても彼を病床の人にさせます。

▲本社十週年祝賀句會も盛會を期待して路郎はその準備に傾倒してゐましたがとう〳〵大會の前日十四日から親子三人の病臥、看護の私は代理にも行けず殘念ながら不參しました。然し多數の方々が御出席下され、祝電なども澤山に重き盛會に祝賀會並びに懇親宴が無事終了したといふ報を受け、病床にあつて路郎は感涙にむせんで居ました本誌の將來に益々多端ですから一層の御聲援を願ひます。

▼舊冬別府の晃卓さんと編輯局の愚陀さんとが亡くなられました。前途を屬目してゐただけに、其悲報に接した路郎の落膽限りなしです。▼一月二十九日に愚陀晃卓追悼句會を道頓堀倶樂部で修しましたが（會報次號發表）路郎はこれ又病臥中で不參しました。▼愚陀さんの追悼記事は幼年時代からの親友亂耽さんが主として執筆されました。晃卓さんの追悼記事は記事の都合で次號へ延期しました。

▼二月四日は神戸支部の十週年です。路郎もそれには出かけたいやうに云つてゐますので、やがて床を離れるでせう病氣の御見舞狀を頂きました方々へあつく御禮申上げます

## 投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
▼光耀抄は女性作家に限る。
▼各地會報は半紙判の原稿紙に淸記の事。
▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
▼締切は嚴守されたし。
▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

## 募集

### 第十卷第四號課題

二月五日締切
（各題十句以內）

▼刄物　松盛琴人選
▼蛙　安西杏三選
▼花見　中島鐵洲選

### 第十卷第五號課題

三月五日締切
（各題十句以內）

▼座敷祭　高橋かほる選
▼旅　長崎柳秀選
▼寶物　吉田水車　廣江天痴人　共選

### 毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選
▼光耀抄（雜吟廿句）　麻生茂乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

### 社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

## 定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

## 廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます


昭和八年一月廿五日印刷
昭和八年二月一日發行

第十卷第二號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番


賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（圓館）　石塚
（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）小松はかりや

## 道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衞生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）


**古本は**

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

**公立社書店**

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番


### 加茂川句會

日時 二月十九日(日)午後六時半
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
兼題「卒業」 三句 司郎選
會費 金參拾錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方 京都支部

### 綠雨居偶會

(日時) 二月六日夜
(所) 大阪市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

### 螢ヶ池支部句會

(日時) 二月十二日午後一時
(所) 大阪阪急沿線刀根山病院内
幹事 龜井愚寵

### 川柳雜誌社十週年記念會

神戸支部
日時 二月四日(土)午後六時
兼題「上品」 楊井二南選
兼題「進む」 西村明珠選
講演「川柳の笑に就て」 日野華水選
講演「神戸ッ兒の今昔」 麻生路郎氏
庄萬よし氏
會費 金三十錢
會場 八宮神社内 楠町事務所
樓上(電大) 倉山電停下
車東半丁南側)
神戸市神戸區中山手通七丁目
一七七日野華水方
主催 川柳雜誌社神戸支部
後援 川柳雜誌社

## 短冊頒布

筆者 麻生路郎先生

上短冊一葉金參圓 送料不要
作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし(句の希望の方はお知らせ下さい)
大阪市住吉區平野西之町八三番地
川柳雜誌社事務所内、短冊頒布係

### 懸賞川柳募集

題 路郎選
「人氣」
一月十日締切
▼その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
▼▼賞品 秀逸數句謹謝を呈す
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

### 申込所

### 川柳手拭

路郎主幹の染筆 二種 金三拾錢(送料共)

### ▽川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊 價金拾二錢(送料共)
▼御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

# 川柳雑誌社關係の人々（順はろい）

**賛助員**

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　笠原路生　片岡直方　長崎柳秀　田中辰二　嘉納純　長野晴濱　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清司　淺田一　末弘嚴太郎　長岡半太郎　田村孝之介　吉田清　川村花菱　米村あん馬　吉岡鳥平　亀井花童子　岡田三面子　大谷五花村　大島濤明　山一歩　藤里好古　中澤濁水　三好計加　朝田新水　森東魚　奈良井柳人　水谷鮎美　白井梅里　阿部閑生　関本雅幽　庄萬よし

**客員**

伊藤彦造　篠原春雨　柴谷柴舟　前田雀郎　前田五健　安川久流美　長野吉高　窪田銀波楼　谷脇素文　田村孝之介　石森靜　春元紀太　西村山月　西村明珠　友淵貴山　大西八歩　谷村稔　立井登美坊　辻左馬　喜多春秋　北山悟郎　坂井拓水　櫻井圓角　高橋かほる　安西杏三　中見光路　麻生葭乃　中島鐵洲　住田亂耽　永田里十九　安井ひろし　主幹　楊井二　南麻生路郎　中野柳陽　西おさむ　水田光穂　三輪夏曉

**社友**

岩垣日本村　上野錦水　桑原京郎　姫田夕鐘　松下小柳子　山本雨迷　平井蒼太　日野華水　岩司郎　尼絲之助　生田翠夢　石曾根民郎　市塲沒食子　増位汀柳　奥野秀山　熊谷紅　福田鶴峰　越田久水　形一杉　太田朝陽　岩崎柳路　西田帥樂　松丘町二　松盛琴人　山本丹路　須崎豆秋　妹尾變人　吉田水車　橋本綠雨

**同人**

**編輯局（同人）**

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
函館支部（函館市）幹事亀井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事永田　里十九
螢ヶ池支部（大阪府）幹事石森　靜太
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
篠川支部（島根縣）幹事尼　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事平岩　司郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
堺支部（堺市）幹事八木　夜美路
松山支部（松山市）幹事坂井　拓水
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事生田　翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事奈良井　柳人
塗青支部（大阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井　英賀夫
光耀會（大阪）幹事竹内　機見女
萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野　秀山
北濱支部（大阪）幹事谷村　稔
今里支部（大阪）幹事吉田　水車

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和八年一月廿五日印刷納本　昭和八年二月一日發行

川柳雜誌（第一〇九號）

定價金三拾錢

祝創刊十周年記念

評判はお聽きでせう

紅茶はリプトン　珈琲は挽きたて

句作に・柳談に

足並みは揃ふ・キングへ・キングへ・イチニ・イチニ

ホームライクな喫茶室

南海線玉出

電話天下茶屋
二五七九番